白騎士パラドックス

ゴブリンゾンビ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小説でも漫画でも活躍の機会がない課金系幼馴染ヒロインのアリシアちゃんが、序盤から王子と合流するお話です。独自設定、オリジナル展開も多々あります。アイギスのメンテと同時に週１更新予定。

※アンナ、アリシア以外のキャラの恋愛要素が超絶薄味です。

※ガチャ要素も少ないです。

※王子も喋ります。

※詳しくは今後活動報告等を更新していきます

目次

1．思い出を手放した日 ―― 1

王都奪還編

1．終焉は唐突に ―― 8
2．王都を去る ―― 13
3．再会、しかし ―― 21
4．林道を往く ―― 28
5．近衛の盾とは ―― 35
6．廃墟での邂逅 ―― 42
7．手を伸ばす ―― 48
8．なけなしのメッキ ―― 56
9．明日を護る戦い ―― 65
10．帰還 ―― 73
10．5　幕間・エスタ小隊 ―― 80
11．不穏 ―― 85
12．試練と来訪者 ―― 93
13．見極め ―― 100
14．聖戦士の挑戦 ―― 105
15．模擬戦を終えて ―― 115

1．思い出を手放した日

少年は走る。名も知らぬ白銀の髪の少女の手を引き、城内を縫うように駆け続ける。その背後には、少年への殺意を剥き出しにして迫る複数の異形の姿。見上げるほどの赤い巨躯に緑のオーラを滾らせる、牛角と尾を持つ異形。その容姿はかつての千年戦争にて猛威を振るった魔物であるデーモンと合致していた。

「な、貴様何者だ！　ここを何処だと心得る！」

「散れ、雑魚め」

騒ぎを聞きつけ馳せた兵士達がデーモン達の腕の一振りで弾き飛ばされていく。彼我の実力差は少年――王子とて理解せざるを得ないものだった。

「……しかし随分脆いな？」

デーモンの一体が嘲笑混じりにそんな言葉を呟く。

「あの時代のアイツ等が異常なだけで、魔物が復活する前ならこんなもんなんだろ。こりゃゴブリンにも負けるってもんだ」

「違いない」

デーモン達が交わす会話。彼に出来る事と言えば、手を繋ぐ名も知れぬ少女と共にその場から離れることくらいだった。

「……」

緊張の糸が切れたデーモン達の間に生まれた僅かな隙。王子は外景を一瞥すると少女の手を引き、中庭へと転がり込んだ。中庭に規則正しく剪定された生垣は、彼らをすっぽりと飲み込んでみせる。

「……ね、ねぇ。あなた、誰？」

足を止め、少女はようやく口を開く機会が出来た。

「……」

王子は何も語らず指を差し、少女を王城外へと誘導する。少女が走り去ったのを見届けて、生垣の上へと一跳びで登った。玩具の剣を左手で握り締めながら。

王子の双眸にはっきりと映った異質。中庭の両端に、青白く煌く魔法陣が口を開けていた。そこから湧くように生まれ出る、デーモンの

数々。その中でも小柄な者は飛翔し、上空を旋回していた。王城の中庭は既に蓋をされ、魔界と呼ぶに相応しい地になっていた。
そしてこの地に閉じ込められたのは王子だけではない。中庭を中心に警備をしていた兵士達は、漏れなくこの地獄に身をやつしていた。
「……ぐあぁッ!?」
「雑魚共、我は王子に用があるのだ」
一蹴された兵士の悲鳴を聞きつけ駆け付ける。兵士を弾き飛ばしたデーモンは、ひと際怪物的な容貌をしていた。肌の色が、二つに割れるように青と人肌の色に別れている。まるで人の肉体を縫合したかのような悪魔は、醜悪な笑みを浮かべる。
「……」
「成程。配下を庇うように頭が前に立つか。その在り様、振る舞い。幼子とは言え、あの王子だという事か」
デーモンが振り上げた杖の頭には、戦斧の如き刃があしらわれていた。
「その心意気に免じ、せめて英雄らしく屠ってやろう。剣を手に死ぬがいい！」
それが無慈悲にも振り下ろされる。幼き王子にそれを回避することなど出来ようも無く、弾き飛ばされた。
「――子ッ!!」
幼き王子の耳に浸透する悲痛な叫び。聞いた事の無い、そしてどこか懐かしい声色を思い出す事はついに出来ないまま、視認できる世界は狭まっていく。

「――童は死の運命より……脱した」
その声は静水に落ちた一粒の水滴が如く響いた。黒き髪の少女の、古井戸のような深き蒼の瞳が悪魔らを俯瞰する。傍らに浮かび上がっていた彼女の虚像が、風に吹かれたかのように霧散していった。
「ありがとうございます、リンネさん」

リンネの隣に在った武器を持たぬ女性が礼を言う。彼女の髪色は丁度、幼き王子が逃がした幼女のそれに瓜二つであった。
「……既知の事象ゆえ、要らぬ礼じゃ。じゃが完治とはいかぬ。彼奴等を掃い、本格的に治癒を施そう」
突如現れた増援に悪魔らが怯んでいる隙に単騎が飛び出し、倒れ伏す少年と半人半魔の悪魔との間に割って入った。蒼の帽子の乗った白銀の髪を揺らし、マントを翻してハルバートをデーモンへと突きつける。あどけなさの残る顔つきながらその一挙一動は、騎士として鮮烈な輝きを放っていた。
「そこまでですっ！　王子からは離れて貰います!!」
「なっ――貴様ら!?　グッ、クソォ！」
半人半魔のデーモンは半狂乱で得物を振るう。一撃の破壊力は先ほどまでと同様、人の膂力を超えたものだ。だがその攻撃さえも、幼き騎士はハルバートを操り淡々といなしていく。
「ま、間に合ったー！」
少年が救った白銀の髪の少女、そして朱色の髪の小柄な魔女が同時に叫ぶ。そしてその傍には、バトルアクスを握った白髭の粗暴な男が気だるげにしていた。
「半分間に合ってねぇようなもんだろうが……」
一つ吐息を漏らしたそのとき、後ろから毛むくじゃらの腕がモーティマへと伸び、彼の頭を鷲掴みにした。角の生えた兜にでっぷりと出た風格溢れる腹、髭を蓄えたその男は山賊王の異名を取る男――名をコンラッドという。
「命を救えたのならなんぼってもんだ。だろう、モーティマ？」
「あ、ええはいそうっす。いいっす」
「それでいい……さぁて！　１０年前の王都に山賊魂、轟かせてやろうじゃあねぇか!!」
コンラッドの咆哮と例えても差し支えない雄叫び。それと同時に彼の周囲に、張り裂けんばかりの光の奔流が生まれる。戦場という砥石によって一時的に研ぎ澄まされた技能の発現、スキル。大男はそれを発動し、敵陣へと吶喊する。

「あー、アンナ……嬢ちゃんらはあの黒髪の隣で待ってろ」
「はーい！」
リンネの元へと向かったのを一瞥しモーティマは、コンラッドの後を追従して悪魔たちへと斬り込んでいった。
彼らに続いて戦場に現れたのは二人の兵士であった。
「へぇ、これが１０年前の真相って訳か」
緑を基調とした軽装の剣士。兵士長などという身分であることを感じさせない軽快な態度は、彼――ユリアンのトレードマークだった。
「無駄口を叩いている場合ではありませんよ」
もう一人は眼鏡をかけた麗人であった。名をケイティという。彼女は到着すると同時に戦場を見渡し、腰に差したレイピアを抜き去り臨戦態勢を取る。
「アリシアが支えていますが、未だ状況は切迫しています」
「分かってる……っての！」
二人同時に飛び出し、息のあったコンビネーションでデーモンに立ち向かう。屈強な悪魔に対し一人で挑むのは無謀なれど、二人の連携は単純な力量差を埋めるに余りあった。
「な、なんだなんだ！　幾ら未来の連中とはいえただの数人だ、やっちまえ！」
そう叫んだデーモンの前に、舞い降りる影があった。
「数の利は覆る――世の摂理だ」
それは人を象りし異形と形容していい存在であった。辛うじて人型を留めているものの、肌色は紫であり、甲殻のような翼をもつ。彼女の頭上に生えた角は、対峙する悪魔らのそれに近しいもの。
「……ま、魔神、だと……!?」
「お前達に恨みは無いが同情の余地も無い。鬼神の刻を刻もう」
魔神。本来はそれが人の側に立つ事すら有り得ない存在。悪魔達の上位種である彼女の紫炎を纏いし凶刃が神出鬼没に、縦横無尽に舞い踊る。その刃の元では、物理、魔術双方に耐性のある悪魔達の肉体すらも意味を為さなかった。

しばしの間をおいて、混迷極まった戦闘に終止符を打つかのように、壮麗なる王城の中庭に似つかわしくない駆動音が鳴り響く。無限軌道（キャタピラ）が生垣を蹂躙し、濛々と吐き出される蒸気（スチーム）が戦場を支配する。

「はいはーい！　マキナ様とスチームタンクのご到着だよー！」

巨大駆動機、スチームタンクに腰をかけ腕を組んでいる自信満々に告げる眼鏡をかけた青髪の少女。その傍らには駆動する機械の上で立ち、顔を引きつらせながらも粟色の髪の弓を握る少女の姿があった。

「ほら、いつもどおり援護はするから撃って撃って」

「わ、分かりました！　ソーマ、撃ちます！」

焦ってはいるがソーマの放つ矢には一切のブレが無い。寸分違わずに頭上を飛び交うデーモンらを捉え、穿っていく。彼女の矢でも頑強な悪魔を貫けるのは、スチームタンクが吐き出す煙――エリクサーにより、悪魔らの防御力が弱まっている事が要因として大きかった。

「ぐっ……くそッ!!」

幼き騎士――アリシアと切り結びつつも、半人半魔のデーモンは敗色濃厚であることを悟りつつあった。目の前の騎士すらも斬り殺せないばかりか、”彼”の登場すら許した為である。

「……」

寡黙を保ったまま悠然と戦場に現れた青年。黄金、白金、蒼光。絢爛豪華なる装備を纏った彼は、一種の神秘性をも内包していた。戦場に立つのみで味方に勝利を確信させるほどの圧倒的なカリスマ性。纏いし光の奔流は後光のようですらあった。

――女神アイギスの神器を纏いし救世主。配下を庇い倒れた少年の、未来の姿。

「グッ――！」

デーモンは遂に背を向け、逃走を開始した。彼の者の目指す先は自らが潜りし、この時間軸と彼の時間とを繋げる魔法陣――時空の門。かの門さえ潜ればデーモンは王子たちの手を逃れ別の時間軸へと逃げ延びることができる。

強き王子らを相手にする必要は無い。ひとまず逃避し、弱かった頃の王子らを撃破すればいい。それが時空魔術に手を染めたこのデーモンの出した結論だったのだ。

――だが今回ばかりは王子側も〝対策〟を講じていた。

「逃がしはしない」

藍のドレスに身を包みし魔術師オデット。魔を封じる秘法が杖先より迸り、魔力によって形成されている時空の門の存在を揺らがせる。きわめて高度な魔術である時空魔術、阻害された状態で無理に発動しようとすればどうなるか、分からぬデーモンではなかった。

迫りくる王子と騎士。二人の足元から湧き上がる光が、彼らの今の力を物語っていた。例えデーモン側が万全な状態であろうと、一瞬にして惨殺される。人と悪魔の間に、それほどまでの力量差が生まれていた。

「これで、終わりです」

「……死ね」

「我が――ッ！　我ガァッ、こんな、こんな所、で――!!!」

その絶叫が最後まで響くことは無かった。

それから幾数日が立ち、王城内も仮初めの平穏を取り戻していた。当然それは隠匿に隠匿を重ね、表向きの体裁を整えただけである。水面下ではこの事件に関して、様々な捜査が行われていた。だが――

「――どうもこうも手を引くよりほかあるまい」

この国、ログレス王国の現国王たる男は遂にそう判断した。

「ですが陛下……」

麗しき近衛騎士団長ミレイユが反論を唱えようとするも、国王のジェスチャーのみで抑えられる。

「突如城内に現れたデーモン、次期王位継承者が瀕死、更に何者かの交戦の痕跡。何れか一つでも国家の威信に関わろう。近衛騎士団の警

備も無かった以上、表に出れば無傷では済まん。隠蔽をしつつこれ以上の深入りは難しい」
「……」
「重要なのは、魔物共に対し如何に今の我らが無力であるかが図らずも露わになった事だ……」
「……はい」
その後幼き王子は、奇跡的にすぐ回復した。施されていた治癒が素晴らしかった為とは医師の見立てだ。とはいえ瀕死に至るまでのあの凄惨な記憶と、”誰か”についての記憶が一切合切失われていたが、後者に至っては、それを喪失した事にすら誰一人気づかなかった。
回復した王子はやがて、普段通りの生活に戻ろうとしていた。王子の目にふと読みかけていた本が飛び込む。それには花の栞が挟まれていた。白い花びらが特徴的な、小さな押し花の栞。
――これは自分と”誰か”にとって特別なものだった。そんな予感がよぎり、彼は頭を捻って答えを絞り出そうとする。が、結局彼はそれを思い出すことが終ぞ出来なかった。

少年が思い出を手放した日。王国の歴史に一枚目の栞が挟まれた日。

王都奪還編

1・終焉は唐突に

近衛騎士アリシアは、この日の任務について不服に感じていた。今日は国王陛下が政務官を引き連れ、城下町を視察する予定となっている。当然近衛騎士団は、団長ミレイユを始め多くの騎士が馳せ参じ、国王陛下を護衛している。だのに彼女はというと、近衛騎士団の中でただ一人王城の警備を任されたのだ。確かに王家の血族たる王子は城内に在るが、彼は彼で多くの兵士たちに守られている。

「……王城に何かあったら伝えに来なさい、かぁ」

上司であるミレイユに告げられた事を口から漏らす。それはミレイユひいては近衛騎士団にとって非常に大きな意味を持つ、過去に起こした汚点を反省したものなのだが、着任したばかりの新米騎士に国家的な隠匿を行った事柄について汲み取れというのも無理な話である。アリシアからすれば一端の兵士でも出来る任務を新米だから放り投げられたとしか考えられなかった。

ログレス王国。千年戦争の折活躍した、英雄王アーサー王の末裔が治めるごくごく平和な小国である。この国において対外的な脅威と言えば、紛争が多発する南方諸国くらいのもの。現在はかの地における紛争も小康状態にあり、ログレス王国と敵対する国家は周辺には存在しないのだ。かといって国内に不満が高まっている訳でもなく、現王の統治に大半の者が納得している。つまり王城に危機が訪れる可能性など、皆無に等しかった。

「……はぁ」

アリシアは小さく嘆息し視線を上げる。吹き抜けになった中庭の向こう、上の階層に彼女が近衛騎士を目指した目標がある。それは幼き日の静かで幸福な記憶。淡い初恋。今の彼女は、未だ目通りすら叶わないその目標に対して焦燥感に駆られつつあった。

「ねぇねぇユリアン。クレイブ前兵士長が王都に帰って来てるらしいよ？」

「マジか、そりゃ後で会いに行かなきゃな……っておーいアリア、今また敬語忘れてたぜ……」
「えーいいじゃんユリアンだし」
「あぁもう……お前いつか絶ッ対恥かくからな？　俺や王子はともかく、間違っても陛下の前でタメ口たたくなよ？」
「はーい」
　廊下を通っていく兵士達の漫才めいた会話を聞き流しながら、アリシアは懐から栞を取り出す。白い花びらが特徴的な、小さな押し花の栞。アリシアの活力の源泉でもあり、彼女の感情を掻き乱す厄介者でもあった。いっその事全て忘れて、親の期待通りに任務をこなせればどれだけ気楽か。彼女は脳裏をよぎったそれを否定して誤魔化す様に歩き出した。とはいえこの警備という任務がまた難儀で、何処をどれくらい警備しろという指示は一つも無かった。
「……警備の一環だし、いいよね」
　僅かばかり悪知恵が働いてしまったアリシア。白銀に輝くハルバートを握る手に力を込め、小走りにその場を去って行った。向かう先は王城内の旧資料室。普段人気のないそこは、彼女と彼にとって思い出の場所だった。

　資料室に近づくにつれ人通りは減っていく。それは資料室に普段人々が余り立ち寄らない場所であることを物語るようでもあった。
「……うん。見られてないよね」
　アリシアは人目を気にしながら進む。一応自らの行いがサボりに近しいものであるという自覚はあり、万が一上司に告げ口でもされればたまったものではないという認識からだ。とはいえ彼女にとって、人目を掻い潜って王城内を探索するのは朝飯前であった。
　彼女は幼少時代、近衛騎士である父に連れられ王城に出入りしていた事があった。その際暇を持て余した彼女は部屋を抜け出し、誰にも見つからず王城を探索して誰にも見つからずに部屋へと戻るという離れ業を無自覚に行い続けていたのだ。そして件の王子ともそんな冒険の最中で出会っている。子供の頃に出来た事を、出来ない訳もな

かった。
難なく警備をすり抜けたアリシアは逸る心を抑え、誰にも見られる事無く資料室に入っていった。
窓明かりが僅かに差すばかりの薄暗い資料室。紙とインクの織りなす独特の香りと埃っぽさが混ざり合うこの部屋は人影はおろか人の気配すらない。それは此処が旧資料室であるからであり、人の出入りも碌に無ければ整備もされていない。
そんな部屋の中でアリシアは一人立ち尽くす。床に浮かび上がる巨大な魔法陣。青みがかった光を放つそれは、異様な気配に満ちていた。肌を突き刺すような殺気すら感じさせる。アリシアは直感的に、手にしたハルバートを構えた。
魔法陣がひと際強く輝いたとき、光の中からそれの輪郭が浮かび上がる。背中から翼を生やした異形の姿。魔法陣の発光が落ち着いたときには、右半身が青肌の悪魔、左半身が人間といった、歪なデーモンの姿がはっきりと顕現していた。デーモンはアリシアを無視するように周囲を見渡すと、独り言のようにぼやき始める。
「少し時間がズレた様だな。まだ始まっていないのか。ならば期を改めるべきか――」
「デーモン……!?」
デーモン。千年戦争の折に現れたと伝わる凶悪な魔物。図体は人間の倍ほどで、魔法に耐性を持ち人外染みた怪力、魔力を誇ると伝わる。アリシアも書物でしか知り得なかった相手だが、人類に仇名す存在であることは間違いない。彼女が取るべき行動など一つしかなかった。
「待ちなさいっ！」
アリシアは動揺を隠す様に精一杯の気迫を込め、果敢にもデーモンへと穂先を突きつける。そこでようやくデーモンは、彼女の事を視認した。
「……貴様何者だ？」
「アリシア。近衛騎士です」
僅かばかりの間を経て、デーモンが返したアクションは嘲笑であっ

た。
「フ、ハハハハハッ!! こんな小娘が近衛だと!? いや失礼。これは最早滅ぶべくして滅んだと言って良いな、この国は！」
「……ッ！ 何を、訳の分からない事を！」
「貴様如きが理解せずとも良い、すぐに分かる事だ」
刹那、轟という音と共にアリシアは付近の書棚ごと斬り飛ばされる。デーモンからすれば、羽虫を払うような乱雑な一撃。それが杖先の刃による斬撃だとアリシアが認識出来た頃には既に、腹部を抉られるほどの重傷を負っていた。絶望的なまでの力量差を否応なしに叩き付けるのに十分な一撃。だというのにデーモンは次なる一撃を加えようとはしなかった。
「ふむ。あの軍に近衛騎士などいた覚えはないから、別に殺さずとも構わないのか？」
「……待ち、なさい！」
「精々そこで傍観するといい近衛騎士。貴様の護るべきすべてが、この時空より消失する様を……フハハハハッ！ アーハッハッハ！」
高笑いをあげながら姿を消したデーモン。一人残されたアリシアは最早動く気力すら残っておらず、本の山に仰向けに倒れている。鮮血が垂れ流しになる傷口を、蒼き穏やかな光が覆う。近衛騎士――ロイヤルガードのみに許された治癒の加護。安静にしていれば傷口は縫合され気力は回復する。アリシアは肩で息をしながら、立ち上がる気力が戻るのを待つしかなかった。
――その報を聞くまでは。
「――敵襲！ 敵襲ッ!!」
「……えっ」
兵士の声が資料室の遠くにて、引き裂くように響いた。とはいえこの国は、現状差し迫った危機に瀕していない。だがアリシアが先ほどまみえた光景、かのデーモンの語った滅亡。点と点は線にて繋がり、胸の動悸は加速していく。
資料室は人の通らない場所。アリシアは動けぬまま、誰にも見つからぬまま刻一刻と時間のみが過ぎていく。その間に外からは、悲鳴

や、怒号、剣戟音が責め立てるように押し寄せた。
「魔物だ、魔物が城内に押し寄せて来るぞ！」
「あ……くうっ」
最低限出血が収まったのを確認したアリシアは、持てる気力全てを振り絞って立ち上がる。よろめきながらもハルバートを拾い上げ、資料室を飛び出した。
平和だった王国に、ひとつの終焉が訪れようとしていた。

2．王都を去る

「……伝えなきゃ。ミレイユ団長に伝えなきゃ」

王城にて異変が起こったとき、それを伝える。つい先刻までは兵士でも出来ると高をくくっていたものの、既に状況は大きく変じていた。王城内に生きた人間は誰一人としておらず、代わりに魔物の姿が散見される。粗末な棍棒を持った背丈の小さい悪鬼といった風貌をした紫のゴブリンが現れては、アリシアの行く手を遮る。

「たぁッ！」

ハルバートによる渾身の一突きは、寸分の狂いなくゴブリンを抉り飛ばす。刺突によって攻め手を挫かれたゴブリンに対し、追い討ちのように斧刃を振り下ろしていく。人とゴブリンとでは体格の差異もあり、近衛騎士として訓練を積んでいた彼女はゴブリン側が一体であればほぼ無傷で絶命に至らせることが出来ていた。

が、その程度の優位は数の優越で容易に覆る。

「グギャギャッ！　ニンゲン！　ニンゲンッ！」

曲がり角より来たるは先ほどと同じくゴブリン、しかしその数は４体であった。アリシアもやむなく応戦する。適切な距離を保とうとステップを刻み、ハルバートを振るう。そんなやり取りの中、二体視界からはぐれた。力任せに振られる粗末な棍棒、その軌道は確かにアリシアを捉えていた。

「――ハッ！」

床を蹴る音。電撃的に降りかかる一閃。それはアリシアを狙ったものではなかった。断末魔が響き、血飛沫が近衛騎士のマントを染め上げる。アリシアが気づいた時には二度、三度と斬り付けられ息絶えたゴブリンの亡骸が転がった。

「ご無事ですか？」

赤い装いの、爽やかな金髪好青年という形容がぴたり当てはまる男。彼は整然と左手で盾を構え、呼吸一つ乱していない。しかしその好青年な風貌とは裏腹にその手に握られている直剣には血が滴り、先の斬撃の主であることを雄弁に物語っていた。

「わ、私は大丈夫です。貴方は……」
「クレイブ、とだけ。最後に見回りに来て正解だったようですね」
「……最後？　どういうことですか？」
　クレイブは少し目を見開く。まるで予想外のリアクションが帰って来たように。そこでアリシアは自分が墓穴を掘ってしまった事に気づいた。王城にまで魔物が侵攻している現状、どう考えても”状況を理解していないのはおかしい”と判断せざるを得ないような愚問だったと、口に出してから後悔する。だがクレイブはクレイブで深くを追求する事は無かった。
「状況が状況なので手短に。突如として王都の中央から魔物が湧き出ました。突然の襲撃によって国王陛下は逝去、生き残った王子は北の砦に。我々には逃走して女神の神殿を目指せと命じました」
「わ、私はミレイユ団長に伝えに行かないと……」
「……それは不可能です。外は既に――」
「――伝令！　連中は我々の所在を掴んだようです、通路を埋め尽くすほどのゴブリンが押し寄せてきます！」
　その報が聞こえる間にも、足音が波濤の如く押し寄せてきている。角から現れた兵士が発した報告を聞いたクレイブは深刻な面持ちで頷いた。
「分かったヘクター……我々は王子の命に従い、速やかに王城を脱出します。走れますか」
「……はい！」

　王城内を駆け抜ける三人。彼らが目にしたのは王城内の変わり果てた姿だった。窓は片端から割られ、装飾の類は徹底的に打ち砕かれている。通路内には敵味方の惨死骸が散乱し、鮮血に彩られていた。そんな中で役に立ったのがアリシアの王城内知識だった。
「裏口ならこっちの道が近道です！」
「了解……ヘクター！」
　アリシアは記憶を辿り王城脱出の最適ルートを割り出していく。

その先導は確かに意味を持つものであった。人通りが少ないという王城内の設計上の死角は、魔物に対しても一定の効果を発揮する。立ち塞がる障害を最低限斬り捨てながら、彼らは休むことなく走り続けた。そんな順調な進撃の終わりを告げたのは、他ならぬ人間であった。二人の兵士が一行の前に立ち塞がる。その装いは紛れもなく王国軍の兵士であるが、黒き瘴気に侵され変色していた。

「……魔物の放つ瘴気によって操られているようです」

クレイブの語った推測を肯定するように、立ち塞がった兵士達は剣を構える。　遥か昔、人と魔物が争いあった千年戦争の折に、一部の魔物が”人を支配する瘴気”というものを運用していた事は伝わっていた。操られる兵士達の様子は、その伝承に出てくる操られた人々のそれに酷似してるといえよう。魔物が全くいなかった訳ではないが、瘴気を放つほど強力な魔物はここ１０００年、殆ど出現した例を見なかった。

そうしてアリシアらが兵士と相対し立ち止まっている間にも、彼女らの後方からは無数の足音が押し寄せてきていた。一匹一匹は脆弱なゴブリンと言えど、圧倒的な数の優位に封殺されれば命運は決する。一行がやるべきことなど決していた。

「立ち塞がるならば止むを得ません。この世界に光を灯す為に」

「……ごめんなさい！」

クレイブとアリシアはほぼ同時に床を蹴った。疾風と形容できるほどの一撃。ハルバートの穂先は構える兵士の鎧を的確に捉え、構えごと突き崩し伏させる。クレイブは肩越しに剣を構え、それを一気に振り抜いた。渾身のそれでいて鮮やかな一撃は、大の大人を吹き飛ばすほどの威力を見せた。倒れ伏した兵士達を尻目に、一行は再び走り出す。もう既にゴブリン達は軍勢の先頭が視界の端に入るまで迫っていた。

「……た、すけ」

後方から上がった掠れ声の乞いは、発された瞬間にゴブリンの波へと消えた。アリシア達に取れる術などない。

「……ここから出られます！」

アリシアが差したのは何の変哲もない外に通じる窓だった。人がくぐれるほどの大窓であり、城の裏口のすぐ傍に繋がっている。迷いなく飛び出した彼らはそのまま、王城を脱出した。

「……近衛騎士団は無事でしょうか」

「あのミレイユ殿が率いているのですから、きっと」

クレイブが勇気づけるように語り掛けるも、アリシアの顔色は晴れない。王都を離れるにつれ、彼女は今日の出来事を俯瞰してみる事が出来つつあった。そして、失ったものの多さも。

「……アンナお姉様」

ぽつりと慕っていた従姉の名を漏らすアリシア。その言葉を偶然クレイブの耳は拾った。

「アンナ……もしかして、政務官殿の事でしょうか」

「――そう、その人です！　アンナお姉様はご無事なのですか⁉」

「はい。デーモンに襲われ窮地に陥った我々を、援軍を率いて救ってくださったのです。その後、王子と共に北の砦へと向かったらしいので、もしかしたら会えるかもしれませんよ」

「あぁ、良かった……！」

アリシアの表情が安堵に染まる。その目端には涙粒すら浮かんでいた。

かくして一行は無事に王城を脱出した――しかしそれは永劫に思えるほどに続く、魔物達との決戦の序幕に過ぎない。彼らの行く末にあるのは血路のみである。

「――強者の気配を感じたのだが、私の勘も随分鈍ったようだな」

抑揚のない声が無人の玉座の間に響く。立ち尽くす――いや、浮遊していると形容するのが適切な異形の存在。紫の髪は腰まで伸びており、その髪と同じ色の肌には節々まで紋様が刻まれ、甲殻のような翼が異質な存在感を醸す。携帯する剣は光の束のようであり、盾は皮

膜のような魔力で構築されている。女は何処をとっても異質な、人ならざる然して魔物とも決定的に違うオーラを帯びていた。
鬼神姫ラクシャーサ。魔界に住まう人ならざる存在、魔神である。此度の魔物の復活とは特に縁もなく”ただ強者の気配がしたから”この地へとやってきた。だがその気配すら、こちらの世界へと現れる途上でふと途絶えてしまったのだった。結果彼女は、特に人間を攻撃するでもなく傍観するのみに終始することになった。
「……人とは儚いな。あいつ程の者が愛した国も、一度転じればこの様か」
物言いたげな表情を浮かべながら、彼女は玉座の淵を指でなぞる。玉座の間はそこに在るラクシャーサの風貌もあって沈静で厳かな風情すら漂っていた。
そんな空気を打ち破る様に玉座の間へと現れた者がいた。人間の倍はあろう体躯。黒衣の胸元からは白骨が剥き出しとなっており、頭蓋の本来眼球がある場所には怪しく煌く光球が灯っているのみ。ゴブリンなどの魔物とは比べ物にならぬ威圧感を放つ彼の者の種族はリッチという。杖の魔力を用い凶悪な魔術を行使する上級アンデッドである。
「貴様、戦闘に参加しないどころか追撃すらせぬのか」
「弱者を虐げる趣味はないんだ」
「強者の余裕というものか。私の最も嫌悪するものだ」
「興味もないな」
ラクシャーサは薄く笑みを作り、掌底を眼前へと突き出す。刹那空間はいとも容易く引き裂かれる。現れたのは”門”とでも呼べる代物。紫光が迸り、禍々しい魔力を吐き出し続ける。この世界、物質界と魔界を繋ぐ通称『魔界の門』。それは魔に通ずる者にしか開けない。
ラクシャーサは門を開くや否や、さっさとそれへと入ってしまった。すぐに門は閉じ、玉座の間にはリッチ一人が残される。
「これだから魔神って奴は嫌いなんだ。どいつもこいつも気まま過ぎる」
また新たな声が上がり、リッチは振り返る。

「バフォメットか」
　リッチとは対照的な野太い声の巨大な魔物。山羊の頭と黒翼を持ち、刃のみで人の背丈ほどある片刃剣を獲物とする黒毛に覆われし怪物、バフォメット。デーモンの一種であり魔法に対する耐性は無いものの、その膂力は人のそれを軽々超える。
「前哨戦は片付いたな。奇襲だが、存外うまく事が運んだ。ゴブリンとオーガに殺されるようなら、いずれ誰かが殺してたな」
「……国王を討ち取ったのが誰か、判別がつかぬのは問題だが」
　リッチらは直接国王を撃破した訳ではなかった。事前に掴んでいた国王の所在地に出向けば、既に死体となっていただけ。巨躯から繰り出された撲殺と判断できた為、ひとまずオーガによるものと推定したのだった。
「俺は北の砦へと向かう。逃げた王子共を完膚なきまでに八つ裂きにして見せよう」
　バフォメットは鼻息を荒げるが、リッチは首を横に振った。
「待て。貴様には東へ赴いてもらう」
「……何故だ？」
「二つある。我らの目的は人間と、各地に分散する魔物の封印の確保。その為にこれより東へ版図を伸ばす予定だ。北、西と違い小国が並び、南のように目立った武力もない為、侵略も容易。その際の橋頭保として東の砦を用いるつもりでいる。今後の動きのためにそちらの制圧を依頼したい」
「二つと言ったな。もう一つは？」
「……王国内に封印されし、古の魔物」
　その名を聞いた瞬間、バフォメットは愕然とした。興奮のあまり一歩前へと踏み出してしまうほどだ。
「……まさか！　分かったのか、あのお方が封印された場所が！」
「大雑把にな。だからこそ、東部は完全に抑えねばならぬ」
「任された！　手近な兵を借りるぞ」
「あぁ待て」
　玉座の間を去ろうとしたバフォメットだが、鬱陶しげに振り返る。

「住民は無闇に殺さぬよう指示を出せ。後で使う」
「……あぁ、何時もの人体弄りか。陰気なものだ」
バフォメットは捨て台詞を吐いて、蹄で足音を掻き鳴らしながら玉座の間を退出した。一人残されたリッチはやむを得ず玉座に腰かける。
「……そもそもアレの動きなど些末事だ。大勢に影響はない」
リッチは誰が見ても分かるほどに苛立っていた。急いでいるといってもいい。バフォメットの戦闘能力及び指揮能力はリッチも認める所である。王都を埋め尽くすほどのゴブリンやオーガの指揮など、リッチのみでは出来ない芸当であったのは事実。それでも悪魔とアンデッドという種族差がある以上、反りが合わない所があるのはやむを得ない事だ。
だがそれ以上に彼を駆り立てるのは自己の境遇だった。
「少なくともビフロンスが復活する前には奴を越えねば、私の自我も消え失せる……封印が弱まっている以上、最早一刻の猶予もない」
彼が急いている理由、それはリッチという自己の種族が、自己より強力な死霊使いに遭遇してしまった場合、問答無用で隷属させられることだ。当然そうなれば自由は消滅し、それまで手に入れたすべては両の手から零れ落ちる。
彼が特に懸念しているのは、魔界に封じられた最強の死霊術士ビフロンスの存在だ。今は女神アイギスの封印により、高位の魔神はそのままの姿ではこの世界――物質界に出ることが叶わない。が、一度こちらの世界に顔を出せば世界中のアンデッドは彼の者の傘下に吸収されるのは自明だった。
リッチはひとまずこの物質界にある知識を吸収する事を選んだ。その為に王都を攻め落とし勢力を拡大、それを維持しつつ各国からアンデッドに関する知識を吸収し、研究を進め自己のランクアップを計る。途方もなく壮大で分の悪い賭けは、今のところ最高の滑り出しを見せていた。
「――皮肉なものだ。刻を求めて不死へと至ったのに、却って死期が迫るばかりとは」

リッチの双眸に灯る光が、燃える炎のように揺らめいた。

3．再会、しかし

王都を脱出した三人は数日の逃避行の末、北の砦へと辿り着くことが出来た。砦の北には女神神殿を内包する森林が広がり、更にその向こうには、シビラ姫が治める北の大国が存在する。かの砦は王国と北の大国との窓口の役割を持っていた。

守兵達から歓声を受けながら入城したアリシア達三人は、王子に謁見する運びとなった。砦の一室へと通され、人数分の椅子が用意される。煉瓦造りの堅牢無骨な砦だが、彼女たちにとってはようやく辿り着いた心休まる地である。だが――

「あ、えっと……あぁ……」

「……どうしたのですか。そわそわして」

椅子に座るアリシアは、誰から見ても怪しいくらいに挙動不審であった。髪の毛をしきりに弄りだしたり、身だしなみを忙しなく確認したり。ゴブリンの血飛沫を浴びたマントに関してはどうしようもなかったが。突然そんな事を始めれば、疑惑の眼差しを向けられるのも無理はない事だった。

「だ、だって！　王子とお会いするなんてそんな機会、滅多にないじゃないですか」

アリシアは身振り手振りを駆使して誤魔化そうとするものの、クレイブらの疑惑の眼差しは晴れない。彼女にとっては図らずも積年の目標を達成し得る機会が転がり込んできたに等しい。近衛騎士になったとはいえまだまだ幼い彼女に、平静さを保つことなど出来ようはずがなかった。とはいえアリシアが語る内容と、兵士達の持つ王子像とは随分と乖離があるのも事実である。

「……私が知る頃の王子は、よく兵士に混ざって鍛錬をしていたように思いますが……ヘクター。どうでしたか？」

「あ、はい！　確かに我々兵士は頻繁に稽古をつけて頂きました」

クレイブは「そうですよね」と相槌を打ち、改めて現在の王子が自分の王子像と変わっていない事を再確認する。アリシアだけが取り残されていた。

「あ、あれ？　私近衛騎士になってから会った事ないんですけど」
「……失礼なのは承知ですが、本当に近衛騎士なのですか？」
「はい……そうは見えないとよく言われます……」
　先ほどまでの浮かれ方から一転、がくりとうな垂れるアリシア。裏を返せば、真面目に近衛騎士として勤めていれば新米の身でも割とすぐに会う機会があったかもしれないという事なのだが、今の彼女には難しい発想の転換だった。
「……話は変わるがヘクター。君は深緑の町の衛兵だったな。どうして王都に？」
「定例報告の為に出向していたのです。偶然みたいなものです、兵士長と同じく」
「……そうか。そうだな」
　ヘクターとクレイブが笑い合う中、アリシアはただ一人、基本的な事を知らないが為に蚊帳の外といった状態だった。
「あの……深緑の町って？」
「御存じありませんでしたか。ここからすぐにある、森を切り拓いて出来た田園都市です。北の要所といっていいでしょう。この砦と同じく北の大国との交流拠点でして、平時は活気のある所なんですよ」
「へぇ。ヘクターさんって結構田舎の人なんですね」
　アリシアの発した言葉は子供の質問のように素直で、しかし場を凍らせる力を持っていた。アリシア自身も見下すつもりで口走った訳でないが、ヘクターがたった一言で受けたダメージは、彼が何一つ反応出来ず閉口してしまう程だった。アリシアの従姉譲りの、天然ものの毒舌癖である。気まずい沈黙が流れて数分、木の扉が音を立ててゆっくりと開いた。白銀の髪が足音と共に流れる。部屋に入って来た女性。頭部には赤いヘアバンド。首にはフリルの施されたチョーカーがついており、胸元は大きく空いている。顔はアリシアと瓜二つであったが、装いや雰囲気はだいぶ異なっていた。女性は部屋にいたアリシアを見るや否や息を大きく飲む。
「――アリシア!?」
「アンナお姉様……！」

「アリシア！　あぁ、良かった……！」
　二人は衝動的に抱き合った。入室した人物、政務官アンナはアリシアの従姉である。アンナは今は亡き国王と共に城下の視察をしていたが、魔物の急襲に遭い王の遺言を預かった後、城に戻り彼の逝去を王子に伝えている。その後王子が素早く城を脱出し、付き従った彼女はこうして此処に辿り着いたのだった。彼女からしてもアリシアは行方知れずになっていた大切な存在。抱きしめる力も自然と強いものになっていた。
　二人の高揚が程々に落ち着いたのを見計らってクレイブは口を開いた。
「政務官殿。救援ありがとうございました……あれが無ければ今頃我々は、デーモンに殺されていたでしょう」
「……えっと、何の話でしょう？」
「なんですと……」
　クレイブとヘクターが顔を見合わせ目を瞬かせるが、少なくともアンナが嘘を語っている様にも見えなければ、そうする理由も無かった。クレイブは王都脱出直前の光景を想起する。
　――恐ろしいまでの力を持つ勇者達を従え、襲い来るデーモン達を鎧袖一触した王子とアンナ率いる王国軍を。大地を抉り雲を穿つ夢幻などあるはずもない。だが同時にあれだけの戦力が王国内に存在するはずもないことも事実であり、いっそ白昼夢として片づける方が余程現実味に溢れていた。
　ただこの場においてアリシアだけはデーモンという言葉に思い当たる節があった。とはいえあの半身人間半身悪魔のデーモンはすぐさま魔法陣の彼方へと消え失せており、関連こそあれ主犯クラスでない事は確実なことは彼女の視点から理解できていた。それに何よりそれを話せば自身のサボりについても露見する。ひとまず黙っておこうとアリシアは考えた。
「失礼。どうも我々は窮地にあって在らぬものを幻視したようです。お忘れください」
　クレイブはそう言って話題を切り上げるより他なかった。そして

それとほぼ時を同じくするように靴音が響く。魔物達の起こした狂騒とは対照的な気質の、意識を覚醒させるような気配。”彼”が部屋に現れた瞬間、室内の空気が引き締まる。前髪で目元が隠れた青年。飾り気のない鎧を纏い右腰に長剣を差している様は”王子”という形容を躊躇う無骨さがある。そこに、資料室で一人本を読んでいた無口の少年の面影はなかった。

「……」

「王子……！」

王子は歩み寄ってクレイブ、ヘクターと続けて握手を交わし、そこでようやく口元を緩めた。

「……よく戻って来てくれた。クレイブ、ヘクター」

深々と頭を垂れるクレイブ達からゆっくりと視線を動かす。先ほどまで抱きしめ合っていたアリシアとアンナの方へと。

「この娘はアリシア。新米の近衛騎士で、私の従妹にあたります」

「は、はじめまして！　近衛騎士団のアリシアです！」

「……無事でよかった」

「あっ……」

王子にそっと手を取られ、それを両手で握られるアリシア。これまで積み重ねた様々な感情が入り混じりながらアリシアは、茫然と手を握られていた。

「……初対面だな？　よろしく頼む」

「あ、はい。精一杯お守り致します」

徐々に微かな違和感、認識の相違はその時点で決定的となった。アリシアがそれ以上言葉を紡ぐ前に王子は手を放す。

「アンナ。クレイブ達に今後の予定を伝えておいてくれ」

「了解しました」

アンナの返事を受け取って、王子は部屋を去って行った。一連の出来事は僅か数分足らずの間に行われ、しかし大きく影響を与える。それが王子という男の在りようだった。そんな中、特にアリシアには絶大な影響を残していくこととなった。

「……あれ。もしかして、あれ？」

長きに渡り想い続けた相手に忘れられていた。硬直してしまったアリシアを傍目で見たアンナは、軽く咳払いをする。
「今後の予定ですが――この砦の守備をベルナール重歩兵長に任せ、王子は少人数の精鋭を連れ女神の神殿を目指します」
「ベルナール重歩兵長ですか、心強いですね。残す兵数は？」
「兵士２２０名、重装歩兵１３０名、弓兵１２０名、魔術師２２名。周辺町村から徴募した衛兵や民兵も含めて、これが精一杯です」
「素人込みで５００名弱ですか……」
王国内の各町村には山賊などの対策として衛兵隊というものが現地出身の住民によって結成されており、今回はそれを予備役として利用した形にある。だが衛兵隊の規模は所属する町村によって変動する。深緑の町のような比較的大きな町ならば集団を指揮する経験がある者もいるが、過疎村の衛兵隊など精々数人単位である。いきなり兵士長のように扱うのも酷であった。結果として指揮官不足に陥るのはやむを得ない事であるが、それすら最重要課題には上らない程度に状況は切迫していた。
「重歩兵長は、周辺地形も利用して１週間は遅滞可能との見解を示しています……」
「私も同意見です。ですが懸念も」
「……強大な魔物が現れてしまったら、手の打ちようがない」
王都で目の当たりにしたゴブリンやオーガなど比較にならない怪物。人間の倍の体躯を持つ杖を持った骨の魔物と、同程度の体格の翼の生えた山羊の魔物。それらについては現時点の戦力では対策のしようがない。
「この国が独立を維持する最後の賭け、それがアイギス様。私はそう信奉しています」
それは何も、アンナが敬虔なアイギス信徒であるからだけではない。最早この騒動は人智に余ると誰もが薄々勘付いているのだ。王子を、現在半ば放棄されていた女神の神殿へと向かわせるという狂った方針が平然と受け入れられている事が、何よりの証明である。
王国軍――そしてクレイブにとっては、一つ片付けねばならない事

があった。
「クレイブ前兵士長。今一度、国の為に剣を取っては頂けますか」
「元よりそのつもりです。この剣、この国の未来の為に捧げましょう」
「ありがとうございます。正式な任命は、追って」
　アンナは、クレイブから快い返事を貰えた事にほっと息を吐いた。クレイブはかつて兵士長だったが、現状ただの傭兵でしかない。指揮を執る者が軒並み王城を離れていた為、異変を察して王城へと参じた際に王子とアンナから暫定的に指揮権を預けられたに過ぎなかった。兵士達が皆クレイブの顔を覚えていたから出来た荒業である。だがここは北の大国に近い辺境。王国の、国家としての体裁は半ば崩壊しているとはいえクレイブの正式な地位を認めておく事は重要であった。
「……ありがとうございます。女神の神殿へは王子と私、クレイブさん、ソーマさん、アリサさんで赴こうと考えています。ヘクターさんはこの砦に残り、ベルナール重歩兵長の指揮下に入ってください」
「了解しました！」
　色よい返事をしたヘクターとは対照的に、クレイブは難色を示す。
「現地の指揮はよろしいのですか？　私は残るべきでは」
「……万が一、女神の神殿で何の成果も上げられなかった場合、王子には北の大国へと亡命して頂くこととなります。行軍速度を早めるために少数精鋭の体を取りますが――だからこそ腕利きが必要です」
　クレイブの顔つきがさっと変わる。女神の神殿に赴き、一体何が起こるのか。それが分からない現状で最もとる可能性が高い方針が、この地に集う兵士を犠牲にした亡命。現実的ではあるものの、受け入れがたい話であった。
「それとは別に、敵の侵攻の本格化までには往復出来るよう進路の最適化を行っています。一剣士、戦闘員としての能力を買っての要請です」
「承知しました」
　クレイブの了承を聞き受け、アンナは放置していた従妹の方へと視線を向ける。

「後はアリシアですが……」
「行きます！」
アンナは予想外に勢いの良い返事が返って来た事に驚いた。先ほどまで硬直していたアリシアの目には既に生気が戻っている。
「私は近衛騎士ですし、王子の傍にいるべきだと思います」
「……そうね。では王子にもそのように伝えておきます。少し休息時間を取った後、女神の神殿を目指しましょう」
――四方は暗陰に覆われ。英雄譚の幕開けはまだ遠く。

4．林道を往く

遥か昔、千年戦争と呼ばれる魔物との戦争があった。女神アイギスの加護を受けた男が魔王を撃破し、魔物達を女神アイギスがその身に封印してそれは終結。男はその後、国を建国し王となる――

ログレス王国の建国史において、千年戦争や女神アイギスに纏わる神話はこれ以上なく重要な役割を果たしていたはずだった。だがその女神アイギスを祀る神殿は森の奥深くに遺棄されている。何故国家威信の骨子がそんな体たらくとなってしまったのか、それでもなおアイギス信徒が近隣諸国に多数存在し、神殿の有り様を変えようという運動すら起こさなかったのか。絶望に背中を押されながら林道を進む王子一行にそんな歴史事実を探求する余裕などなく、後世の歴史家に判断を委ねるより他なかった。

アリシアは道すがら初対面の同行者と自己紹介を行っていた。重苦しい空気は三人の少女らの談笑により鳴りを潜めている。

「歳は私達と変わらなさそうなのに近衛騎士って凄いですね！」

亜麻色の長髪を揺らしながらまだ幼さの残る少女ソーマが微笑みかける。ソーマの生まれは狩人なのだが、弓以外の家事等はさっぱりだった。そこで彼女の両親によって、花嫁修業の一環として王城の侍女として奉公に出された経緯があるのだが、結果は彼女が現在背負っている弓と矢筒が示す通りである。

「よく本当に戦えるのかとか、そもそも本当に近衛騎士なのかとか言われます」

「あ、あはは……」

苦笑を浮かべている青髪の少女の名はアリサという。彼女は癒し手であり、北の大国に在る神学校を卒業した認定ヒーラーである証の、黒いフードを被っている。胸に抱えている巨大な宝玉が施された杖は、癒しの力を行使する為のものだ。彼女は平和な王都に在った頃から親密な間柄にあった。彼女らにとって、王城に勤める歳の近い女友達というのは貴重だったのだ。

「前は賑やかですね」

「……」
アンナの声に、王子は沈黙を返すだけだった。前を進む三人の少し後方に王子とアンナがつけ、周囲を警戒しながら進んでいた。林道の側面は樹木が鬱蒼と生い茂っており人の侵入を拒んでいる。一度入れば最後、脱出が困難であることを容易に想像させるほどに。それでも一行は何の障害もなく進行していた。元より進行方向でのリスクなど山賊程度、魔物が南から迫っている以上、来た道を引き返す方が余程リスクがあるくらい――そのはずだった。
ふとソーマが顔を上げ、木々の隙間から覗く青空を睨む。鳥の群れが一行の上空を北から南へと飛び去って行った。
「鳥が逃げ去って行きます……丁度向こうからです」
「あ、ホントだ……良く気づきましたね」
ようやく気付いたアリシアが空を仰ぐ。既に鳥達は彼女らの頭上を通り過ぎようとしていた。
「ソーマちゃんは元狩人なんですよ。森の事はお任せです」
アリサの説明にアリシアは「へぇ～」と素直に感嘆していたが、当のソーマはというと深刻な表情で口元に拳を当てていた。
「でもあれは、あまり良い傾向じゃないです。鳥が逃げていくような何かがあったという事ですから」
ソーマは後ろの王子達に目配せをする。
「……行きましょう王子」
アンナの言を王子が無言で首肯する。それとほぼ同時だった。金髪の兵士が進路から帰還する。先行していたクレイブである。
「――王子！　林道の先に魔物の軍勢が！」
もたらされたそれは、魔物は王都から復活したと思い込んでいた一行を愕然とさせるのに十分な情報だった。
「魔物……！」
咄嗟にアリシアの脳裏に浮かんだのは、あの半人半悪魔といった容貌の悪魔。醜悪な笑みを浮かべ、一連の騒動を予見し、『生かしていようが支障ない』と自分に情けをかけたアレであった。だが彼女の予想はすぐに裏切られる事となる。

「クレイブさん、魔物の数は？　種類は？」
「ゴブリンとガーゴイル。そして魔物に操られたと思われる狼。合計５０弱と言った所です。恐らくすぐにやって来るかと」
　アンナの質問に対し、クレイブの答えは簡潔だった。そしてこれから一行がやるべき事も一つしかない。各々は自らの武器を手に取り、構える。アンナは自身の隣に立つ、彼女の主の姿を見やった。
「王子。闘いましょう」
「……」
　王子は無言で右腰に帯びた剣を引き抜き、左手のみで持ち上げて掲げて見せた。マントは風に舞い、刃は陽の光を浴びて神々しく輝く。御伽噺の英雄さながらの姿に、周りの者は魅入る他なかった。
「――完全なる勝利を」
　気負うことも無く。怯える事も無く。王子は平静を保ったままに宣言する。王国の絶対的窮地の中で、王子に宿る英雄の血筋は着実に目覚めつつあった。ゆるりと振り下ろされる剣の先、林道の先に敵軍の先陣が顔を出す。灰の剛毛に覆われた大狼。それが数体、牙を剥き出しにして疾駆する。本来狼に限らず、自然に生きる動物は人間を警戒するものなのだが、かの狼達にそういった気配は皆無だった。あるのはただ、人類に対する明確な殺意のみである。
「……正常な判断力すら、奪われているんですね」
　言葉を紡ぐソーマの肩に力が籠もる。番えられた矢は、ソーマの細腕からは想像もできない程の速度を得て放たれた。風切りの音が、生存を賭けた闘争の始まりを告げる。
「……」
「あっ、王子！　待ってください！」
　ほぼ同時に王子は剣を片手に走り出す。それに追い縋る様にアリシア、アリサも続いた。その場に残ったのはアンナとクレイブのみである。
「私はここに残りましょう。必要であれば、ですが」
「……」
　クレイブの意味深な呟きに、アンナは俯いて沈黙を返すだけだっ

た。
　ソーマは背負ってきた矢筒から出し惜しみする事無く矢を取り出し、ひたすらに射出する。そのいずれもが百発百中であり、先陣を切る狼達を穿っていく。肉を抉り、灰毛は鮮血に染まる。それでも狼は足を止めない。止まる気配を見せない。死に直結するほどの重傷を負いながら一切の衰弱を見せない。先頭を走る三体の狼は、さながら一個体のように統率された動きで一斉に襲い掛かる。その先に見据えるのは王子ただ一人。察知したアリシアの動きは素早かった。
「――危ないっ！」
　アリシアが強引に体を滑り込ませる。その拍子に振るわれた槍斧の斬撃は、二匹の狼の鼻先を掠めるに留まった。しかし――
「……！」
　王子は呆然と立ち尽くしていた訳ではなく、迎撃の構えを取っていた。カウンターの為に今にも振り抜かれんとしていた剣は完全に勢いを殺される。刹那一匹の狼がアリシアの右をすり抜け、王子へと飛び掛かった。
　王子は咄嗟に右腕をかざす。疾駆の勢いそのままに齧りついた狼を片腕で持ち上げ、それの無防備な腹へと左手に握る剣を捻じ込む。放り捨てられた狼は、糸が切れた人形のように動かなくなっていた。すぐさま癒しの光が爪牙に抉られた王子の右腕に降り注ぐ。治癒術を行使したアリサがいるのは最前線の王子達、最後尾のアンナ達からそれぞれ１０ｍほど離れた位置であり、その傍らではソーマが控えていた。
「ソーマちゃん、矢は？」
「後少し残ってるけど……来た！」
　先陣には既に第二波、ゴブリンの軍勢が到達しようとしていた。粗悪な棍棒を握る紫肌のそれらは、下卑た嘲笑を奏でながら進軍する。統率されている様子は見受けられない。王子とアリシアはそれぞれ武器を構え、真っ向から立ち塞がる。
　だがソーマはそれ以上の脅威に対し目を凝らす。木陰の向こう、上空を飛翔する悪魔の羽をはためかせる灰色の魔物を。

「……ガーゴイル！」
ソーマの目に映ったそれは王都でも見かけた魔物、ガーゴイルだった。ガーゴイルの特異な傾向として、兵士には一切攻撃を仕掛けない事。そしてもう一つ。戦闘能力の一切ない民間人のみを明確に見分けて襲撃し、惨殺する事。ソーマ達の背後には砦が、その周辺には深緑の町を含めた人々の営みがある。例え少数であろうと到達させれば被害は出る。戦闘能力のある王子達は無傷でやり過ごせるが、それは王子の命じた完全なる勝利には程遠い。
「……」
アリシアと王子はゴブリンとの戦闘に突入した。ゴブリン相手に縦横無尽に切り結ぶ王子はソーマを一瞥し、小さく頷く。王子の意図を察したソーマは、残り少なくなった矢を矢筒から拾い上げ、ガーゴイルの群れを対象として射出した。流れるような一連の動きは、並の兵士をも凌駕する職人芸の域に達していた。
「狩らせて貰います、全部ッ！」
一矢たりとも外さない。翼のはためき、手足の動き、遥かに遠方を舞う相手の微細な動きを察知し、矢が届くまでの移動距離や回避行動すらも読み切って。山なりに放たれる矢の軌道に、ガーゴイルは吸い込まれていく。だが如何に神業の使い手であろうと、たった一人の射手が全てを撃墜するのは難しい。ガーゴイルは一匹また一匹と撃墜されていくも、矢雨を潜り抜けた最後の一体が、アンナ達の遥か後方へと浸透していた。その様はソーマ達から見て、最早黒点と形容する他ない程だ。常識的な矢の射程などとうに越えている。だがそれでもソーマには意地があった。
「――届かせる！」
戦場の機運に乗せられたのか、はたまた高揚か。彼女の集中力は平時の比ではない程に鋭敏化していた。敵は最早戦場に在らず。されど彼女は弓を射る。研ぎ澄まされた感性がその無謀なる挑戦を後押しし、鏃は煌光を返しながら宙を切った。
――黒点の力なき急降下。それの指し示す所はつまり、放たれた矢が対象を貫いたという事だ。

「やった……やった！」
「ソーマちゃん……！」
ソーマは、隣にいたアリサと顔を見合わせる。安堵に染まった彼女の表情からは険しさはすっかり抜け落ちていた。
一方の王子とアリシアも、ゴブリン達との戦闘を済ませていた。新米とはいえ近衛騎士のアリシアは勿論、王子も生粋の武闘派である。平時ですら兵士達と真剣にて立ち会い訓練をしており、不測の事態とは言え個々の力量に劣るゴブリン如きに遅れを取る道理はなかった。しかし戦闘自体は終わったがアリシアの表情は晴れない。申し訳なさそうに王子の元に駆け寄る。
「お、王子……」
「……気に病むな」
アリシアの頭の青いベレー帽の上に王子はあやすように手で叩く。戦闘が終わったのを確認して、アンナとクレイブ、ソーマとアリサが王子の元へと駆けつけた。
「お見事で御座います王子。進みましょうか」
「待ってください！」

ソーマが指さした先、彼らは道の向こうから現れた。十人程の集団であり、いずれも粗野な格好に身を包んだ荒くれ男だった。彼らが堅気の人間でない事は、王子達一行から見ても明らかだった。
「やっぱりいやがったな。アイツらの言ってた通りだぜ」
集団の先頭に立つ白髭の男が風貌相応の低い声を発する。彼は他の男達とは一線を画すような、威風堂々とした容貌をしていた。獣ともつかぬ頭骨を額当てのように被り、恰幅のある肉体の各所には古傷のようなものが鮮明に残っている。男の右手に握られた巨大な両刃のバトルアクスはただならぬ威圧感を醸していた。王子一行と男達。邂逅した双方の間合い十数m間に只ならぬ緊張感が漂う。
「その出で立ち……まさか山賊!?　始めて見ました」
剣呑とした空気を引き裂いたのはそんな、アリシアのある意味場違

いな発言だった。今にも襲い掛からんと殺気立っていた荒くれ男達の表情にも困惑の色が滲み、殺気立った気配は行き場を失う。
「いやまぁ、そうなんだが……その反応はちょいとズレちゃいないか嬢ちゃん」
「私は近衛騎士アリシア！　山賊なんかに負けません！」
名乗りを上げ、アリシアは王子達を庇う様に躍り出る。そして、そのままハルバートの穂先を山賊達に向けて突きつけた。
「近衛ぇ？　そうは見えねぇなぁ……」
「ひ、人が気にしてる事をぉ！　泣いて謝っても許しませんから！」
「お頭。長話はそのくらいに収めるべきだ」
そう声をかけながら山賊達の一群から一人の男が、頭と呼ばれた白髭の男の隣に立った。茶色の髪を後ろに束ねた肌色の濃いその男は、黄金の眼で王子達を見据える。
「見た目に関わらず実力者である事もあると、先ほど目の当たりにしたはずだ」
「わぁってるよバーガン」
山賊の頭は鬱陶しげに髪を掻きむしり、獲物を狙う野獣のような目線を王子に合わせる。
「……仮にも近衛が守るって事は、そこの男は王族って事だな？」
「……」
無言を貫く王子に代わり声を発したのはアンナだった。
「止めてください！　魔物が復活した今、人同士が争っている場合ではないはず――っ！」
アンナの言葉は最後まで続かなかった。無言の内に山賊の頭が上げていた左腕。それが何を示すか察する事の出来ない者はいない。
「殺しゃしねぇから、大人しく剥がれてくれや」
頭が左腕を振り下ろしたのを合図として、山賊達は雪崩を打って駆け出した。

5．近衛の盾とは

先陣を切ったのは他の山賊に比べてもなお巨躯と形容できる大男だった。

「オオオオォッ!!」

先頭を走る角のついた兜を被る赤髪の偉丈夫が、猛牛の如く突進しながら雄たけびを上げた。勢いそのままに巨大な斧を片手で振りかぶり、無慈悲にもアリシアへと振り下ろす。

「倒す……倒すゥッ!!」

「ッ、くぅっ……!」

アリシアは辛うじてハルバートの刃で斬撃を受け止め鍔迫り合いへと持ち込む。だが体躯の差から生じる馬力差で完全に圧倒され、そうしている内に他の山賊の浸透を許してしまった。

「……!」

「ほぉ？　フューネスと真っ向からやりあうなんてな。あの嬢ちゃん、中々根性あるじゃねぇか」

駆けつけようと踏み出した王子に対し、バトルアクスが振り下ろされる。白髭の大男は獣のように牙を剥き出しにし、眼を血走らせていた。二度、三度と浴びせられる斬撃を、王子は剣を振るっていなしていく。大斧の一振りは勿論、王子の剣筋も十分に殺意の篭ったものであり、二人の織り成す剣戟は他者を寄せ付けない。彼らの振るう技、その全てがこの戦いを決しうる力を持つ。それが大将同士の一騎討ちの持つ意味だ。だからこそ大将二人は双方がそうであるがために、迂闊に飛び込む訳にもいかず、決まり手に欠けたまま斬り結んでいた

「三人は下がってください！　後は私が引き受けます！」

先ほどガーゴイルを撃ち落した際ほぼほぼ矢を使い果たしたソーマ、交戦を行えないアリサとアンナを背に、クレイブは剣を振るう。突進を仕掛ける山賊達に対し、一切の隙を廃した剣術で返答していく。振るわれる剣閃がシームレスに連鎖しひとつの波となって、山賊達を全く寄せ付けない。

「バ、バーガン！　こいつやべぇぞ……!?」
「そんな事は言われずとも分かっている」
バーガンの双眸にはそれ以上に俯瞰した視点からの現実が写っていた。当初バーガンが建てたプランは原形を留めていないといっていい。タイミングを合わせてまで交戦させた魔物は矢を削るに留まり、陣形を粉砕する役目を与えたフューネスは自称近衛に捕捉され、もう一人の兵士は先の魔物との戦闘でまるで疲弊することなく洗練された剣技を行使している。なにより大将たる山賊頭モーティマが王子と戦闘に突入している。
アリサの杖が間断なく癒しの光を放ち続ける。片陣営にのみヒーラーが存在している以上、山賊側は交戦が長引けば長引くほど不利になる。解消するには、勝ちの目を作るには、均衡を崩すより他ない。
「一斉にかかれ！」
指示を出された山賊達が一斉に駆け寄る。人数は五人、クレイブの処理力を超過しているのは明らかだった。後方に控えるソーマは残り少ない矢を矢筒から拾い上げるが、それでもなお足りないのは自明だった。
「――やむを得ません。技を借ります」
小さな呟きを吐いて、クレイブは地面を蹴った。
刹那。山賊達はたったの一薙ぎ、一閃にて斬り飛ばされる。剣の軌跡はクレイブを中心に円弧を描いていた。言ってしまえば回転斬りだ。強烈な蹴りに遠心力を加え、多人数に対しても刃の勢いを殺さない術。言うは安しの典型であり、一瞬でも敵に背を向けるハイリスクさといい、相応のセンスがなければ到底実用には到らない。クレイブ本来の整った隙の無い剣術とも対極だ。
「バ、バーガンこいつッ……!?」
迎撃された山賊達は愕然と眼を開く。
「剣の……聖女っ、だと！」
そんな山賊達の中からぽつりとそんな声が漏れた。
「見よう見まねの剣技ですけどね」
クレイブは再び構えを取り、山賊達を睨む。とはいえ背後に非戦闘

員がいる以上攻め寄る訳にもいかず、膠着状態へともつれ込んだ。

「オォオオ！」

森林を引き裂くような雄たけび。斬撃と共に赤髪がなびく。理性のタガが外れた猛獣、今のフューネスを形容するならばそれが適当だろう。暴力的にひたすら攻撃を繰り返す獣の対処は、少女の非力な双腕には少々余る。

「くっ……」

アリシアの顔に苦悶の表情が滲んだ。体格差、筋肉量や得物の重量を考慮すれば、少女がフューネスの猛攻に押し切られていない現状ですら大健闘といっていい。それを可能としているのは、アリシア側の技量。ひいては彼女の師の教えが骨子となっていた――

『近衛騎士の盾とは即ち技量。培ってきた鍛錬の証なのです。隔壁の如く敵意に立ち塞がり、悪意一切を通さず、然して侵食されず。全てを実践するべく私達は、こうして経験を累積するのですよ』

美しい金髪をたなびかせ、如何な時も息一つ乱さない。整然と君臨し、幾年が過ぎようとその清廉さや高貴さは失われない。彼女――近衛騎士団長ミレイユの言葉。それは近衛騎士団に入団したアリシアに多大なる感銘を与えた。だが。

『貴女はまだまだ新米ですから、これから私がみっちりと鍛錬をつけねばなりませんね』

アリシアにとって、ミレイユ団長の微笑みや期待の言葉には余りい印象を持てなかった。向日葵のように眩い笑みの後に続くのはいつだって熾烈な訓練。平和な王国でそんなものを積むことに、アリシアは幾度も疑問を抱いていた。

――時が流れ。魔物が現れ、ミレイユ団長達は行方が知れず。ただ一人でハルバートを振るうアリシアの両腕には、確かに近衛騎士の盾が宿っていた。圧倒的な体格差から放たれる致命の一撃を次々と捌いていく。後方の癒し手からの支援、自身に施された治癒の加護も織

り重なり、じりじりと追い詰めているようですらあった。
「この――程度ッ！」
　それは戦況を変える一手。アリシアが振り下ろされる斬撃にハルバートの刃を合わせる。しかし今度は斬撃を撃ち墜とすようなことはしない。僅かに軸を逸らし、勢いを殺す事無く矛先を地面へと変える。鈍重な轟音と共に、先ほどまでアリシアが立っていた地面が抉られる。兜に隠れたフューネスの眼が大きく見開かれた。
　フューネスの懐に潜り込んだアリシアは、既に腰を深く落とし刺突の構えを取っている。小さな体躯から放たれる逆襲の一撃は正確無比に胸ぐらを穿ち、鮮血のアーチを描いた――
「グ、ガアァァッ……！」
　フューネスは立ち尽くし苦悶の表情を浮かべている。自身の片手で抑えられている胸元には大きな傷が開き、並々と血液が抜け落ちていった。常人であれば数分たりとも持たない致命傷だが、彼の兜の影から覗く眼光は失われていない。
「さ、さぁて山賊さん達、次は誰が相手になってくれるんです!?」
　重傷を負ってなお屈しないフューネスに底知れぬ恐怖を感じつつ、アリシアは敢えて気丈に声を上げる。山賊たちはフューネスほどの大巨漢が撃破されたことにただ怯えていた。士気を挫くという意味では十分の戦果だ。
「頭！　これ以上は――」
「んなモン分かってらぁ！　野郎共ずらかれ、ずらかれェ！」
　モーティマが鍔迫り合っていた王子を力任せに弾き飛ばして号令をかける。山賊達は悲鳴をあげながら来た道を逃げ帰っていく。血まみれとなっていたフューネスも背を向けモーティマ達の後を追っていくが、その足取りは重い。
「ま、待ってください！　話を――」
　アンナの制止に振り返る者はいない。クレイブは未だ構えを解かないが、王子やアリシアは山賊達を追う事も無く、武器を収めてその背中を見つめるばかりだった。追討の意を込めて矢を番えたソーマの手も震え、放つことが出来ない。彼らにとっては初の、それも想定

外の対人戦。幾ら相手が悪党とはいえ何の気兼ねもなく殺害するには、彼らは若過ぎた。
「う……ガ、ァ」
フューネスは足をもつれさせ、突っ伏す。一般的な常識として、胸に大穴の開くような傷を負えば普通動く事すら出来ず即死すらあり得る。むしろ先ほどまで足を動かせていた事の方が奇異なのだ。それ故これは当然の帰結ともいえる。
「あ、あのっ……！」
緊張で上ずったその声はアリサが発したものだ。杖をぎゅうと抱きしめ、悲痛な面持ちで血まみれの男を見下ろす。
「お、王子。治癒しないとこの人、死んじゃいます」
「……」
王子が無言で頷くと、アリサの表情が僅かに晴れた。すぐさま杖の先端にあしらわれた宝玉が緑光を発し、穏やかな光がフューネスの全身を包み込む。じわじわと傷が治っていく中、王子はフューネスへと歩み寄り、彼の対面に屈んだ。
「フューネスというらしいな」
「……何故、だ」
「アンナ……彼女の言った通りだ。魔物が復活した以上、人同士が争っている場合ではない」
元来の再生力との相乗効果により、治癒自体はたちまち終了した。フューネスは立ち上がり、訝しげに王子を見つめる。その眼差しからは、刺々しいまでの敵意は成りを潜めていた。
「お前達の棟梁に伝えるといい。俺達は女神の神殿に向かう、と」
僅かばかりの沈黙。フューネスという男なりに考えを巡らせている時間。彼は比較的すぐに、自分の哲学に沿って結論を出した。
「強い者に、従う……」
「……そうか」
王子の口元が僅かに緩む。彼が振り向いた先には、事態をいまいち飲み込めていないアリシアが在った。一行の視線が彼女へと向かって、ようやく自分に話が振られたのだと気づく有り様である。

「だそうだ」
「え、えええっ!?　私!?」
「お前、強い」
　見上げるような巨漢に面と向かってそう言われたアリシアは苦笑する他なかった。
「まぁその。王子の言う通りにしてほしい、です」
「分かった……」
　素直にアリシアの言を聞き入れ、その場を走り去ろうとしたフューネスだったが。途中で立ち止まり一行に振り返った。
「……あ、りがとう?」
　言い慣れていない事がすぐに分かる拙い発音。それを残してフューネスはそのまま走り去っていった。
　それから程なくしての事だった。アリシアの前に青白い光が零れる。幾筋もの光の筋が収束し、手のひら大の結晶を形成する。
「……あ」
　アリシアがそれに手を伸ばすと、それは浮力を失い彼女の手へと転がり込む。訝しみながらもアリシアは、ひとまずそれをアンナに見せる事にした。
「アンナお姉様、これなんでしょう?」
「これは――女神アイギスを象ったものです!　ですが何故……」
　アンナは僅かに考え――
「ひとまずこれは私が預かります」
「分かりました!」
　虚空より現れた女神を象った結晶。その正体を一行が知るのは、それから少し後の事だ。
「王子。改めて魔物及び山賊退治、お疲れさまでした」
　アンナは、王子の隣を歩きながら語り掛ける。一行は最低限の確認を済ませ、交戦の疲労をアリサの治癒で取り払って女神の神殿を目指す。
「後少しですが、先程の襲撃により遅れが発生しています。急ぎましょう」

王子が頷く。こうしている間にも砦に残った兵士達は魔物に対し、必死の抵抗を繰り広げているのだから。だが如何に焦ろうと、一日に人が歩ける距離など限りがある。

野宿と行軍を繰り返す。既に北の砦を離れて三日を数えていた。やがてその日も、木漏れ日は燃えるような赤を帯び始めた。後半刻もすれば、陽は西に落ち一帯には漆黒が満ちる。刻限は近づいていた。

「あ――」

アリシアが声を漏らすのも無理はない。林道は途端に開け、丘陵が現れる。道は丘に遮られるように二手に分かれていた。明らかにこれまで辿った道のりとこの場とでは性質が違う。静寂と荘厳が混然とした張り詰めた空気。

すぅと息を吸い、アリシアは一息に丘を駆け上がる。

「アリシア、ちょっと待ち――！　あぁもう王子まで！」

アンナの制止は空を切った。丘を登れば、周囲一帯を見渡すことが出来た。来た道の他にも幾つかの林道がこの地へと伸びている。そしてアリシアの正面方向に、それは在った。

「――」

アリシアは言葉を失う。夕日に照らされ朱に染まった厳めしい建造物は、それが重ねた歴史に押し潰されていた。ヒビが這い、蔦に絡めとられた廃墟からは人気が微塵も感じられない。早い話が、打ち捨てられて廃墟と化していた。

「女神の神殿。俺達の、最後の希望だ」

追いついた王子は神殿を見下ろしながらそんなことを零した。

6. 廃墟での邂逅

神殿の内部は、廃墟のような外見からすれば綺麗なものであり目立った破綻も無かった。等間隔で配された側面の柱は、奥へ行くにつれ短くなっている。最奥に鎮座する巨大な女神像をより荘厳に、より厳格に見せる為の柱。しかし節々には亀裂が走っている。

「女神の力を借りる、か」

王子は自嘲気味にひとりごちる。現在の神殿の有り様は、神を捨てたと詰(なじ)られても反論の余地がない程だ。神殿の最奥に配されたアイギスを象った女神像が、慈愛に満ちた表情で来訪者達を見下ろしていたのが、彼らにとって唯一の救いであった。

そんな彼らに対し、言の葉は荘厳に舞い降りる。

『――人の子たちよ』

囁くような声と共に彼女は顕現した。柔和な表情を浮かべたそれは、黄金に輝く髪がなびき、四翼を羽ばたかせる。その姿形は女神像そのもののよう――否、女神そのものだった。

「あ……アイギス、様!!」

驚愕のあまりアンナが声を張り上げる。アンナらの前に顕現した女性は、紛う事なく女神アイギスその人であった。アイギスは人智を越えし存在である事を物語る神性を纏い、慈愛に満ちた表情を投げかける。一行は、女神の神々しさの前に閉口するしか出来なかった。

女神に対し、王子は重い一歩を踏み出す。

「……貴女を祀る神殿はこの有り様。図々しいのは百も承知だ。だがそれでも――」

訴えかける王子。この場に存在する全ての視線が彼へと注がれる。そんな中――

「力を貸してくれ」

王子は、深々と頭を下げた。

『……貸す、ですか』

女神の声が僅かに揺れる。

「女神様、私からも恥を忍んで申し上げます。私達は魔物に抗いうる

力を持ちえません……国王陛下ただ一人さえ、お護りする事は出来ませんでした」
そう語るアンナの秀麗な顔が歪む。しかし彼女らの淡い期待は、脆くも崩れた。
『あなたがたの希望に応える事は叶いません。事の発端は、長き刻を経て、魔物を封印した我が身の力が抜け落ちた事に在りますから』
女神アイギスが発したのは、彼らが想定していた中で最悪級の返答だった。此処まで付き従ってきた一行も、どよめきを隠せないでいる。
「そ、んな……女神様の、お力が？」
アンナが驚嘆の余りに膝をついた。
『……最早封印も能わず。蘇りし魔物の脅威に対し、あなたがた人類は人の力によって対抗せねばなりません』
救いを求めて訪ねた王子達にとって、女神アイギスの宣言は余りにも無慈悲なものだった。
「……無理、無理です。私達、だけでなんて……！」
「アンナお姉様……」
『ですが私にも、出来る事が無い訳ではありません』
女神アイギスがそう口走ると同時、彼女から光が迸った。白金の輝きは瞬く間に神殿内を満たし、神性が全てを包み込む。
『英雄の血を引きし子。あなたには、かつて私が授けた加護の力が色濃く受け継がれています。今の私でも異なる地に在りし、志を同じくする者との縁を結ぶ。その架け橋となるくらいは出来ましょう――』
王子は確かにそれを聞き取った。
『願うのです。今ここに、あなたの剣を召喚しましょう』
王子は躊躇う事無く手を伸ばした。やがて、彼らの視界を満たした白金の輝きは鳴りを潜める。そこで一行は、女神の前で佇む一人の少女を見た。
露出の多い少女だった。矢筒を背負い、手に握られた簡素な弓は、彼女が弓兵である事を物語っていた。髪の色に近しいピンクカラーの眼が、宝石のように瞬いている。だがしかしそれらの外見特徴は、

ある一点の明確な違いによって影へと追いやられていた。
獣耳。髪から生える猫の耳が、血が通っている事を証明するようにピクリと動く。明確に人ならざる存在の登場は、王子達に多大なる衝撃を与えるには十分であった。
「えっと……はじめまして。バシラと言います。貴方が王子様ですか？」
「……よろしく頼む」
王子の差し出した手は手袋越しではあるが、二人は握手を交わす。
『意外ですか？　ですが彼女は、神速の射手の二つ名を持つ勇士です。必ずあなたがたの力となるでしょう』
「そ、そんな。大袈裟ですよ……」
相変わらず集中する視線に、バシラは少し居心地が悪そうにしていた。
『このようにして各地から戦力を募りなさい。そして――』
言葉を皮切りに女神の放つ後光が反転する。黒き光とでも形容するのが相応しいそれは、先ほどの光よりも遥かに荘厳な気風を抱き、しかしすぐに沈静する。
『――星を。黒き星を集めるのです』
「……黒き星？」
ポロリと声を漏らしたアリシア。そして答えたのは、アンナであった。
「乱世が訪れる時に現れる明けの明星。暗黒を引き裂き光を齎す、類稀なる人」
「アンナお姉様……？」
それを語るアンナの表情が普段に比べて暗かったのを、アリシアは見逃さない。しかし今この場においてそれは些末事に過ぎず、問いただすのは憚られたのだった。
『彼女らは稀有な人材です、縁を結ぶのは容易な事ではないでしょう。この身に残りし力にも限度があります。ですが、私の力は此処にのみある訳ではないのです』
女神が言い終えるのと同時、アンナの手元にあった、女神を象った

結晶が眩い光を放ち始める。
『この世界に散らばりし私の残滓。それは英雄の末裔の、完全なる勝利によって地上に顕現するでしょう。我が身を象りし偶像として』
「そ、それ！　山賊と戦った時の――」
『結晶に――神聖結晶に、祈りを捧げなさい。一つでは不可能であろうと、５、１０と積み上げ祈れば必ず結ばれましょう……私に出来るのは、ここまでです』
「……十分だ。助かった」
　王子は女神に対し深々と首を垂れた後、向き直る。今後の事については決した。後は、王子が令を発するだけ――そのはずだった。
「あ、あぁ！　王子！　王子いた！」
　少女の声を背に受け、一行は振り返る。
　朱色の髪の小柄な少女。白いベレー帽のような何かを被っており、紅白色を基調とした服を身に纏っていた。そして先端が時計、先端部と柄を繋ぐ部分が砂時計のようになっている特殊な杖を握っている。
　現れた少女に対し、アリシアが武器を構えて立ち塞がった。
「な、何者ですか⁉」
「待って、私敵じゃない！　武器降ろして……えっ、というか誰⁉」
「誰って失敬な！　私は――」
　アリシアがそこまで噛みついて、制止したのは女神であった。
『……彼女の言に間違いはありませんよ』
「……アリシア。下がっていい」
「は、はいごめんなさい！」
「私はココロ！　素性については聞かないで、でも今は絶対に外に出ないで！」
　ココロと名乗った少女。彼女の言葉が終わるとほぼ同時、神殿の外から轟音が鳴り響いた――

　それから少しして。神殿外の様子を観察していたココロが、王子達の元へと戻ってきた。

「うん。もう外に出ても大丈夫、驚かせてごめんね」
ココロが一礼して、杖を高く掲げてみせた。杖先にあしらわれた時計の針が音を立てて回転し始め、放たれた光がココロを包み込む。
「では私はこれで去ります。忘れてくれると嬉しいけど……無理だよね」
そんな言葉を残してココロと名乗った少女は、跡形もなく消え去った。一連の出来事はあまりに唐突であり、誰もが口を挟むタイミングを見失っていた為、結局少女の名がココロという事くらいしか分からずじまいに終わってしまっていた。
「なんだったんですか、あれ……」
王子一行の誰もが大なり小なり感じていた事を、ぼそりとアリシアが零す。
『彼女――ココロは時空を渡る力を持っています。いえ、将来的に持つ事となるとでも表現するのが正しいでしょう』
「時を……つまり、未来からやってきた、という事ですか、アイギス様？」
アンナの質問に対し、女神は無言であるが首肯した。
『とはいえ、かの者との邂逅は謂わば泡沫の夢。再び道を交わすことも無いでしょう。人の子よ。あなた方には、優先すべき使命があります』
王子は仕切り直して一行の前に向き直る。その一挙一動を、誰もが固唾を飲んで見守っていた。祖国を追われ、僅かな配下に背中を預けて此処まで来た。これまでの旅路は敗走そのもの。自身がこの大局にあって余りにも非力である事など、彼は嫌と言うほど理解している。
「……英雄の末裔として、世界を救ってみせる。皆の力を貸してくれ！」
だからこそ王子は語気を強め、宣言した。毅然と立ち上がり、戦う事を選択したのだ。それはこの場にいる誰もが望んだ答えであり、女神の頬をも綻ばせた。
『人の行く末を、見守りましょう――』

女神アイギスはその姿を霧散させる。
陽も落ちようとする黄昏時、神殿を飛び出した王子達は――その矢先、声をかけられる。
「――よぉ、王子様。久しいな」

7．手を伸ばす

頭骨を被りバトルアクスを握る男。夕闇に沈みゆく中、ぎろりと輝く狩人の如き鋭い眼。神殿前の丘陵の頂点から声をかけたのは、先刻林道にて遭遇し交戦した山賊団の主、モーティマその人であった。彼の脇にはバーガンの姿もあり、王子達を睨んでいた。

「――フューネスの奴に行先を伝えたってこたぁ、つまりこういう事だな？」

歯を剥き出しにして笑うモーティマの背後には先程王子達と交戦した山賊達が集い、各々が武器を構えていた。王子、山賊双方の距離は２００ｍほどだが、日は既に沈みつつあり、視界はすこぶる悪い。

「……丁度いい。お前達に用があった」

そう語りながら、王子は一群から一歩前へと踏み出した。

「えーっと、その。話がうまく飲み込めないんですけど……？」

新参であるバシラが、たまたま隣にいたアリシアに話しかけた。

「あの山賊達、以前も私達を襲って来たんです」

「そうだったんですか!?」

「その時は逃がしたんですけど、今度こそ二度と歯向かおうと思わないくらい徹底的に――」

「――俺達に協力しろ」

鮮明に言い放たれた王子の言葉が、双方の時間を完全に硬直させた。突然の提案に山賊達は唖然とするが、モーティマがすぐに噛みついた。

「アンタ。自分の言ってる事、分かってんのか？」

「……あぁ」

「阿呆か。俺達ぁ山賊だ、お前らの敵だぞ？」

「敵だ味方だと言っている状況ではない……それはお前達も分かってるはずだ。単独で抗おうと、各個撃破されるだけだぞ」

「ほう？　なら聞くが、俺達は山賊やって来た生粋のアウトローだ。これまで犯してきた犯罪について、どう処理する気だ？」

「……国を取り戻した後、この国で犯したものに関しては恩赦とする」

「恩赦!?」
山賊達の中から上がった気の強そうな女の声。白のマントを羽織る、橙色の髪の少女が発したものだ。
「まぁ待てよハリッサ。んなもん体よく使われて、生き残っても後で首切られるに決まってるだろうが」
「……俺もお頭と同意見だ。信用出来る要素がない。先ほどの事はともかく――」
「わ、私達だって貴方達なんか信用できません！」
アリシアが、山賊達に対抗するように声を張り上げた。
「現状を鑑みれば確かに崇高な理想です。しかしあくまで理想止まり、これは少し無謀な試みでは――」
クレイブの意見を、王子は手で遮った。
「……クレイブ、アリシア。そこを動くな。ソーマとバシラは弓を捨ててくれ」
それだけ言い残して、王子は一歩を踏み出した。神殿前にある階段を降り、正面を見据えて着実に歩を進めていく。
「……あ？」
モーティマの眉間にしわが寄り、侮蔑の混じった声が漏れる。理由は明快、王子の取る行動を理解出来なかったからだ。対して王子は何も語らない。口を噤んだまま、前髪越しにモーティマを見つめる。
「……」
「とんだ阿呆だな、わざわざ前に出て来るたぁ……」
そこでモーティマの言葉は止まった。これもまた原因は王子の行動にあった。
――彼は、自らの利き腕である左手を伸ばし、手のひらを差し伸べていた。
それの意味する所を分からぬ者はいない。敵味方、極限の緊張から双方が沈黙するばかりだった。王子方の前衛は王子の命により駆け寄る事を禁じられ、弓兵はその武装を地に放棄させられている。
「……てめぇら！　一歩たりともそこ動くんじゃねぇぞ!!」
モーティマが沈黙を破り戦斧を握り締め、ゆっくりと丘を降り始め

た。その眼を神殿前に屯する王子の配下に向けながら。彼――頭の命令、そして行動は、山賊達にとっても予想外の事だった。
「……お頭？」
「あぁもうモーティマの奴、殺る気じゃないだろうね……セシリー、いざとなったら届く？」
ハリッサが視線を向ける先に、真紅のフードを深く被り、黄金の眼を露出させて窺う少女、セシリー。その眼は、目の前の事象より別な事に向けられている。距離、傾斜、敵の視界――自身の行動を遮る要因全てを脳裏に叩き込んで、セシリーは結論を出した。
「……双方に気づかれないように、となると難しいぞ。もう少し暗ければ別だが」
「くそっ」
ハリッサの舌打ちが虚しく空を切り、黄昏に吸い込まれた。

動揺しているのは山賊達ではない。王子の後ろ姿を固唾を飲んで見守っていた。アリシアやクレイブは武器を構えてはいるが、彼女らがその場を動くことは他ならぬ王子の命によって禁じられている。
「そ、ソーマさん、そのいざとなったら……」
アンナはソーマに耳打ちし、それとなく示唆するが反応は芳しくない。
「さ、流石に斧を構えてから、拾って撃つのは無理です……」
「そんな……！」
「ちょ、兆候が読めたら、私がやっては、みます……」
〝神速の射手〟バシラは猫耳を揺らし風を読む。獣人ならではの並外れた視力は、斧を握るモーティマの手元を鮮明に映していた。攻撃に繋がる僅かな兆候を逃さぬよう最新の注意を払っている――が、兆候が読めるのと、先ほど語ったそれが可能かは別次元の話である。
やがてモーティマは足を止め、立ち塞がる。その身長差から、モーティマが王子を見下ろす格好となった。
「……」
「……」

双方の陣営が極度の緊張状態で見守る中、二人は無言で向かい合う。一つ違う事があるとするならば、かたや右手で戦斧を握り、かたや利き腕を差し出している点。
「……これで信用しろと」
「……あぁ」
モーティマは差し出された手を一瞥し――その瞬間、戦斧が宙を切った。
「……！」
勢いよく投げ捨てられたバトルアクスは、からんからんと音を立てて地に転がった。
「震えるくらいなら、最初から止めときゃいいだろうに、な」
モーティマが口端を釣り上げ、戦斧を手放したその手で王子の手を甲から荒く掴み、持ち上げて見せる。
「ひとまずその度胸は買ってやる。だがあくまで協力だ、お前の部下になる訳じゃねぇ」
それから少し間を置いて
「……頼むから、裏切ってくれるなよ」
「あぁ」
王子の即答を聞き、モーティマは掴んだ手を放す。
「……てめぇら！　聞いたな、武器降ろせ！」
頭の指示は絶対である。山賊達は先ほどまでとは一転して、素直に構えた武器を下ろした。
「一つ案があるんだが。夜が明けるまで此処で休息をとるのはどうだ」
「……生憎、残してきた兵達ものっぴきならない状況だ」
「そうは言うが夜の森で狼なんぞ相手したくないぞ？」
モーティマは何気なく言ったつもりであった。が、その言葉で王子の肩はぴくりと震える。
「この辺りにゃ魔物の影響を受けた狼もうろちょろしてやがる。流石に暗中で人間が勝てる相手じゃねぇ」
王子は改めて来た道を思い返す。夜空の月明りのような儚い明か

りでは、頭上にまで茂る枝葉に容易く遮られるだろう事は容易に想像できた。視覚が封じられた状態で、嗅覚や聴力で圧倒的に勝る狼の相手をすることが如何に無謀かも。
「……というかお前ら、まさかこのまま来た道帰る気だったのか？　たまたま会わなかったのか、全部俺達に来てたのか……ビギナーズラックとでも言うのかね」
　王子は押し黙ったまま、モーティマに背を向ける。
「……休息を取る。夜が明けるのを見計らって、女神の神殿を出よう」
「ならいい……てめぇら！　屋根はあるが実質野宿だ野宿、準備しろ！」

　夜が明けるまで休息をとる運びとなった王子達は、神殿内の女神像の前で夜を明かす事にした。とはいえ神殿内で篝火など問題外である。そこで王子達は一計を案じた。
『……ふふ』
　慈愛に満ちた笑みを浮かべるのは、女神アイギス。顕現した彼女の放つ青く優しい輝きこそ、今の彼らにとって何物にも勝る灯だった。当然だが、女神にも打診し了承を得た結果である。
「それにしても、大事なくて本当によかったです……」
　アリサが床に腰を下ろし、杖を抱きしめて安堵の声を漏らした。治癒師は必須とはいえ、此処に至るまでの道のりは非力な彼女にとって少々酷なものであった。
「……王子。今後ああいった無茶は謹んでくださいね？　王子の存在が、我々の唯一の希望なんですから」
「……」
　アンナから叱責を受ける王子はただ俯いている。その眼差しは彼の前髪によって露出を阻害されていた。目は口ほどに物を言うとは慣用句だが王子の場合、目も口も何も語らない。その為他者から見て感情を読みづらい所はあれど、今回の一件については状況から察知しようがあった。王子の心中はどうであれ。

「動きっぱなしでお腹が減りました。ご飯！　ご飯食べましょう」
アリシアが、気まずい空気を吹き飛ばそうと敢えて気丈に声を上げた。
「そうですね……燻製肉と乾パン程度ですが、食べましょうか」
アンナの言葉を皮切りに、各々荷物から携行食を取り出し始めた。元より片道三日はかかる距離である事はわかっていた為、最低限の食料も当然携行していたのだが……
「今日も非常食かぁ……」
アリシアがぼやいた丁度その時だった。声がかけられたのは。
「ちょっといいか？」
声をかけたのは赤い外套を羽織りフードを被った銀髪の少女、セシリーだった。そしてその傍らにはフューネスの姿があるが、どちらかというと彼が抱えているモノに視線は集中した。
「そのお鍋……！」
アリシアが目を輝かせるのも無理はない。フューネスが抱えているのは巨大な鍋。それもほくほくと湯気が上がり、芳醇な香りを醸す代物だ。そしてセシリーはというと、王子一行の人数である7に2を足した、9枚の小皿と匙を抱えている。
「せん……とう？　せん……ぷ？」
「餞別だぞ。食える野草と適当な獣を煮てシチューにした」
セシリーから告げられた内容物は一行にとって渡りに船といって良かった。しかしそれでも難色を示した者もいる。その一人がクレイブだ。
「流石に間髪入れずというのは……どうなのでしょう。信用していいのでしょうか」
クレイブの懸念は確かに一理あるものであった。目の前のシチューに釣られ、完全に意識をやっていた一行も我に返り、どうしたものかと互いの顔を見合わせ始める。だが一人、諦められない者がいた。
「……そう！ど、毒見です！　私治癒の加護があるので、少々の毒くらいどうってことないです！　だから私が率先して食べます！」

それでは毒見の意味も為さないのではないかというツッコミを声に出す者はおらず、アリシアはセシリーから皿と匙を回収して、鍋を掬った。煮込まれた肉片をすぐさま口に放り込んだ。
「……おいしい！」
「躊躇いなくいったな……信用できないんじゃなかったのか？」
「うぐ……」
「まぁいい。そこでいいか？」
鍋は輪の中に置かれ、セシリーとフューネスも自分の分を取って食べ始める。それは、毒を盛ってなどいない事の何よりの証明だった。セシリーたちの行動を皮切りとして、鍋を囲んでの食事が始まる。
「ところでこれ、誰が作ったんですか？」
アリシアは隣に座るフューネスに話しかける。それは純粋な好奇心からのものだったが、その返答は彼女の想像の斜め上をゆくものだった。
「モーティマ……」
「モーティマ……って、え、えぇぇぇぇ!?　あの!?」
「見かけによらず料理は上手いんだぞ」
セシリーの捕捉に対しアリシアは素直に感嘆の声を漏らしていた。

「あの……山賊さん？」
「……？」
話しかけられたフューネスが顔を上げる。声をかけたのはバシラだった。その目線は泳いでおり、トレードマークである獣耳はぴくぴくと震えていた。恐る恐るといった様子である。
「獣人がいるって、あの山賊頭さんは気づいてます？　あの、差別とか……」
バシラの懸念は、自身の種族についての事だった。獣人という種族は一部地域では被差別種族でもある。この王国ではそういった事も無く、バシラ自身も人間社会で暮らしていた為知識としてしかその差別を知らない。しかし、共に戦うならば最低限確認しておかねばならない事項というのも事実である。フューネスは少し間を置いて、首を

縦に振った。
「モーティマ、気づいてる。特に気にしていない」
「よ、よかったぁ……」
バシラはほっと胸を撫で下ろす。
「モーティマ……あんまりそういうこと考えない」
「あ、あはは……」
そんなほのぼのとしたやり取りが続く。その一方、安穏といかない組み合わせもあった。

「……さっきから視線を感じるが、どうしたんだ?」
セシリーの黄金の眼が、ソーマを捉えて離さない。一方のソーマはというと、顔を引きつらせていた。
「え、えっと……そのマント……その、染みって」
「食事時に話す内容じゃない」
「は、はい! 黙ってます!」
ソーマは背筋を伸ばし、視線を手元の皿へと戻した。そして
「あれ絶対血、血ですよぉ……」
誰にも聞こえないように細心の注意を払いつつ、一人ぼやくのだった。

『愛しき人の子達が、互いに血を流す事無く事無く手を取り合う。これもまた、完全な勝利でしょう……』
女神アイギスは談笑を俯瞰しながら笑みを浮かべていた。
『ですが、少し心配ですね……』
女神が顔を上げる。神殿の入り口では山賊達の篝火が上がっているが、女神が憂う事象はその遥か向こうにあった――

8．なけなしのメッキ

闇夜を照らしながら、業火は踊り狂った。深緑の町の一角にて上げられたこの炎は、昼間の魔物の襲撃によって生まれた犠牲者の葬送と鎮魂の為のものだ。ここで遺体が焼却された者は幸福である、戦場に止むを得ず遺棄された死体は数えきれない。

残された守備隊――王国軍残党は、着実に屍の山を築いていた。とはいえ総指揮を執るベルナールの采配の甲斐もあり、想定よりは兵力の損耗は少ない。王子が発ってから既に五日が経過していたが、当初の目標であった一週間という数字自体は実現が見えてきている。

「――黙祷」

兵士の先頭で号令をかけた重歩兵。彼の纏う黄金の鎧が炎の真紅を反射し、輝いていた。彼の名はベルナール。”金色の盾”なる異名を持つ彼は、王国の重歩兵長にして現在王国軍残党の総指揮を執る者である。

葬儀の後、ベルナールは深緑の町内にある屋敷にいた。王国軍はそこを本部としているのだ。北の砦でなく敢えて深緑の町に本部を置いた理由として、王国軍残党の定めた戦闘目標にある。

それはここ、深緑の町を防衛ライン内に収めるといったものだ。援軍の当ても糧食の当てもなく北の砦に籠るのは愚策中の愚策である。それに対し深緑の町は田園都市であり、生産拠点である。人の営みもあり、食料の備蓄にも若干の余裕があった。だからこそ、延命を図るなら深緑の町を含めた生存域を確立する必要があったのだ。しかし田園地帯の外に展開し、魔物を迎え討つといった戦闘を繰り返せば、当然砦で戦うより兵力を損耗する。

鎧を脱いだベルナールは廊下を歩きながら、歯噛みするしか出来なかった。

「重歩兵長。どうかお休みになられてください……昼の戦闘といい、ほぼ休みなしではないですか」

背後についていた、直属の配下である重歩兵ラセルからそう声をかけられる。

「ならん。明日には次が来る、俺抜きで備えるなど出来ないだろう」
そう語るベルナールの表情は悲痛そのものだった。
「違うな、自惚れた。俺如きでは本来務まらぬ役だ」
「……重歩兵長」
ベルナールの双肩には、一重歩兵長が一人で抱えるには重い荷が圧し掛かってた。付き従う兵士だけではない。この地に暮らすあるいは周囲の村落から避難してきた無辜の民、そして――この地を託し、女神の神殿へと向かった国の旗印たる王子一行。対して挑む相手は強大だ。なにせその限界が見えない。例え女神の助力を得たとして、それが余程のものでなければいずれ物量で押し潰される未来が見えていた。
「貴殿は休むといい」
「……了解しました」
立ち去るラセルの背中が消えるまで待って、ベルナールは再び歩き出す。
「あの！」
しかしすぐに呼び止められた。今度は部屋から出て来た、青い髪を短く切り揃えたまだ幼さの残る少女だ。纏う純白の軽鎧には所々に傷が入っており、腰に帯びる剣は少女の背丈に分不相応なほどに長い。橙色のスカーフが、足音と共に揺れた。
「フィリス殿……」
「夜分に失礼します。お話があって参りました」
「待て。その鎧は――」
「父の形見です」
フィリスはきっぱりと言い切って見せた。廊下に揺らめくランプの灯が、フィリスの澄んだ瞳に反射していた。
「……望みは復讐か？」
「父の仇を討たねばなりません。どうか戦列に加えてください」
「……分かった。兵士は、兵士の指揮は……」
そこでベルナールが言い淀んだのは動揺が原因ではない。単純に、兵士の指揮を執る武官がいないのだ。昼間の戦いではこの町の衛兵

長――フィリスの父が務めていたが、彼は死んだ。決して負け戦ではなかったが、それでも死んだのだ。
「誰か、部隊長を抜擢せねばならんな。早朝一番の召集までにこちらで決めておく、それに従ってくれ」
「……分かりました。失礼します」
フィリスは頭を下げ、自室へと戻っていった。力の籠り過ぎた背中を見送り、ベルナールは窓に映る月を見上げた。
「今頃、王子達も同じ月を眺めているのだろうか」
なればこそ彼らの帰る地は死守せねばならぬと、ベルナールは改めて決意を固めた。
「ベルナール殿」
呼びかけられたベルナールはさっと振り向いた。赤いローブを身に着け、グローブを嵌めた手には木製の杖を握る糸目の中年男が、そこにはいた。男の名はロイという。熟年の王国魔術師であり、今は魔術師たちの指揮も執る身である。
「ロイ殿」
「お茶でも如何かな。まぁそう、根を詰めなさるな。腐ってしまいますぞ」
目を細めるロイ。務めて平静を装うとしているのは、ベルナールも承知の上だ。
「……頂こう」

ロイに導かれ、ベルナールは大部屋へと通される。複数のランプが並び、ぼんやりとした明るさが保たれている。会議用の長机が配されたその部屋には、既に先客がいた。
「おや」
「私が呼んでいたのです」
「こんばんわ。失礼しています」
重苦しい空気には余りにそぐわない、絵本の中から飛び出してきたかのような可憐な少女だ。それがちょこんと席に座っている。そしてその傍らには兜で目元以外を隠した屈強な兵士が二人控えていた。

不気味な沈黙を保つ彼らは、少女に雇われた傭兵だ。
少女の名はトトノ。行商人である。偶然深緑の町に滞在していた所、今回の騒動に巻き込まれた。
「トトノ殿。貴殿には本当に感謝してもしたりない」
「いえいえ、これもご縁というモノです。報酬も頂いていますし」
トトノが笑みを浮かべる。彼女は、王国軍残党が深緑の町にて兵力の臨時徴収を行っている所に自らの連れる傭兵を売り込んだのだ。金品で雇われるとはいえ、いやだからこそ傭兵たちは、臨時に徴収した新兵より圧倒的に強力であった。
ベルナールは、トトノの正面の席に腰を下ろす。一方のロイは部屋に入るとカップに茶を淹れ、ベルナールとトトノの前に出した。彼は、魔術師は常人とは違う力を持つため偏屈さを持つという、世間一般的な常識とは無縁の人柄であり、湯を沸かすためにでも魔術で発現した炎を行使していた。
トトノは茶を一啜りしてほっと息をつく。傭兵達はカップから昇る湯気に釣られてぴくりと目線を揺らした。
「傭兵の方々も淹れましょうか？」
「……」
「この人達はいいんです。そういう契約ですから」
黙して語らぬ傭兵に代わり、トトノがそう答えた。ロイは「そうですか」と少し残念そうに述べ、自分の分を淹れてベルナールの右隣の席に座る。
「ベルナールさん。景気って言うのはですね、悪ければ逃げていくんですよ」
「……と、言いますと」
「私、ベルナールさんと初めてお会いした時、凄く景気のいい人だなぁと思ったんです。なんせ金ぴかですよ。メッキですけど」
ベルナールは思わず苦笑する。彼の纏う黄金メッキの鎧だけは、部下にも理解されない代物だ。そしてベルナール自身もその真意について、言いふらす気もなければその必要性も感じてない。
「少し酷な事を言います。メッキで良いんです。上の人が景気よく

パーッとしていれば、ついて行く側もちょっとだけ気分がマシになります。逆も然りです、だから……その」
　トトノは精一杯の言葉を選ぶ。
「見えない明後日の事は置いておきましょう。まずは明日です！　頑張りましょう！」
　そう言って大きく両手を上げて見せる。
「……俺もまだまだだな」
「女性とはまこと逞しいですなぁ」
　机に肘をつくベルナールも。茶を啜るロイも。その口元は僅かに綻んでいた。緊張を緩めたのは茶か、トトノの弁舌か。
「……なけなしのメッキか」
　ベルナールの口から零れたそんな一言。薄暗闇に儚く消えたそれは、言ってしまえば痩せ我慢に過ぎない。だがそれでも、この絶望の溢れる戦いの節目が見つかるまで、気力の灯を絶やさないためには、不屈の闘志が不可欠である。王子が帰還するまででも”なけなしのメッキ”を纏う。ベルナールはそんな決意を固め――

「重歩兵長！　重歩兵長はいるかぁー！」
　部屋の外から上がった横槍により遮られた。
「おっと。噂をすれば、逞しい方の中でも最もたるが来ましたな」
　ロイは、立ち上がったベルナールの背中にそんな言葉を投げかけて茶を啜る。
　来訪者は真紅の重鎧を着込んだ女性であった。特筆すべき特徴としては、流れるような茶髪もそうだが、その背丈にあった。その背はベルナールを見下ろすほどである。女性はレアンという。元はこの町の令嬢であるが、周囲の反対を押し切って軍に入団。その態度や鍛え上げられた肉体も手伝って、付いた仇名が”鋼鉄の女”である。
「レアン殿。鎧は外して休息をと――」
「私の事はともかく。ギャレットと名乗る男から伝言です。『土産がある。ベルナールを呼べ』と」
「……ギャレット、だと!?」

それはベルナールにとって余りにも想定外の来客であり、彼は目を見開くしかなかった。

男は深緑の町の入り口で外套付きの荷車と共に立ち尽くしていた。人力で曳くには少々余るような大型の車だが、荷車の持ち柄を握る男は涼しい顔をしている。目つきが悪く無精な金髪をした、不愛想な男だった。

「ギャレット！」

到着したベルナールが、ランプ片手に声をかける。金髪の男――ギャレットは皮肉な笑みを見せた。

「久しぶりだな叔父貴。元気だったか」

「……職務中だ。余り砕けた呼び方は感心しない」

ベルナールに対する叔父貴という呼称は、ギャレットの父とベルナールの付き合いに由来する。家族ぐるみの付き合いがあったため、何時しかギャレットはそういった呼び方をするようになっていた。

ベルナールは、ギャレットが握る巨大な鉄鎚へと目をやる。鉄槌の先端、棘に覆われた黒染めの鉄球は血を吸い、どす黒く変色していた。

「あぁ……道すがら出くわしたのは殴り殺しておいた。何、人間よりゃ全然弱い連中だ」

さらりと魔物の撃破を示唆したギャレットは、この王国出身の傭兵である。王国は平和そのものであったから不要であったが、魔物が復活するまで戦争が無かった訳でもない。特に南方諸国と呼ばれる地域では、多数の小規模国家が乱立し覇権を争っていた。そういった地域にギャレットは赴いていたのだ。戦闘経験は豊富、動揺が少ないのもその為だった。

「お前……南方諸国へ出向していたのではなかったのか」

「一仕事片付いちまったから、西の町にいる親父に顔でも見せてやろうと思ってな。そしたら魔物が王都を占拠したっつう報せがきたんで、物はついでと叔父貴の様子も見にきたんだが……余り大丈夫じゃなさそうだな？」

「……」

ギャレットの軽口に対し、ベルナールは言い返す事が出来ない。普段ならば一言二言ほど小言を放つくらいはする間柄であり、ギャレットも〝それ〟が来ない事に若干の驚きを見せた。
「……西の町はどうなっていた？」
「あぁ、少なくとも俺が発った時は無事だった。近衛の残党と、王都正規兵の残党が流れててな。そこに西の大国が部隊を置いて防衛してる状態だ」
それはベルナールの掴んでいない情報だった。中央で魔物が復活し、各都市との連絡は完全に途絶えているのが現状だ。都市が無事で、更に防衛する戦力が明快に判明した事でも大きな進展であったが、それだけでは飽き足らない。
「……西の大国が、か？」
西の大国。王国の西に隣接する国家であり、千年戦争時代から存在する都市を首都とする大国である。北の大国同様王家の親戚筋に当たり、以前は交流も盛んであった。だが王国は首都が占拠され、国王すら崩御した状態。それでも義理を通し西の町へ軍を派遣するというのは、国家の動向としては訝しむべき要素に溢れている。
「その大将がリリアだったか。ともかく姫さんでな。なんでも王子様の王都奪還の為、全面協力する腹らしい」
ベルナールはそこで、有る可能性に辿り着いた。
「西の大国の軍勢といったな。数と、出来ればどの部隊が来たか。知らんか？」
「部隊なんて知ってる訳ねぇだろうが。本職でもねぇんだし……選りすぐりの魔法剣士がどうこうとは聞いたが。それと数だが正規軍っつうには少なかった気がする」
「……魔剣士の親衛隊か。ならば合点がいく」
プリンセス・リリア。西の大国に君臨する王家の姫君であり、かつての千年戦争の折英雄王が振るい、その後正妻に送られた神剣エクスカリバーの所有者でもある。まず彼女の王家内での立ち位置としては、この王国にかなり近いポジションにある。親王国派と考えていい。親王国派としての存在意義を消滅させないために、彼女が自分の

采配で率いられる分の軍勢を率いたとすれば、政治的にも納得出来る話に収まる。
「ま。俺が知ってるのはそれくらいだ。考えるのは叔父貴達の役目だろう」
「……十分だ。土産というのはそれか？」
そこでギャレットはらしくもない笑みを浮かべてみせた。
「まさか。そんなの俺らしくねぇだろ？　友人を連れて来てやったんだ」
「友、人……っ!?」
待ってましたと言わんばかりのタイミングであった。ギャレットの荷車から人影が一つ軽快に飛び出す。ダークブラウンの髪といい、緑色を基調とした独特の制服といい、一般的な王国軍兵士の容姿からは悉くかけ離れた若者。その姿をベルナールが忘れるはずもない。
「ユリアン！」
「よっ」
ユリアン兵士長。クレイブから後を譲られた兵士長である。傭兵であった経歴もあり実戦経験も豊富、更に部下の信頼も篤く、王子ともよく剣を交えていた人物だ。普段は彼の隣に副官のアリアがついているのだが、今日は彼女の姿はなかった。
「指揮官不足だろうと思って、向こうはミレイユさんとアリアに任せてこっちに来たんだ。王国にとっちゃ、こっちの方が重要拠点だしな？」
すらすらと語るユリアンに対し、ベルナールはまだ頭の処理が追い付かず目をパチクリさせていた。
「ともかく俺様がこっちに来たんだ。こっから逆転。立てるよな？」
サムズアップ。露出した歯が、ランプの明かりを得てきらりと光る。自信家のユリアンらしい、事件が起こる前から変化を感じさせない仕草。だが普段から変わらないというそれだけで、闇を照らす光にも転ずるのだ。
「あぁ……あぁ！」
声を張り上げたベルナールの目に最早迷いはない。自らを信頼し

てくれた仕えるべき主君の為、慕ってくれた部下の為、そして友のために。必ずや、この国にとっての希望を掴み取ると。

9．明日を護る戦い

傷だらけの鎧は朝焼けに照らされ、撫でるような粉雪は死地に赴く兵士達を祝福した。早朝、王国軍残党は深緑の町の郊外に展開する。総勢２００名足らず。砦に残した新兵、弓兵合わせて８０を除いた、王国軍残党の全軍である。５００人超いた兵士は、たったの６日で半数にその数を減らしていた。

王国軍残党の最後方に陣取るのは、彼らの主力火力たる魔術師（メイジ）。魔術師らは、新たに戦闘に加わる新兵らに対し刻印”対魔の契り”を刻んでいた。それは対象を”味方”と定義する刻印。彼らが用いる火球の魔術に巻き込まない為のものだ。

「……壮観ですなぁ」

魔術師ロイは軍勢を眺め、そう零した。この部隊が消滅すれば確実に深緑の町は崩壊する。背水の陣でありながら、兵士達は誰一人弱音を吐かない。ただ沈黙して、敵が来たる方角を見据えていた。

「ロイさん……」

トトノはそんな、まるで死地に挑むような顔をしたロイを心配そうに見つめていた。

ユリアン率いる精鋭隊は、本隊の左翼に陣を構えていた。遊撃という名目だが、敵大将が発見された際の決死隊としての役割も持ち合わせていた。

「――ユリアン兵士長」

「お、ヘクターか。久しぶりだな」

「ええ。お会い出来て良かったです」

ヘクターは、何一つ悩みを抱えていないような爽やかな笑みを浮かべていた。その表情にユリアンは一瞬戸惑ってしまう。

「まぁなんだ。マジでヤバくなったら俺様か、あそこの不愛想な奴に任せてくれ」

あそこ、と言って指した先では、黒鎧を纏ったギャレットが鼻を鳴らしていた。彼は重歩兵だが傭兵の身である為、正規軍の重歩兵隊で

はなくユリアンの配下に付く事となったのだ。
「なんとなく分かるんです。今日で決着がつくって」
「おっ、なら相当頑張らなきゃな！」
　ユリアンはにぃと笑ってはぐらかしてみせる。ヘクターの語らんとする事が分からないユリアンではなかったが、それは将が頷いていい言葉では断じてなかった。
「……ふふっ。そうですね。それはそうと」
　ヘクターが視線を向けた先。透き通るような眼で一心不乱に先を見据える青髪の少女フィリス。首に巻いたボロボロのスカーフが風に煽られ靡いていた。彼女は最前線での戦いを望み、自ら志願してこの部隊に所属していた。
「彼女。親の仇を討つ為に気負いすぎています、その」
「分かってる。俺様に任せろって」
「よろしくお願いします」
　ヘクターは頭を下げ、ユリアンの傍を離れた。それを確認してユリアンは、長く息を吐く。
「皆揃って、死にに行くみたいな覚悟が決まり過ぎてるな。飲まれてやがる」
　戦場に漂う緊張は紛れもなく決戦のそれだった。それは昨日に比べ戦線が下がっている事に由来するのと、全軍が一カ所に集結するというシチュエーションがそうさせるのだろうとユリアンは推測した。だが彼は、そしてベルナールは、それを覆すだけのカリスマを持ち合わせてはいない。
「……頼むぜ、大将」

　最前列に並ぶ重歩兵隊。総大将はその先頭に立ち、戦場となる大地を見据えていた。彼はこの戦場に漂う空気を背中で感じ取っていた。
「――聞けぇ!!」
　だからこそ彼は声を張り上げる。振り返る事無く、戦場を見据えながら、展開する軍全体に響き渡る様に。

「貴殿らは何を護りに集った！　何を得る為に此処に立つ！」
ベルナールの問いに対し、明確に解を出せる者は少ない。建前上の正解も存在するが、兵達の理念はこの地にて防衛戦を重ねる内に実に多くの物を渾然と吸収していた。
「深緑の町に住まう民を救う為か！　復讐を果たす為か！」
図星な者もいる。が、ベルナールはそれを否定することはしなかった。
「私は――俺はッ！　明日を護る為にこうして立った!!」
兵士達はベルナールの言葉に、総大将としての覚悟を見た。
粉雪の向こう。敵の先頭が、下卑た表情を浮かべる下賤なるゴブリン達の姿が、薄らと兵達の視界に入り始める。
「終わらぬ戦いに、積もる屍に苛まれもするだろう！　だが明日を諦めては、人は生きながらにして亡者に成り果てるのだ！」
だがもう誰も恐れない。近く訪れる滅びを知りながら、それでも立ち上がった者達が、その程度に怯えを感じるはずもない。舞う粉雪、突き刺す冷気すらも飲み干すほどの熱気が、戦場に渦巻いている。
「艱難辛苦を凌ぎ、抗い続ける覚悟のある者はッ！」
ベルナールは大盾を掲げた。表面は真紅に染め上げられた盾だが、その裏地は金色である。メッキは朝日に照らされ、軍の最後列にまで光を反射した。
「――この、『金色の盾』に続けエーッ!!」
ベルナールの紡いだ言葉は、兵にとって最大級の効力を持ったと言って良いだろう。覚悟を抱いた勇士の雄叫びが、朝の静謐を容易く引き裂いた。

「よっしゃァ！　俺様を見失うなよ、抜・剣・突・撃ッ!!」
ひと際苛烈に吼えたのは、ユリアン率いる精鋭部隊であった。人数として５０人もいないが、志願したフィリスを除き王都から生き延びた歴戦の兵士である。田園を踏みしめ、魔物の一群へと突進した。圧倒的な数的不利こそあれ、ゴブリンと人間の体格差は無視できないも

のがある。優勢であれば一方的に切り伏せていくことも可能だ。
「グギギッ！」
「ゴブリン――父の、仇！」
フィリスの一閃がゴブリンの首筋を跳ね飛ばす。新兵ながらその剣筋には一切の迷いがない。間髪いれず、視界の隅に映った二体目のゴブリンに対し袈裟切りを仕掛けた。
「グギギャァッ!!」
上がる断末魔。慈悲なき一振りがゴブリンを文字通り両断してみせる。人ならざる漆黒の体液が白き鎧を穢した。女の新兵とは思えぬ力量、技量に、傍目で一連の光景を眺めていたユリアンは舌を巻いた。
「おい」
すぐさまギャレットに釘を刺される。
「おおっと！　俺様ちゃんと働いてるぜ？」
さっとユリアンは対応し、寄って来たゴブリンを薙ぎ払ってみせた。が、ギャレットのむすっとした表情は揺らがない。
「……報告だ。中央の重歩兵が魔術による攻撃を受けている。敵の連れらしい」
「なっ……あいつら魔術まで使うのかよ！　初耳だぞ！」
少なくとも会議では全く出なかった話題であるし、王都を奪われた際も魔術を使う魔物などあの一体を除いて存在しなかった。王国軍残党にとって想定外の脅威だが、しかしそれは諦観には繋がらない。ユリアン隊は彼の号令の元、ゆるりと進路を変更し敵中突破を図る。
「ユリアン兵士長！」
後方から上がったヘクターの声に振り返る。
「なんだこんな時に！」
「空から、空からペガサスナイトが！」
ヘクターの報告が先か、それとも彼らの頭上を、一陣の白翼が通り過ぎていったのが先か。深緑の町から飛び立ったペガサスは敵の上空を飛来し、ユリアン達の目的地に向かって急降下していった。それだけではない。ユリアンの動体視力は確かに、ペガサスに跨った防具

も碌につけていない高貴なドレスを纏った女の姿を捕らえていた。
「アイツなにやって――あぁもう！　しかたねぇ行くぞ！」
ユリアン隊は一団となり、戦場を掻き分ける。そんな中で彼らは、ゴブリンに遅れて戦場に現れし敵の姿が散見されるようになる。
深緑の町に襲い来る敵は、魔物だけではなかった。彼らは各々の武装を身につけ、魔物の群れに混じりグールのように蠢く。
「……あ、ァ……」
身に纏うものを含め、全身が黒く染まった兵士。魔物の瘴気にあてられ操られた人間の成れの果てだ。操られているだけあってその動きは緩慢だが、魔物とは一つ明確に違う点があった。
「っ！」
切りかかった兵士に対し、フィリスの剣捌きが一瞬鈍る。今の彼女の剣は”人を斬る”為に振るわれているのではない。心構えの違いから生まれた僅かな抵抗。その一瞬の隙間に斬撃は捻じ込まれた。
「ふんっ」
が、斬撃がフィリスを捉えることはなかった。剣は主共々宙を舞っていた。
「仇討ちなら、仇討ちらしく戦えばいい。存外誰も見ていないからな」
無愛想な重歩兵。ギャレット――彼は、その手に握るモーニングスターを振るい、武装した男一人をかち上げたのだ。振るわれた鉄球は残心なく、次の相手へと振るわれる。
「……あ、あれ……ここは、ぐっ!?」
かち上げられ、倒れ付した兵士が顔をあげるも、その表情は苦悶で歪んでいた。ただ瘴気の影響が抜け出ているのは間違いなかった。フィリスはほっと胸を撫で下ろし、ゴブリンを切り捨てながら先頭を切るユリアンを追う。
「骨は逝ってるだろうが死にはしない。這ってでも動け、死ぬぞ」
「は、はい……！」
律儀にもギャレットに言われたとおり、這って新緑の町を目指す彼の背中を眺めることもなく、ギャレットは淡々と得物を振るっていく。ゴブリンは潰し、人はかちあげる。

「……やりにくいな」
ギャレットは、そんな言葉を口にしていた。

「――まぁそう慌てなさるな。魔法の力は侮れんのだぞ」
ロイの纏うローブの内から蒼白の光が迸る。不可視の力は彼の存在を機軸に再構成され、紅蓮の火球として顕現した。魔術師が続々と放つ火球は、地を這う魔物達を焼き払っていった。弓矢とは比較にならない範囲、そして火力を持ち、発動に時間を要する。それだけの火力、範囲を持ちながら、先刻刻んだ刻印により味方は巻き込まない。それが魔術というものだった。
そして先ほどまで、敵もその力を行使して――いたのだ。
「おい、大丈夫かアンタ！」
駆けつけたユリアンが、地に足をつけた天馬に群がるゴブリンを切り払いながら、騎手に対して大声で叫ぶ。天馬を駆っていた彼女はウェーブがかったブロンドの髪をした、そこに在るだけで気品を漂わせる女性であった。鎧もつけず、槍を振るって陸の騎兵さながらに魔物に抗っている。
「は、はい！」
女は足で天馬の腹を蹴って指示を飛ばしつつ、槍を振るいながら辛うじて返事を返す。この時点で既に一介の令嬢でも、無謀なる新兵でもない事は自明だった。
「俺はユリアン、兵士長だ！　アンタ何者だ！」
「エスタと申します！　いても立ってもいられなくなって、屋敷を飛び出していました！」
言葉を交わしながら、エスタとユリアンは互いの間合いを把握しつつ来たる敵に刃を振るう。即席の連携ながら糸と糸が織りあうように繋がっていくのは、二人の観察力と技量が為せる業だ。
「話は後で聞く、それより敵の魔術師はどこいった!?」
「ペガサスの足元辺りに、いませんか！」

ユリアンが言われた場所を傍目で見やると確かに、蹄でステップを踏むペガサスの足元に白いローブを纏ったそれらしい青年が突っ伏していた。ペガサスが着地した際、ほぼ真正面から衝突し、昏睡させたのだ。
「アンタか……！　おいしっかりしろ、立て！」
「……ん、あぁ」
ユリアンからすれば駄目で元々といった所だったが、ローブの男はその秀麗で華奢な見た目に合わず存外頑丈であった。すぐに意識を取り戻し、周囲を確認しつつも起き上がる。
「件の魔術師は恐らく僕で間違いない……迷惑をかけたようだね」
ユリアンに対し小さく頭を下げ、フードを被り直して金髪を隠す。そして杖を掲げてみせた。
「せめてもの罪滅ぼしだ。この戦、僕も戦わせて欲しい」
「おう！　よろしくな……」
挨拶代わりとばかりに男は火球を生成した。そして何一つ躊躇う事も無く足元へと投擲する。着弾した灼熱はすぐさま爆散四散し、一帯のゴブリンや兵士達、ユリアンらも含めて全てを包み込む。
――だがその爆発の中にあって、ユリアンら王国軍の味方は無傷だった。
「まぁ……」
エスタも思わず感嘆の息を漏らす。当然、彼女の騎乗するペガサスも無傷である。
「お、おいおい……刻印はどうしたんだよ？」
「”対魔の契り”の事かい？　味方メイジの巻き込み回避の刻印なら、さくっと一斉に刻むのが一番だと思うけど……」
魔術師は当然のように言ってのけるが、少なくともユリアンの知りうる限り、”対魔の契り”を遠距離かつ一斉に施す技術など存在しない。そして単純に火球についてもその精度、火力は王国の魔術師に後れを取るどころか、頭一つ抜きん出てすらいる。
「まぁそれについては後で教授していこう。忘れている事を思い出すのは割かし簡単だからね」

全てを見透かすような、男の妙な物言いにユリアンの中にくすぶる不信が眉間にしわを寄せさせる。
「……アンタ、名前は？　どこの人間だ」
「僕はヴァレリー。迫害やら何やらであちこちを転々としてきた身だから何とも言いようがないけど……」
少し間を置いて。
「”千年前のログレス王国”、かな。僕の国と呼べるものは、多分それしかない」
そんな頓珍漢な解答であった。
「はぁ……？」
当然ユリアンは疑問符を浮かべるが、ヴァレリーはそんな事もお構いなしで遠方を見据え、苦い表情を浮かべている。
「……しかしもうこれだけ進行しているのか。となると直にアレが来る」
ヴァレリーが語ったその直後と言っていい。地平線に、これまで現れなかった敵の影がはっきりと顔を出した。ゴブリンと比べて圧倒的な巨躯を誇る魔物、オーガ。握り締められた棍棒は正に木をそのまま引き抜いたようですらある。それが、彼らの確認出来る限り十数体同時に戦場に現れようとしている。オーガだけではない。操られし人間やこれまでの攻勢とは比べ物にならない頭数のゴブリンが地を均し、その上空にはガーゴイルが空を埋め尽くさんばかりに群れを成していた。
これまでの敢闘など前座に過ぎない。真の絶望が迫ろうとしていた。
「な、なんですか。あれは――」
エスタは声を発しながら、唖然としてその光景を見つめる。唯一、王都落城の現場を知るユリアンの脳裏を駆けた言葉があった。ユリアンはそれを口走った。
「……ラッシュ。ラッシュが来るッ！」

１０．帰還

今残っている兵士ではとても凌ぎ切れる数ではない魔物の一群は、無慈悲にもその足を止めることはなかった。絶望的とも言える状況で、ベルナールは声を張り上げる。

「怯むな！　陣形を立て直す！」

後衛のメイジの援護もあって、前哨戦の決着はつきつつあった。それでも今の彼らは癒し手を欠いた状態である。負傷したり疲労の限界が来ていた兵は撤退しており、戦場に残っている者は決して多くない。男ですら悲鳴を上げる激戦の中、真紅の鎧を纏う一人の重歩兵が淡々とメイスを振るう姿が一層映えた。その在り様は伊達に男勝りを自称していない。だが、単騎の活躍では戦場は変えられないというのもまた、厳然たる事実だった。

「レアン殿」

「あぁ。ベルナール殿」

ベルナールとレアンの間に僅かばかりの沈黙が漂った。

「一つ、いいだろうか」

「俺でよければ聞こう」

少し間を置いて、レアンは普段どおりの口調で語り始める。

「たまたま居合わせた身だが、此処は心地よかった。誰も私を特別扱いしなかった」

「女である以前に、貴重な戦力だったのでな。その点は特別視している」

赤兜の内から微笑が漏れる。釣られてベルナールの頬も緩んだ。

「だからだろうな……此処を守りたい。諦めたくは、ないんだ――！」

レアンの足元から湧き出したのは、眩いばかりの閃光だった。戦場という砥石によって一時的に研ぎ澄まされた技能の発現、それをスキルという。並みの兵士では発動はおろか取得すら出来ないそれを、レアンは容易く発動して見せた。

「……同感だ！」

ベルナールの足元からも同様の閃光が迸る。敵は既に近く、魔術師

達は迎撃を開始している。オーガ達は牙を剥き出しにし、行く手を遮らんと立ち塞がる重歩兵達を見下ろした。オーガは手に持つ棍棒を乱雑に振るう。箒で塵を払うかの如き攻撃、ただそれのみで重歩兵が築き上げた陣が崩れつつある。レアン、ベルナールの二人は自己のスキルを発動し、的確に盾を使って攻撃を受け流すことにより辛うじて堪えてはいたが、反撃はおぼつかず消耗するばかりだ。

戦況を変化せしめたのは、一つの掛け声であった。

「たぁーッ！」

刹那、敵味方双方の動きが凍った。両陣営の勘定に無かった乱入者が跳躍した。純白のマントは翻り、白銀のハルバートの矛先がオーガの顔面を強襲する。オーガを力任せに突き飛ばして着地したその少女は、トレードマークたる青いベレー帽を片手で弄った。

「王子、ご帰還！　王子が帰還しました!!」

――少女は、近衛騎士アリシアは高らかにそれを告げた。

「そして遅くなりましたが、近衛騎士アリシア。助太刀に馳せ参じました！」

突然ハルバートを携え登場した少女が、近衛騎士を名乗ったのだ。殆ど名が知れていないこともあって、戦列には若干の混乱を生む。

「近衛……どうみても少女だが……なら何故私は反対されたのだ……」

レアンに至ってはまず近衛騎士であるという事から疑い始める始末だった。女であるという一点で武官になれなかった彼女にとって、目の前に立つ少女が近衛騎士であるという事実は色々な概念を覆す破壊力を有していた。

「ところで、王子はどちらに？」

「あちらです！」

ベルナールの問いに対しアリシアの答えは実にスマートだった。アリシア達の後方、後衛のを割って彼は――王子はその姿を現す。その傍らではアンナが複数の神聖結晶を抱きかかえていた。

「――我が同胞に、女神の加護ぞあらん！」

王子の一喝と同時に、アンナは神聖結晶を上空へと放り投げた。投

げ出された神聖結晶は砕け散り、中空に蒼光を滲ませる。光はすぐに形を取った。
『人の子よ――我が加護を授けましょう』
慈愛に満ちた笑みを浮かべ、女神アイギスが顕現する。魔物達が知る由もないはずだが、彼らは本能でそれを絶対的な災厄と理解した。アイギスの幻影を見たのみで魔物達は半ばパニック状態へと陥るが、それだけでは終わらない。王国軍の兵士全員、そして王子が連れる山賊達が穏やかな蒼光に包まれる。
「よぉーしお前ら！　雪崩れ込めェ!!」
モーティマの号令と同時に山賊達が怒涛の勢いで戦場へと雪崩れ込む。
「魔物……倒す！」
フューネスの振るう大斧が、オーガの大木のような片足を斬り飛ばす。捨て身の一撃だが、反撃を受けなければ問題はない。フューネスに続く山賊達も渾身の力でパニックに陥る魔物達を追い回す。
「彼らは、山賊……!?」
ベルナールが問うた眼前に、風の如く彼女は舞い降りた。白のバンダナの少女、ハリッサはベルナールの纏う黄金の鎧を物珍しげに眺め、やがて口を開いた。
「なんだいアンタ、味方なのかい。折角金になりそうなのに……」
「な、なな……！」
小娘、それも山賊に罵られ、ベルナールの表情が怒りで赤く染まる。元々彼は沸点の高いほうではないが、今回ばかりは死を覚悟した戦場という状況も手伝った。
「そう怒るな、ベルナール」
「!!」
しかしベルナールの怒りも、王子に呼びかけられれば流石に霧散した。
「……大儀だった。まずは片付けるぞ」
珍しく王子の口元は緩んでいた。

王子の帰還、山賊という援軍、そして女神アイギスの加護により前衛は完全に息を吹き返した。勢いを取り戻した王国軍残党は一斉に反撃に移り、既に魔物達を押し返しつつある。だが一つ、解決していない問題があった。

「――治癒を開始します！」

彼女なりに声を張ったアリサ。王宮魔術師が集う後衛から前線へと癒しの魔力を飛ばす。彼女の目に付く限り、傷ついた者から順に。癒しの力は傷を塞ぐのみならず、気力を回復させる力をも持っている。たった一人の癒し手でありながら、彼女は既に眼下に広がる戦場をコントロールしつつあった。

そんな中、彼女の視界に入っていたのは陣の右翼にて交戦する一団。王国軍の物ではない鎧姿の男が数人、徒党を組んで魔物を迎撃している。だが長時間の戦闘により、疲弊している様は傍目からも見て取れる。

アリサが癒しの力を飛ばそうとして呼び止められた。

「あの人達はいいんです」

荷物を背負って、微笑みを湛えながらトトノが現れる。

「えっ……えっ？」

「自前の薬草で回復するという契約なので。お構いなく」

アリサが治癒の力を飛ばそうとした一団は、トトノの雇った傭兵である。アリサはトトノの浮かべる微笑の意図を察しきれず、他の兵士の回復を優先するのだった。

一方、ソーマとバシラが駆け付けた弓兵の陣は悲壮感に溢れている。原因となっているのは今にも迫り来ようとしているガーゴイルの群れだ。上空を舞うそれらは決して武器を持つ人間を襲おうとはしない。彼らの獲物は非力な一般市民である。如何に地上で勝利を重ねようと、相当数のガーゴイルが町に入った時点で一般市民を巻き込んでの大混戦となる。

従ってガーゴイルは全て落とさねばならないのだが――その圧倒するような数が弓兵達の心を完膚なきまでに挫いている。
「あの耳、もしかして獣人か……？」
兵士達がざわざわと声を上げる中、そんな声が上がる。当然、獣人の射手であるバシラに向けられた言葉だ。
「皆さん。矢は幾つ残ってますか？」
バシラは追求する事無く、周囲の兵士達に話しかける。彼女なりにその類の言葉をかけられる事は理解していた。理解していながら、それでも女神の誘いに頷いた。
「こ、これだけです」
複数人の弓兵が持ってきたのは大量の矢筒だった。整理されているので、矢の総数は２０００本程だという事が一目で分かるようになっている。バシラはそれを一瞥し、続けて迫りくるガーゴイルを睨んだ。弓矢の射程というにはまだ遠い距離、粒程度にしか視認出来ない距離だが、その状態でもバシラは敵の総数を数える。僅かばかりの間を置いて、バシラは口走った。
「足りますね」
「で、ですが射手が足りません！」
「――５分の１、撃ちます。後は皆さんで手分けして撃って下さい」
反論しようとした弓兵の言を遮る様にバシラは言い放つ。片手で矢筒を傍に寄せると、２本の矢を番え、即座に放つ。全ての動作間には刹那の間すら存在しない。狙いを定める事すらしないが、放たれた矢は吸われるようにそれぞれ別の標的へ導かれ、穿つ。すぐさま次の矢を番え、放ち、また二つ射貫く。彼女自らが啖呵を切った５分の１、４００本というラインすらも超えてしまいそうな、神速と形容するのが相応しい程の神業。
「これが、神速の射手……」
ソーマがポツリと漏らしつつ、矢筒を拾った。結局ガーゴイルの大群は残らず射ち落される。バシラは４１３本もの矢を放ち、その全てを目標に命中させていた。戦いが終わった後に、彼女の種族を気にする者は誰一人としていなかった。

絶望的な状況で始まった決戦は、奇跡的な大逆転を以てその幕を下ろした。戦闘後、ベルナールは再度軍勢をまとめ上げ、王子の眼前へと展開する。軍勢の先頭に立ったベルナールは王子の前に跪き、頭を垂れる。

「――帰還を心待ちしておりました。王子」

「顔を上げろ。本当によく、堪えてくれた」

王子はベルナールに手を差し伸べる。聴衆たる兵士達がどっと沸いた。

「王子様、万歳!!」

万雷の喝采が田園に響き渡る。逆転の機運に、誰もが興奮を隠せなかった。その熱気はすぐさま新緑の町にまで広がり、人々は王子を、女神アイギスを称えるのだった。

新緑の町に帰投した王国軍残党はこれ以上ないくらいの歓声に包まれる。そのまま宴へともつれ込み、喧騒は深夜まで続いた――

やがて宴も収まり新緑の町に静寂が訪れる。皆が寝静まった町、その最も大きな屋敷の廊下を政務官アンナは緊張した面持ちで歩いている。彼女が立ち止まったのは、王子に寝室として与えられている部屋だった。意を決しアンナはその部屋へと足を踏み入れる。

大窓の淵に佇み、月を眺める青年。その横顔は、アンナの目には余りに儚く映った。しばしの間、アンナは立ち尽くしてその横顔に見入っていた。

二人が動いたのは、王子がアンナの来室に気づき首を傾けた時だった。王子はすぐに笑みを作り、アンナを出迎える。

「こんな深夜に呼び出してすまない」

アンナは言葉を失う。彼の言葉には覇気がまるで感じられなかった。カリスマの王子などそこには面影も無く、一人の苦悩する青年がいるのみだった。

「いえ……ですがその、王子。何故寝室に？」
「あまり聞かれたい事ではない」
「聞かれたくない事、ですか……？」
「アンナ。俺は……王としてやっていけるのだろうか」
　王子のその言葉を、アンナは薄々予測していた。予測せざるを得なかった。そしてそれはアンナの失態も抉る一言である。
「神殿を発とうとしたあの時、俺は……向う見ずにとんでもない計画を立てかけた」
「それは……」
　アンナは押し黙ってしまう。あの場面において、王子の采配に疑問を持つ者はいなかった。あらゆる思考をも押し流す、士気の高揚、意志統一があったのだ。それは平時であればカリスマと呼称される代物だろう。確かにその面においては、王子は十分にカリスマを持つ存在だった。
「……アンナ」
　王子が彼女の名を呼ぶと同時、一歩彼女へと踏み出した。アンナはその場から動くことすら出来ない。手を伸ばされ、肩を掴まれてもアンナは、身じろぎ一つすることが出来なかった。
「此処での出来事は他言無用で頼む。外で弱音は漏らさない」
「王子……」
　アンナは目を伏せ、王子の震える肩を抱き寄せ、膝をついた王子を優しく抱擁した。

１０．５　幕間・エスタ小隊

魔物の大攻勢を劇的な勝利にて粉砕したあの戦いから三日。この間、王子軍は新緑の町を中心拠点としつつ、近隣の村落を解放していった。その活動には、新米指揮官に実戦経験を積ませるという目論みもあった。

「……こんな所でしょうか」

エスタは天馬に跨りながら槍を振るい、穂を滴る鮮血を払う。彼女が実戦に出るようになって日も浅い為、鎧も用意出来ないのが現状だが、彼女の騎乗術や槍術は既に一般兵らとは一線を画す領域にあった。

エスタの生まれは武官ではなく、さる高貴な貴族家である。三日前の決戦の際、我慢ならずに出陣したエスタはその後も王国軍の一員として在ろうと、王子に直談判さえした。貴族家の娘を軍に編入するとなれば紛糾するのも無理はない。紆余曲折あった末の落とし所が、彼女を将官として教育し直す事であった。

彼女は、近隣の村に巣食う魔物を撃滅した所である。敵対する魔物は決して多くなく、事前予測でも攻略は難しくない拠点。エスタに数名の補佐役を付けた２０人弱の部隊。その初陣は下馬評通りの快勝に終わった。

逃走しようとしたゴブリンを、天馬の機動力を活かして掃討したエスタ。仕事を終えた彼女の元に、自然と兵卒が集う。その中には真紅の鎧を纏う重歩兵レアンや、父譲りの白鎧を身に着けたフィリスの姿もあった。

「皆様、ありがとうございました」

深々と頭を下げるエスタ。その美麗な姿は戦闘後の沈黙を背景によく映えた。

「あの、皆様。もし私の采配におかしなところがあれば、なんでも仰ってください」

「……おい魔術師。こういうのはてめぇの仕事だろう」

元々こういった話が苦手なギャレットは、鬱陶しげに白のローブを

纏った魔術師に話題を放り投げる。
　魔術師ヴァレリー。あの千年戦争の時代から身体を乗り換え、記憶を継ぎながら生き続けてきたと自称する魔術師。文献にすら残っていない磨耗した王国の記録を語る彼は”御伽噺の魔法使い”のようでもあった。だが戦闘力は精々王国軍のメイジ兵に毛が生えた程度、そして肝心の記憶に関しても、幾度もの肉体切り替えの果てに一部が磨耗していた為、彼の語ることは、王子軍内では話半分程度に受け入れられていた。
「『エスタ殿を支えよ』と、ベルナール将軍に頼まれたのは君だろう？」
　ベルナール他主だった将官は、新緑の町にて今後の指針に関わる会議に望む事は決定していた。その為、この制圧戦の補佐官選出は”実戦経験が豊富な者”を基準としていた。ギャレットは魔物が復活する以前傭兵であったことから、立場的には外様ながら白羽の矢が立ったのだ。
「頼まれたのなら筋を通すのが傭兵じゃないかい？」
「俺は最初から最後まで使われる側だったんだが」
「最後だなんて悲しい事を言うなよ。僕はこれでも、君の采配を楽しみにしているんだから」
　ギャレットは金髪を乱雑に掻く。彼はヴァレリーとのやり取りの中で苛立ちを熟成させつつあった。元々ギャレットは気が長い方でもないが、対話の相手が最も苦手とするタイプだったというのも大きい。
「……あの。ギャレット殿？」
「助言する事があるとするなら、後ろから上役がごちゃごちゃ言っても前には聞こえんし、聞かん。最前線に出て敵をぶっ潰しながらでも指示をすることだ。指揮官が強けりゃ自ずと部下もついてくる」
　ギャレットの言い放ったそれは、彼の個人的な意見という側面が極めて強いものだ。当然受け入れられるはずもない、自分は見放されてお役御免、気ままな一傭兵へと戻れる――彼はそう踏んでいた。だが。
「なるほど……！　とても深いお言葉、次の戦場では実践してみせま

す！」
　つい先日に戦地に出たばかりの令嬢は、それが世間一般で言うところの無茶であるという事すら知らなかった。そしてそれは可能だと言い放ったのだ。
　……ギャレットの口元が僅かに引きつったのを、当の令嬢は気づくよしもなく。傍観していたヴァレリーは笑みを堪えながら、ギャレットの肩を叩いた。
「箱入りのお嬢様に中々手厳しいね」
「……」
「無視だなんて悲しいなぁ。お喋りしようよ」
「お前、人嫌いだっつってなかったか」
「そりゃ迫害されるなら嫌いにもなるけど、今は別段そうでもない。なら、関わらないのは損だろう？」
「……席を外す。後は勝手にやれ」
　ギャレットは嘆息し、何も言わずに背を向けて歩き出した。
「うーむ……コミュニケーション能力豊かな青年のように振る舞ってみたつもりだけど、隠遁生活のブランクは中々取り戻せそうにないね」
「……振る舞うからいけないのでは？　本心を吐けばいい」
　ぼやいたヴァレリーにそう声をかけたのは赤鎧の重歩兵レアンである。彼女とヴァレリーは実質初対面に近しいが、お互いあまり遠慮するタチではなかった。
「あぁでも、関わらないのが損だというのは僕なりの本心だよ。この力が重宝されるのも、事が解決するまでの――長いか短いか分からないけど、ともかくその間だけだからさ」
「力に自信があるなら、周りが何と言おうと認めさせ続ければいいんじゃないか」
　レアンの発言に、ヴァレリーはほんの僅かに目を開く。そして感心したように、ほぉと声を漏らした。
「……碌に人生を積んでいない小娘が言っても仕方ないか？」
「まさか。そういう啖呵を切れる人が世の中を作っていくんだ。嫌い

なはずがない」
その後もニコニコと、機嫌よくヴァレリーは口を動かしていた。
一方のエスタはというと、新兵フィリスと話をしていた。
「そういえばフィリス殿。貴女は復讐の為、剣を振るっていると聞きました」
「はい……」
頷いたフィリスの表情は暗い。彼女の脳裏にあるのは常にあの光景だった。人が、操られているとはいえ人間が、剣を携え襲い来る。
今日の戦闘では、操られた兵士の姿は発見されなかったものの、いつかまた同じ場面に出くわすとも限らない。その時自分が、果たして迷いを断ち切れるか。その力として、”魔物への復讐”という動機は弱いと自覚していた。
「やはり、いけない事でしょうか」
復讐に突き動かされているのは、何も彼女だけではなく兵士全体の問題でもある。王都を追われた時、王子が女神の加護を授かるまでの時間を稼いだ時。多くの命が失われ、そして同じだけ復讐者を生んだ。
エスタは少し思索を巡らせ、口を開いた。
「もし自分の中で決着がついたら。その時は、私と同じ志を持って戦っては下さいませんか？」
「同じ……志」
「隣で戦う朋を、救いを待つ民を守る為。私はその為に、こうして戦場に立ちました」
「守るため……」
フィリスは自分の右手を見つめる。剣の鍛錬で痛みきったグローブ。彼女自身が積み上げたそれを、ぎゅっと握り締める。
「今はきっと、まだ難しいと思います。ですが何時か。必ず」
「はい。お待ちしておりますわ」
そんな二人の光景を、ヴァレリーは遠目に眺めていた。
「……価値観の達観と天性の才を、”黒き星”の一言で片付けるのは

乱暴なんだろうけどね」

彼は空を見上げる。日は陰り、空にはうっすらと星光が浮かんでいた。

11．不穏

「――魔物だ、魔物が来るぞ!!」
　難民団の最後方から男の声が上がると、彼らは追われる羊のように走り出す。
「北の連中は王子に救われたって言うのに、俺たちはこんなところで死ぬのか！」
「ジジババはどきやがれッ！」
　両脇を崖に挟まれ、薄暗く影が落ちる荒れた旧街道。半狂乱となった人々は互いを押しのけあい、我先にと前へと進む。そんな過酷な旅路で幼子がふるい落とされるのは、ある種の摂理であった。
「誰かっ、誰か娘を――」
　母の声は喧騒により虚しくかき消される。一団から弾き飛ばされた少女や老人などは、もれなくゴブリンの群れの目前へと晒された。そんな中に一人、場違いな人の姿があった。藍色のドレスに身を包んだ白銀の髪の麗人。その手には金色の杖が握られ、周囲には白羽の蝶がたゆたう。どこか俗世離れした雰囲気を醸す女性だった。
「グギャギャ……」
　精々１０匹程度のゴブリンの群れである。その先頭にいた、粗末な杖を持ち髑髏の首飾りをかけた個体。それがゴブリン特有の鳴き声を漏らし、天高く杖を掲げた。ゴブリンの握る杖の先には、鳴き声に呼応するように肥大化する火球の姿があった。
「そうか。もう魔術が使える頃合いか」
　藍のドレスの女はその光景を前に、そんな俯瞰的な言葉を零す。それと同時、彼女の持つ杖の先端にあしらわれた紅玉が光を放った――
「……グギャ？」
　ゴブリンの握る杖頭にて膨張を続けていた火球は、風船がしぼむかの如く減衰した。自身の魔術が不発に終わったことに首を傾げるゴブリンと、何が起こったのか未だに理解できない民衆。その狭間に割って入るように、女はゆるりと躍り出る。
「魔術師……様？」

女の握る杖を見てか、老人の一人がそんな事を呟いた。女はその言葉に振り向くことも無く、魔物を見据える。
「殿は引き受けてやろう。足早に進路を進むといい」
「あ、ありがとうございますっ、魔術師様！」
逃亡する難民たちに振り返ることも無く、女はただゴブリンの群れを睨む。
「……私はお前たちとも関わる気は無いのだが」
「グ、グギギギャッ」
ゴブリンらに戦意喪失の気配もなく、女はひとつ溜息を零して杖を突きつける。そこから生まれ出ずるは紅蓮の業火。煉獄を幾重にも折り畳んだかのような渦巻く豪炎、天性の魔術師が織り成す魔術は、先ほどゴブリンが試みたそれが児戯に等しいものだと雄弁に語る。
流石のゴブリン相手であろうと、実力差を示すには十分であった。そそくさと背中を向け、来た道を引き返していくゴブリンの一団。
「……物分りがいいようだな」
女はその後背へと魔術を投げかけなかった。彼女の生み出した火球は収束をはじめ、残滓の熱のみを残して消滅する。
「……時期としてはその辺りか。ならば王子は北だな」
女は大掛かりな手荷物を拾い直し、難民たちが進んだ道を、新緑の町へと続く旧街道を歩むのだった――

新緑の町を中心とした周辺村落の制圧は順調に進んでいた。しかし順調に事が進めば進むほど、加速度的に”兵員不足”の問題は表層化する。現在の兵数は新兵込みで３００人にも満たなかった。当然この兵数では王都奪還どころか、攻勢に転ずることすらおぼつかず、頭を悩ませる。
王国軍にとっての朗報が届いたのは、あの決戦から丁度1週間が経過した頃だった。
「戦術教官ケイティ。遅ればせながら、女神の導きにより馳せ参じました」
金髪を靡かせる眼鏡の麗人。王子の戦術指南役であったケイティ

が、女神の啓示を聞きつけ、旧街道を渡り避難民を連れて馳せ参じたのだ。王都陥落以前からの既知との再会に、王子は胸を撫で下ろした。正規兵を率いることが出来る将校が一人増えたのは、軍全体にとっても僥倖であった――

「――今後の方針ですが。皆さまの意見を伺いたいと仰っています」

王子の傍らで立つアンナの声が、円卓の上を滑る。列席しているのは合流したケイティ他、ユリアンやベルナール、そしてクレイブ前兵士長といった王国軍指揮官の他、山賊頭モーティマや行商人トトノといった非正規戦闘員の主の姿もあった。

「西の連中と、それから北の大国やら西の大国やらの軍勢引き連れてバシッと王都を奪い返せばいいんじゃねぇのか。その、北と西に関しちゃ王子の親戚筋なんだろ？」

口火を切ったモーティマの意見は単純明快。限りなく最善手に近く、的外れな意見だ。すぐさまケイティが異を唱える。

「……西の大国の救援は現在以上には望めないでしょう。北の大国に至っては伝手すらありません」

「はぁ、英雄ってのは身内にゃ恵まれねぇんだな。そこは同情するぜ」

肩を竦めてみせるモーティマを、ケイティは露骨に睨みつける。これまで治安の悪化しか起こさなかった山賊が、魔物相手に確かな活躍を見せたというのは、伝聞のみでは信じがたいことだった。直接彼らが戦う様を見ていないケイティが彼ら山賊を嫌うのも無理はない。

「……でもどちらにせよ、単独戦力では難しいんですよね」

次に口を開いたのはトトノだった。

「西と北双方に利益をチラつかせてみてはどうでしょう」

「……例えば？」

「そうですね……何かしらの利権、例えば一部主権、売買権とかでもいいです。肩入れすればそれが手に入ると双方に圧をかければ、乗る派閥は必ず――」

「取り戻す国に、売約済のタブを付けろと言うのか!!」

部屋を埋め尽くすようなベルナールの激昂。それを向けられたトトノは小さく悲鳴をあげた。

「あ、あくまで増援を引き出そうとするならこうトレードするなぁって話です、何か色々とごめんなさい！」
「い、いやすまん……冷静さを欠いた」
「ベルナール重歩兵長の怒りは尤もですし、トトノ殿の案にも相互の交渉・連絡をどうするかなど課題もあります。ですが他国を動かそうと思うなら、それ相応の対価が必要な事も事実でしょう。この状況下で、自国の防御力を裂くのに見合う対価が」
クレイブの言に一同は頭を悩ませる。そもそも亡国にそこまでの価値が残っているのか、魔物と戦争をして亡国を蘇生するリスクに勝る利益を提示出来るか。難しい問題だった。
「……貿易」
政務官であるアンナが、最も早く答えを出した。
「北の大国に対しては海を用いた貿易について、西の大国に対しては東方の国々との貿易について」
「貿易か……確かに案としてはあるが、余りにも実現が遠い。国を救うのみならず、他国をも完全に救わねばならんな」
「何より貿易のみなら、国家主権も飲み込んで傀儡とすれば済む話。例え国家を復興できようと、そこに独立はありません」
「……ですね。尤もです」
「王子は何か意見無えのか？」
モーティマが唐突に切り出した事により、会議室内の空気は一変する。誰もが固唾を飲んで、王子の言葉を待った。
「……北、西、双方を説得する他ない」
王子が出した答えは、そんな有り触れたものだった。幾ら王子として教養を受けたとはいえ、彼はまだ若輩である。場数も碌に踏んでいない素人であることも事実だった。
「王子……」
「つまり俺と同意見ってことで良いんだな！」
王子はその後も口をつぐむ。

「ふぁ……」
ほのぼのとした陽気に当てられ、アリシアは欠伸を漏らす。会議室に悲痛な空気が流れる中、屋敷の外は平和そのものであった。勿論魔物の襲撃の合間の、束の間の平穏である事は周知であるが、それでも人々には活気があった。
アリシアは北の砦に少数の兵と山賊を連れて駐在している。この砦の守将であるベルナールが、新緑の町に出向している為代理で彼女が派遣されたのだ。近衛騎士という事で最低限の地位と教養はあり、山賊達の覚えもあるので、ある意味もってこいの人事であった。
執務室にはアリシアの他に、弓兵ソーマと癒し手アリサの姿があった。アリシアは執務机で本を読み、応接席の方ではソーマはアリサにぬいぐるみの縫い方を教わり時間を潰していた。過度の危機感は毒であるから方針が固まるまでは極力普段通りの日常を過ごせと、王子が生存者全員に命じたのだ。
緩やかな時間が流れる中、きっかけとなったのはソーマの視線がふとアリシアの方へと向いたことだった。
「あ、その花……」
ソーマが唐突にそんなことを口走り、アリシアはびくりと肩を震わせる。花、というのは当然、アリシアの持つ押し花の栞である。
「確か王城前に生えてたような？」
「ど、何処にでも生えてる花だと思います」
「へぇ……」
それまで裁縫に興じていた二人の意識は、今や完全にアリシアの持つ栞へと注がれていた。
「えっと……なら別に誤魔化さなくても良かったんじゃ」
「あっ」
「ふーん……？」
ソーマが更に追求の手を伸ばそうとしたその時だった。
「アリシア」
その声は、まるで最初からその場にいたかのように放たれた。
「セシリーさん!?　ど、何処から!?」

「そんな事より一旦物見台に上るといい」
砦内にある物見塔には兵士の他、山賊の野次馬の姿もあった。ガヤガヤと囃し立てるモーティマ配下の山賊達を兵士達が鬱陶しそうに押しのけ、アリシア達の場所を作る。そこからの眺めは、壮観そのものだった。
森の出口から重歩兵の縦列が連なっている。鎧の軋む音はさながら合唱の様であった。アリシア達の視界に入っている範囲でざっと４００人はいるように見える重装の軍勢。その武装にはいずれもアイギス信仰のモチーフが施されており、彼らが宗教関係の軍勢である事が分かるようになっていた。その先頭に立つのは、打って変わって軽装の桃色の髪の女性であった。
「――あ！」
彼女を視界に収めたアリサが驚嘆の声を上げる。すぐさまソーマが反応した。
「アリサ、どうしたの？」
「えっと、多分私の知り合い、かも……」
「えっ……」
事態は彼女らが動揺する間も与えない。重歩兵隊は砦の門前まで迫り行進を停止した。
「私は聖戦士マリーベル！　女神アイギスの啓示を受け、武装神官団と共に、北の大国より馳せ参じました！」
物見台にはっきりと届くよう、マリーベルは宣言する。桃色の長髪が風になびく。彼女はひと際軽装だが、他の兵よりも遥かに存在感を示す。そんな彼女を前にして――
「う、わぁ……」
アリシアの顔は僅かに引きつっていた。他国の宗教団体が駆け付けるなど前例も無ければ、そんな面倒な事案のノウハウが蓄積されている訳もない。武装神官団の中に一人でも遠方からの読唇が出来る者がいれば大問題に発展しかねないが、流石にそういったご都合主義も無い。何をどう報告したものかと頭を抱えつつもアリシアは、マリーベルらを招き入れるのだった。

「アリサちゃん、久しぶりねぇ」
「ドルカママ……！　三年前のあの事があって、私……！」
「……？　詳しく教えてくれるかしら」
　アリサとドルカ。親と子の感動の再会、アリシアの目にはそんな風に映った。ドルカママと呼ばれた神官服に身を包みし女性は、並々ならぬ母性を醸している。一際目を引くのは服の上からでも容易にその全貌を把握出来る巨大な乳房であった。
「すっげぇな……えぇおい」
「あぁ、ありゃすげぇぜ」
　それは否応なしに山賊から好奇の視線を浴び――
「全く。あそこでふんぞり返ってる自称近衛騎士と同じ性別とは――」
「止めておけ。フューネスみたく腹に風穴開けられたいのか」
「アンナお姉さま超えはともかくとして。礼儀のなってない人は後で〆ます」
　胸に関しては姉にコンプレックスを持つアリシアの心に深い傷を残すのであった。当然そんなことは、アリシア対面に座るマリーベルの知るところではない。
「神官学校の出の者は、皆ああしてドルカママ……あの人をそう呼びます」
「……つまりドルカさんは、ああ見えて大物ってことですね」
　すぐにアリシアは自分が失礼なことを口走ったことに気づき、表情が引きつる。
「えっと……ところで女神の啓示というと？」
「私達皆が、一夜の間に同じ夢を見たのです。女神の加護を得た英雄の力となるように、と」
「な、なるほど……」
　アリシアとしては夢一つではるばるこんな所までやってくる者の気が知れないという要素はあったものの、女神の加護を得た英雄とい

うのはほぼ間違いなく王子の事であり、彼らほどの軍勢が力になるのならば心強いことは確かだった。なにせ寄せ集めの王国軍残党とほぼ同等の人数を擁する重歩兵、癒し手の部隊である。
　一方のマリーベルも思うことが無いという訳ではなかった。
「……私も質問していいでしょうか」
「なんでしょう？」
「見た所、正規兵ならぬ存在がいるようですが。これは一体……」
「えーっと、モーティマ山賊団の方ですね。山賊頭のモーティマさんが、個人的に王子に協力してくれています」
「……その王子という方と、一度お会いしたいものですね」
「分かりました！　新緑の町にいらっしゃるので、一度早馬を走らせますね」
　山賊を見るマリーベルの目が厳しいことに、アリシアはついぞ気づくことは無かった。

「……王国暦３０８年、３月の８日？　そんな事あるはずない――だって私達が啓示を授かったのは、３０５年の１月よ？」
　アリサから今日の日付を聞いたドルカは目を丸くするが、今日は紛れも無く３０８年３月８日である。アリサは暗い表情の中で、口を開いた。
「ドルカママ、落ち着いて聞いてね。ママ達は……三年前に失踪してるの」

１２．試練と来訪者

北の砦にマリーベル率いる武装神官隊が到達した翌日の事。聖戦士マリーベルと王子の会談自体は終了した――が、それと同時に大きな課題が課せられた。

「……私達の指揮下に入らず独立軍として行動する、とは。弱りましたね」

執務室の一角で佇むアンナは難しい顔をしていた。マリーベルは会談の席で、「私達の命を預けられるほどのものか。貴方達の力を見定めさせてほしい」と申し出たのだ。彼らは女神アイギスの加護を得た王子の力になることに異論は無いのだが、そもそも彼らが北の大国の住民であり、かつこの場に残る王国軍よりも精強であることが問題だった。白の帝国のようなガチガチの統率主義国家を除けば、貴族の私軍がバラバラに戦うような事も珍しくないので本来わざわざ王子の傘下に入る義理もない。

「……認めさせる」

窓辺にて王子は呟いた。王国軍の指揮下に入る理由も無いマリーベルが敢えて条件を提示したのは、この乱の早期解決を目指して。もっと言うならば部下達を納得させる材料を求めてのこと。王子は少なくともそう受け取った。

「しかし、認めさせるといっても簡単なことではありません」

眼鏡をくいっと指先で持ち上げつつ、ケイティは異を唱えた。

「あの軍勢は在りし日の王国軍のように、重歩兵を主軸としています。生半可な火力ではあの陣地を突破することは難しいでしょう。それとこちらをご覧ください」

そう言ってケイティは、王子の執務机に紙束を差し出した。それに記されていたのは、少なくとも王子達にとって全く面識の無い者たちの名簿である。製作者の几帳面さが滲み出るような整然としたそれに、名前と共に記載されていたのは住所、そしてヘビーアーマーやヒーラーといった〝クラス〟であった。

「マリーベル殿に許可を頂き、名簿を作成させていただきました。５

０人程度のヒーラーが在籍しているようで、戦闘になればそれらが重歩兵を癒し始めます。こうなると突破は絶望的でしょう。ヒーラー隊を何とかする必要があります」
「一箇所に多人数を送り込み、後方に浸透させるのはどうでしょう」
「それを許さない部隊がいます。精鋭を掻き集めたバトルアーマー。爆裂する鉄球の投擲を行い広範囲を爆風に巻き込む桃鎧、単純な戦闘力が高い蒼の鎧を纏った重歩兵。これらの精鋭部隊の前では、局地的な数の優位さえ容易に覆されます」
「……魔術攻撃はどうだろう。鎧は貫けるが」
「鉄球投擲の他に、メイジアーマーなる魔術を用いる重歩兵が存在します……魔術の撃ちあいになりますから、一方的な展開には持ち込めないかと――そして。戦術をひっくり返す強者の存在もあります」
　ケイティの言葉が示す”強者”が、一体誰の事を指すのか。それは王子もアンナも理解していることだった。
「……戦力差は歴然。正面からの戦闘は絶望的でしょう。策を練りますが、あまり期待はなさりませぬよう」
　ケイティはそう言って執務室を退室し、閑静が戻ってくる。王子の執務室としての役割がすっかり板についた屋敷の一室。窓の向こうで降る雨音のみが響いた。この部屋の主は元より口数の多い方ではないが、人がいなくなると本来の性分に戻るのか、寡黙を通り越して無口になった。一つ王城にいた頃と比べて変化があるとすれば、それはアンナが執務室にいる時もそういった面を見せるようになったということだ。
　ケイティの名簿を見下ろしながら、王子は小さく溜息を漏らした。
「……その、王子」
　アンナの声に、王子は無言で顔を上げる。
「……あまり気を落とさないでくださいね。王子の責任ではありませんから」
「ありがとう、アンナ」
　その時の綻んだ王子の口元から、アンナは目を逸らすことが出来なかった。胸の鼓動は高まり、頬には自然と熱が帯びる。普段の寡黙な

彼とのギャップに当てられたのか、アンナすらも即座には判別できず言葉に詰まる。
「親愛なるアーサー王。入るよ」
そんなある種の気まずさに隙間風を入れたのは、鋭いノックと同時に入室した白いローブの魔術師、ヴァレリーであった。余りの唐突さに身構える二人をさっと一瞥した後、王子へと踏み出す。
「お取り込み中だったか、すまないね。だが先に僕の話を聞いて欲しい。１０００年に一度の重大案件だ」
かつての千年戦争の頃から記憶を継いできた、そして人付き合いに慣れていない実に彼らしさ溢れるつまらない冗談。それをニヒルな笑みを絶やさずに言ってのける辺りは年の功だなとアンナは思った。
「用件はなんでしょう？」
王子の返答を前に、先んじてアンナが応対する。ヴァレリーは一瞬ちらりとそちらを見るが、すぐに王子へと視線を戻す。
「君に会いたいと申し出た人物がいる。あぁ、当然女性だから――っと。かの王では無いんだったね。失礼」
「……それは王子に直接お伝えせねばならぬことでしたか？」
「うーん、少なくとも僕はそう判断した。なにせ相手は流浪の”メイジ”だからさ」
流浪のメイジという境遇は丁度ヴァレリーと同じである。何処の国家にも属さず、人目を憚り隠遁生活を送る魔術師。そういった者達は得てして変わり者であり、同時に人並みはずれた力を有していた。
「一癖はあるけど有能、そういった手合いは直接交渉で引き入れる。それがかの英雄王の伝家の宝刀だ。君ならどうする？」
ヴァレリーの言葉を聞き入れた王子はすぐに席から立ち上がった。
「そうだね、それでこそだ。やはりと言うべきか、君たちはよく似ている……こっちだよ」
「あ……」
ヴァレリーに導かれる王子、それをただ眺めるばかりだったアンナは、自らも追いかけるか僅かに考えるが思い直し、ひとまず書類の類を整理して戸締りを済ませるというありきたりな結論に達したの

だった。胸の高まりに、一旦蓋をして。

「ヴァレリー」

屋敷の廊下をヴァレリーと並んで進む中、王子はそう切り出した。

「なんだい？」

「英雄王――俺の先祖のことで質問がある。”当然女性だから”とは何だ？」

千年戦争を戦ったとされる英雄王は英雄としての伝説こそ数あれ、戦場以外での逸話といった面は不自然なほど少ない。女神アイギスの威光に頼らない国家運営が続いていたため、その過程で抜け落ちたと唱える歴史学者の声もあったが、それにしても不可思議であった。王子としても、幾ら歴史書を辿ろうと偉大な先祖が如何な人物であったのか知り得なかったため、個人的に興味があるというのは事実だった。

「んん？　あー、どうだったかなー、記憶が抜け落ちてるのかなー」

王子の期待とは裏腹に、ヴァレリーから返ってきたのはそんなぼかした答えだった。ただ、くつくつと笑うヴァレリーの横顔はひどく楽しげであり、それは悪い事では無かったのであろうと王子は考えた。

「……それにしても。そうか、一応忠告は要るのかな」

ヴァレリーはそう前置いて、

「えーと、王子でいいか。王子、君が注ぐべきは博愛であり最低でも寵愛だ。恋慕であってはならない。国の為に、それだけは忘れないでほしいかな」

普段の笑みを絶やさないながらの忠言だったが、少なくとも冗談の類ではないと王子は感じ取った。しかしそれの意味を王子はまだ、掴み切れていない。

「さてと。この部屋だよ」

ヴァレリーがドアノブを握ったのは、かつて屋敷の物置として使われていた個室。ヴァレリーがノックも無くドアを開けると、その全容が明らかとなる。先ほどまでの執務室と同質の静けさ。雨音と頁を

めくる音が調和し、それがソファで分厚い本を読む女の神秘性を引き立てていた。銀に輝く髪、藍のドレスに身を包んだ彼女は、来訪者を一瞥もせず本に視線を落としていた。そも周りに舞う蝶といい、その様はさながら一枚の絵画のようであった。
「……あぁ。君が件の王子様か」
女が立ち上がる。
「自己紹介をさせて貰おう。私はオデット、旅の魔術師だ」
「それで、今日は一体何の用で来たんだい？」
「……俺たちと一緒に戦ってくれるのか？」
「違う……むしろ逆だな」
オデットは至極冷静に言葉を紡ぐ。
「率直に言おう。魔物と戦う事は愚かな事だ、今すぐにでも兵を解散した方がいい」
衝撃が走る、という表現では足りないほどの一言だった。
「……何？」
「述べた通りだが。付け加えるなら、王都は諦めるべきだな」
「どういうことですか！」
珍しく声を荒げるのは、遅れて到着したアンナであった。
「……この者は？」
「俺の政務官だ」
「そうか」
興味の欠片も無いとばかりの淡白な返事だった。
「私が言いに来たのは、魔物は戦いの中で無限に進化していく存在だという事だ。その件に関しては、実物を見てきた人間が述べるのが最も手早いだろう」
「ヴァレリー……」
「……全く。なんだかんだ、現代の魔法使いも嫌になるくらい優秀だね。政務官、扉を閉めてもらえるかい？」
ヴァレリーの物言いはそんな、オデットの語る内容が事実であると首肯するようなものだった。
「隠してもしょうがない。確かに千年戦争と呼ばれているあの戦争の

中で、魔物は急速に進化を遂げていった」
「そんな……」
「……女神の加護を受け一時的に勝てた、一時的に王都を取れたとしよう。しかし問題はその後だ。無限に成長する魔物の攻勢に、人の身では限界が来よう。意地の悪い物言いなのは承知だが、私は人々をぬか喜びさせたくないのさ」
オデットの語り口は冷徹であった。彼女の言葉にヴァレリーの証言が裏づけとなって、王子の反論の余地を奪っていく。オデットの言葉に頷けと言わんばかりの張り詰めた空気。
だというのに。
「……だそうだけど。王子はどう対処すればいいと思う？」
男は――ヴァレリーは笑っていた。横目に王子を見つめ、まるで王子が何を答えるか分かっているかのように口元を緩めていた。
王子は即座に理解した。これは自分の先祖である”英雄”も問いかけられたものだと。その問いに対する答えは英雄と語られし彼の名が、そして女神に封印された魔物が復活した現状が雄弁に語っている。かつて英雄は”それ”に挑み、成し遂げられなかったのだ。
だが王子は屈することなく、強く一歩前へと踏み出す。
「オデット。俺は――」
「待て」
オデットによって唐突に言葉を遮られ面食らう王子。
「――その言葉を口に出すということは、君に付き従う全ての人間に、何時降ろせるか分からぬ十字架を背負わせることになる。今一度、その意味を考えてみるといい」
「……！」
オデットは少し沈黙を置き、仕舞いとばかりに手を叩く。
「話はここまでだ。出て行けと言われれば従うまでだが」
「……この部屋を使っていていい」
オデットに背を向けた王子は、扉に手をかけて
「答えは出す。必ず」
そう言い残し、扉を開いた王子はマントを翻して退室していった。

「あっ、王子……！」
オデットを一瞥し、アンナが続けて部屋を飛び出していく。それを見送った後オデットは、扉を閉めることすらせずソファに座り込み、また本を読み始めた。
「肝は据わっているだろう？　それに仲間思いだ」
ヴァレリーが開かれた扉の向こうを眺め、得意げに呟く。
「……国の王としては失格だな」
「英雄としては満点だけどね」

13．見極め

昨日まで降りしきっていた大雨は鳴りを潜め、灰雲の隙間からは柔らかな陽光が降る。

王子率いる王国軍と聖戦士マリーベルが率いる武装神官団は模擬戦を執り行う運びとなった。両陣営は雨上がりの田園に集結し、陣形を組む。

「――最終報告です」

マリーベルの背後から、兵士が話しかける。

「王子軍は我々の正面に横陣を展開しております。右翼はユリアン兵士長、ベルナール重歩兵長を指揮官とした精鋭部隊。左翼はモーティマ山賊団と傭兵部隊の混成軍といった陣容です」

「対照的ね。戦力の分散を避け、右翼に力を入れたと見るべきかしら」

「恐らくは」と、兵士は同意の言葉を口にした。

「そして肝心の中央ですが、ケイティ兵士長率いる重歩兵部隊と魔術師隊、それと」

「近衛騎士アリシア」

「はい……近衛騎士はともかく、陣容は王国軍の虎の子といっても過言ではありません。こちらの策は」

兵士の問いかけに、マリーベルは微笑みのみを返した。

「正面よ。遠距離火力を中央に集めて王子方の本陣を打通。各個撃破するのみ」

元より単純な戦力では圧倒的優位に立っている。彼女らの戦い方は策を弄すものでもなく、多くの言葉は要らなかった。

「右左翼は如何しましょう」

「右翼は精鋭の黒鎧（バトルアーマー）とドルカさんのヒーラー部隊があれば戦線は膠着するでしょう。左翼は……重歩兵と、ヒーラーをいくらか当てましょう。不安ならば何人か投擲重歩兵を割り振っても構わないわ」

「御意。各方面に伝達します」

兵が伝令に走るのを見届け、マリーベルは正面を見据える。目視で

分かる距離に一糸乱れぬ大盾の列。そしてその向こうには王国の虎の子である魔術師と、王子が控えている。
「……王子。あなたの実力を見極めさせてもらいます」
マリーベルの口から出た言葉は、間もなく静寂の中に溶けていった。

「――王子。敵陣容は、こちらの読み通りです。作戦は予定通りに決行します」
「……」
ケイティに対し、王子は頷きを返した。その目は相対する重歩兵軍団、そしてその中央最前に構えるマリーベルに対して向けられている。マリーベルの格好は、他の重歩兵とは一線を画していた――メイスと大盾に目を瞑れば、いっそ彼の隣にいるケイティの方が重装備といってもいいくらいだ。神官を思わせる軽装を纏い、全身を覆う黒鎧達の最前で堂々と構える。総大将に相応しい覇気と、王子軍に対しての威圧感があった。
「はぁ、緊張してきました……」
そのマリーベルと交戦する予定のアリシアが、小声でそんなことを呟く。緊張を口に出来る間は限界には遠い。と解釈するならば、最大戦力と相対する彼女から出る弱音がこの程度というのは中々に図太い部類に入るだろう。
「アリシアさん」
「は、はい！」
「先刻お話した通り、アリシアさんにはマリーベルさんの相手をお願いしてもらいます。足止めだけでも構いません」
アリシアはちらりと王子の方を見る。敵陣を見据える王子の横顔は、普段通りの威風を纏いながらも何処か緊張しているようにも映った。
「わかりました。お役に立ってみせます」
「……お願いします。現状、あなた以外には荷が重い役目です」
アリシアはケイティ、そして王子に一瞥してから本陣を飛び出し、

持ち場へ向かった。場所は味方重歩兵隊列の更に前。王子全軍の先陣だ。
アリシアが本陣を去ってすぐ、本陣を訪ねる者があった。
「……王子！」
ヴァレリーがニコニコと笑みを浮かべながら王子に近づこうとして、ケイティに割り込まれる。
「……ご用件は？」
「客人だよ。王子に会いたがっている」
「――会いたがっている、という程でもないがな」
天幕に手をかけゆるりとめくる。藍のドレスに日傘、色素の薄い髪。そしてその手に握られる、先端に紅玉が煌めく杖。
「……オデット」
「今日は人間同士の争い――模擬戦か。私にはあまり違いが分らぬが」
「君は回りくどいね、メイジらしく実に回りくどい」
「貴様にだけは言われたくないな、ヴァレリー。……一宿一飯の恩を返しに来た。それだけのことだ」
王子は大きく頷いた。
「……ありがとう」
「正直なことを言うと、この程度の陣容に勝てないようなら、もう一度王都を諦めることを進言するだろう」
「……絶対に勝つ」
「そうあってくれ」
ふん、と鼻を鳴らしたオデット。その口元がほんの僅かに緩んでいることに気づいていた者は、当の本人を除いて誰もいなかった。
「……ところでオデット殿。対魔の契りなのですが」
話の一区切りを見計らっていたロイが声をかける。
「あぁ――」
オデットは眼下に広がる戦場を一度だけ視線でなぞって、指を鳴らす。小気味の良い音が戦場全体に響き渡った。それ以外のことは何も起こっていないが、オデットは一仕事終わったとばかりにロイへと

向き直る。
「終わった。この戦場にいる味方両翼含めてな」
「いやぁ、昔の魔法の力は侮れませんな」
「とはいえ私が得意としている魔術はこちらではなくて、もう一つある」
「そっちは実戦で確認してみるといいだろう。多分、すごく役に立つ」
「……私の十八番の信用を勝手に堕とすのはやめて頂けないか」
ヴァレリーとオデットのやり取りに、ロイは苦笑しつつ肩を竦めていた。

戦闘の準備も終わり、双方が事前に取り決めていた刻限がやってくる。
「これより模擬戦を開始します！」
政務官アンナが発した合図。それと同時に両陣営は進軍を開始した。
頭一つ抜けて接敵が早かったのは山賊団だった。彼らは両軍の中で最も軽装であり、ぬかるんだ悪路の行軍に対しての経験と適正、その両方を兼ね備えていた。勢いをそのままに彼らは武装神官団の右翼へと雪崩れ込む。先陣に立つのは勿論棟梁たる山賊頭モーティマだ。
「つしゃお前らぁ！　モーティマ山賊団の意地見せろ!!!」
「「「ウス!!!」」」
最先鋒はモーティマやフューネスのような単独でも力量がある者達だ。彼らは重歩兵の一体に狙いを定めては飛び掛かり、力任せに戦斧を振り下ろす。それらも大盾と鎧に守られ致命打には至らない、後ろには治癒部隊も控えている。問題はない――はずだった。
「なっ、くそっ！　ぬかるみに足がとられた……！」
「ガァァァッ!!　コロ、サナイ！　ネテロ！　ネテロ!!!」
バランスを崩した重歩兵を、フューネスが大盾諸共蹴りつけて転倒させる。一度鎧に泥が侵入してしまえば、最早単独で起き上がることは適わない。

「おらぁぁぁ!!!」
「貴様ら非正規兵が何人束になろうと――!?」
「せーのっ!!」
山賊三人による体当たりが重歩兵を襲う。相手の攻撃を塞ぐための大盾が、かえって体当たりの衝撃を集中させる仇となっていた。三人一組でスクラムを組んだ山賊たちが、次々と重歩兵をぬかるみに沈めていく。
「な、なに――っ!?」
何が起こっているのか、理解が追いつかなかったのは武装神官団側だ。彼らは戦闘訓練こそ積んでいるものの、実戦の経験が豊富とは言い難い。手段を選ばないアウトローが相手となれば、そのギャップはより露骨となる。彼らが積み重ねた修練は身を守ることを教えはしたが、泥に捕らわれた鎧から逃れる術を教えはしなかった。
「手を休めるな！　一匹一匹ひっくり返してけ!!!」
モーティマの傍らに立つバーガンが吼える。これが彼らの奥の手、王子軍の見出した唯一の戦力的優位だ。

１４．聖戦士の挑戦

「――山賊も思った以上にやるようね」

報告を受けたマリーベルの声色はどことなく嬉しそうでもあった。口元に不敵な笑みを浮かべ、伝令兵に振り返ることもせず、目の前の敵を睨む。

「それでも私がここで勝てば、それだけでこの戦は終わり」

彼女が指すのは、王子が控える本陣。とはいえ王子までの道のりは、多くの重歩兵による盾の壁、弓兵、魔術師による弾幕の二重の構えがある。それでもマリーベルがそれを口にするということは、単身でそれを行うことが不可能でないと断言しているようなものだ。

マリーベルに対抗する〝第一の壁〟が、それを良しとするわけがなかった。

「……戦う前に言っておきますが、私こう見えて強いので！」

アリシアの啖呵が戦場に響いた。どことなく幼く聞こえてしまうそれに、敵味方問わず笑い声が上がる。

「なら小手調べは不要ね」

マリーベルは淡々と述べ、纏う。彼女の足元から迸る閃光、それは技能の発現である〝スキル〟に極めて類似しているといって良い。ただ一つ、異なる点を述べるとするならば――今回のそれは蒼き光。どこか神聖結晶を想起させる、神秘の波濤。それがアリシアの双眸に映ったほんの一瞬――そこに在ったのはマリーベルの〝残像〟だった。

「っ！　速――」

タイムラグはほぼなかった。剣戟の音。周囲の兵士が視認することすら出来ない速度で、マリーベルの盾とアリシアのハルバートが弾き合い、剣戟の音が鳴り響く。当のアリシアすら、自分の行動を十分に理解していない。常軌を逸した速さでアリシアをすり抜けようとしたマリーベルに対し、アリシアはほぼ本能で進路を塞いだだけにすぎなかった。アリシアの必死の形相とは対照的に、マリーベルの顔はまるで意外とでも言いたげな表情を浮かべている。

「……じょ、冗談きついですね。一撃も重い……これは確かに足止めが精いっぱいかも」
「驚いた。あれで抜けたと思ったのに」
相手の足の微動に気づけなければ、一瞬にして地に伏している。直感的に、はっきりと自覚させるだけの速度を以ってその一撃は放たれていた。追い討ちとばかりに、刃に受け止められた盾に力が込められる。力尽くで叩き潰すハラであると理解するのは容易いが、問題はその力である。最早女が、細腕がどうという次元の話ではない。人智を超えたその力は、女神の加護を彷彿とさせる。
「アリシアちゃん！」
重歩兵の壁の向こう側から、アリサの声と共に、アリシアに治癒魔術が飛ぶ。治癒魔術の効能は外傷のみではなく、動き続けることにより削られるスタミナを回復させる事も出来る。現状を平たく述べれば、アリサの魔力が尽きる、あるいは彼女の治癒力を上回る負荷がかからない限り、アリシアは自身に施された治癒の加護と合わせてほぼ無限に戦場に立ち、マリーベルを拘束することが可能という事だ。
「さぁ、次はどうするんですか！」
アリシアの啖呵に、マリーベルは鼻を鳴らして返した。『聖なる覚醒』は未だ残っている。

マリーベルのスキル『聖なる覚醒』。それによる一点突破の線が消えて、浮足立ったのは神官戦士団側だった。
「マリーベル様からは手出しは控えよと言われていたが……」
「構わん。我らの名目上の大将とはいえ、それは『聖なる覚醒』を行使できる実力のみを買われてのこと」
「メイジアーマー隊放て！　狙いはあの小娘一人だ！」
号令の下、幾重にも重なった雷がマリーベルの頭上を過ぎる。標的は言わずもがな、アリシアただ一人だ。魔術の火力は、アリサや近衛の加護の治癒力を遥かに超越している。彼女が突破されてしまえば、マリーベルの聖なる覚醒によって本陣を打通されることは自明であった。だがそれは杞憂に終わる。雷の魔術はアリシアに直撃する

も、その身を引き裂くことはついになかった。

「思った以上に敵の魔術隊もやるようだ、流石に殺し切れないか」

藍のドレスを纏った麗人が苦笑を零す。オデットの手に在る杖からは常に魔力が迸り、紅玉は眩いばかりの光を放っていた。その光は閃光――そう、スキルの発動の光そのものだ。彼女の秘法『マジックバリア』は対象の魔法攻撃への耐性を高める効果を持つ。

「一応聞くけど、僕らが使う魔術は減衰しないんだね？　マジックバリアは」

「当然だ」

隣に立つヴァレリーの軽口に自信に満ちた返事を返し、オデットはマジックバリアを展開しながら火球の生成を始める。

「魔術師たち！　先ほどの雷撃はあの一角からです、あそこを狙いますぞ！」

王国軍魔術師の指揮はこの男、ロイが執っている。彼が指した方角に向けて、魔術師たちは一斉に火球を投げかけた――が。

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「我々では届きません！」

「むむむ……」

王国軍の陣地に雷が降り注がない理由、それは即ち敵の射程外というだけだ。それは裏返しに、王国軍の魔術の射程外アリシアとマリーベルの戦闘に巻き込まれないように、そしてお互いの魔術師が重歩兵の壁の向こうに布陣していることが、彼我の距離が離れる要因だった。

魔術師たちの喧騒を見ていたヴァレリーはニヒルな笑みを浮かべ、オデットを見やる。

「だそうだよ、オデット」

オデットが溜息交じりに放った火球は、先ほど雷の魔術を放った神官戦士たちを瞬時に紅蓮の内に飲み込んだ。模擬戦であるため殺害に至る火力ではないが、無傷でもいられず、魔術の発動もおぼつかない。射程外から執拗に陣地を付け狙う炎を前に、彼ら戦線を下げざる

を得なかった。射程一つとっても、オデットと王国の魔術師たちの才能の差は歴然としていた。
「……やれやれ。先が思いやられるな」
「ほう、まさか君が王国軍の未来を憂うとは。どういう風の吹き回しだい？」
「……ヴァレリー。無駄口を叩いている暇があれば、近衛の援護でもしてやればどうだ」
「それもそうだ」とヴァレリーは肯定し、火球の生成を始めた。

メイジ部隊の魔術による牽制がなければ、決着は既に決まっていただろう。
アリシアとマリーベル双方の立ち合いを見て、そんな感想に至らないものはいないだろう。正に覚醒と呼ぶに相応しいマリーベルの速度に対し、アリシアは振り払われないのがやっとだった。
「……く、ぅぅ!!」
大盾による突進、メイスによる殴打。模擬戦という体であるが、一般兵が一撃でも受ければ命すら危ういだろう。怒涛の勢いで押し寄せるそれを、アリシアはそれでも懸命に抑えていた。攻撃を後方へいなさず、正面から受け止め、あるいは衝撃を真横に流す。近衛騎士の技は、王家を守るためのもの。自身の背中だけは安全地帯でなければならない。彼女の近衛としての技量はかつてない強敵を前に、ますます洗練されていた。
やがて、マリーベルの足元から放たれていた光がその勢いを失う。スキルとは集中を研ぎ澄まし、平常時は発揮していない潜在能力を発現するもの。常に発動できるものではない。『聖なる覚醒』が解け、マリーベルの動きが露骨に鈍った機を、アリシアは逃さない。即座にハルバートの斧部を振り下ろした。アリシアの槍斧術の数々を、マリーベルはその身の丈の半分もあろう盾を使いこなして凌いでいく。
「くっ、やりますね……！」
「『聖なる覚醒』頼りの弱兵だと思った？」
マリーベルは強気な言葉を口にするも、『聖なる覚醒』の強化の有無

は大きい。二人の鍔迫り合いは、先ほどまでと一転してマリーベルが守勢に回っていた。その上、王国側の布陣の向こうからはメイジの火球が間断なく放たれている。マリーベル以外の将兵が攻めあぐねているのもそのためだ。

「――マリーベル様！」

マリーベルの背後から声があがる。先ほどの伝令兵が、重歩兵に守られながら発したものだった。

「手短にお願い」

「お味方右翼が劣勢！　ドルカ様率いるヒーラー部隊が部隊を分け、味方右翼の援護に周るようです！」

「そう。どうやら私たちは王国軍を過大評価していたみたいね。山賊の方が元気だなんて」

「……むっ」

アリシアは頬を膨らませて抗議するが、発言主が気にする様子はない。

王国軍は軍を三つに分けた。重歩兵と王国魔術師を中心とした中央軍、山賊を中心とした王国軍左翼。そして残る王国軍右翼は、軽装歩兵や弓兵が主体となっている。元から軍属であったものと新兵との割合も3：7程度だ。作戦立案を行ったケイティの予想からすればむしろ敢闘しているのだが、マリーベルを始めとした武装神官団が知る由もなかった。

「中央の部隊を割きましょう。メイジアーマーを山賊に向けなさい。それでこの戦は終わり」

「で、ですが――」

「早く行って」

「……かっ、かしこまりました……！」

去っていく伝令兵を王国軍はただ見送る他なかった。アリシアが飛び掛かるのは論外として、マリーベルの更に後方に陣取る重歩兵を突き破って、伝令兵を止めるほどの破壊力を王国軍魔術師は持ち合わせていない。伝令はつつがなく後方へ浸透し、武装神官団が勝利する――はずだった。

直前まで勝ちを確信していたマリーベルの顔色がさっと変わる。常時受け続けていたものが忽然と姿を消した違和感と、そんなことが起こりようはずもないという驚愕。だが彼女の後背に展開する武装神官団が轟々と発するどよめきが、その考えは事実だと雄弁に語った。

武装神官団の治癒が止まった。軍団の最後方に陣取る治癒部隊が、突然治癒を止めたのだ。

数分前。

「リディア、ステラ！　全速力で参りますわよ！」

「はい!!」

蒼空を舞う三騎の天馬騎兵。先頭を往きながら指示を下すのはエスタ――先日新設が決まった、ログレス王国初の天馬騎士団の隊長だ。機を図り、満を持して投入された空中戦力は、敵軍の攪乱という目的を完璧にこなしていた。

「……!?　なっ、天馬騎士の奇襲!?」

「怯むな！　たかだか三騎だ、遠距離部隊は絶対に通すなよ!!」

雷が轟音を伴って中空を引き裂き、地から天へと登っていく。落雷の映像を逆回しにしたような光景だ。天馬騎士たちはそれらの射程を見切り、攻勢に出ることなく敵軍の射程外である高度を維持していた。敵が攻勢に出てこないにも関わらず、メイジアーマーが対空攻撃を試みなければならないのは、下手に無視をして後方の治癒部隊を急襲されるのが最悪の展開だからだ。せめて対空戦を仕掛けさえすれば、天馬騎士が攻撃のために地上に降りてくることだけは避けられる。だがそれは、ひどく消極的な対応策だ。

「……あらあら。これは一本取られたかしら」

治癒部隊の中心で、一人ぼやいたのはドルカだった。彼女は天馬騎士の投入で、王国軍に戦場のイニチアチブを完全に握られたことを悟ったのだ。このまま迎撃のためにメイジアーマーを割いているうちに、いまだ健在な山賊たちは自由に暴れることができる。王国軍の

中枢である本隊はほぼ無傷だ。いつ反転攻勢に出てもおかしくない。それでも純粋な戦力差を考慮すれば五分といったところだが、今回の作戦立案者はケイティだ。運に身を委ねるなど、許すはずがなかった。

「――動くな」

声と共に喉元へと突きつけられるナイフ。ドルカがそれに気づいた時には、他にも十数名が同じように拘束されていた。モーティマ山賊団に属するローグ、隠密たちだ。彼らこそが、あのケイティが”この模擬戦に勝機あり”と踏んだ切り札と呼んでいい存在。最大の難点であった直接的な戦力のぶつかり合い抜きに、戦闘を終わらせられる手段。

「ヒーラー部隊は即刻治癒を止めな。まぁ模擬戦だから首は取らないけど」

「護衛は武装を捨てろ」

人質にとった全てのヒーラーを一列に並べさせ、ハリッサが号令をかける。その隣ではセシリーの金色の双眸が、他のヒーラーや護衛として残っていた重歩兵を睨んでいた。セシリーは本職の暗殺者だ。当然他の山賊団の隠密と違い、その目つき一つとっても質が違う。指示に従わないなら一瞬の躊躇いもなく殺すと、視線で告げる。野盗崩れが関の山だと思い込んでいた神官たちを畏怖するのに十分だった。狙い通り骨抜きになった神官たちを見渡しながら、ハリッサは自慢げに笑んだ。

「……驚いたわ。こんな平地で誰も気づけないなんて」

ドルカの口からは素直な感嘆の言葉が漏れる。

「敵も味方もペガサスに夢中だったからねぇ。ま、うちのセシリーにとっちゃ朝飯前ってことよ」

ハリッサの言う通り、天馬騎士団の陽動は確かにこの作戦の肝だった。が、戦闘中の気が立っている兵士の視界を、幾らセシリーの誘導があるからといってこれだけの人数が掻い潜るのにはそれだけでは足りない。山賊たちは敢えて敵中に飛び込み乱戦に持ち込み、王国右翼は敢えて劣勢に追い込まれて敵の陣容を歪ませた。そして前線の

司令塔であるマリーベルが、アリシアの相手をすることで常時拘束されていたこと。
　把握と伝達。戦争において極めて重要で、そして武装神官団が軽視していた要素は毒のように全体を蝕み、ついには頭蓋の内にまで回ったのだ。
「……ふふ。これだけ派手にやられたら、文句を言いたくても言えないわ」
「それともうひとつ言っとくけど。アタシたち山賊団の盗賊でしかないから、本当に首を取らない確証はないけど？」
「あらあら。それは怖いわね」
　一応常に喉元にナイフは突き立っているのだが、ドルカの声色に恐怖は微塵も滲んでいない。脅しをかけたハリッサすら少し引き気味だ。とはいえドルカの冷静さが、他の神官たちの心の安寧に繋がっているのは確かだ。
「……全っ然動じないわね。やりにくいったらありゃしない」
「これから味方になるんだ。そっちのほうがいいぞ」
「そりゃそうだけどさ……」
　神官戦士団側の治癒が消えた戦場を、敵陣最後方という特等席から眺めながら。ハリッサとセシリーは気を緩ませることなく目を光らせた。

　戦場の流れをマリーベルが理解した頃には、全てが手遅れになっていた。
　目を閉じ、すっと息を吸い込んだマリーベル。桃色の髪が流麗になびく。
「――あなたたちの力、認めるわ」
「！　それじゃあ――」
「だからここからは私の、一人の兵士としての意地」
　マリーベルはもう一度『聖なる覚醒』を発動する。先ほどのそれよりも遥かに鮮烈な蒼光を纏う。
「……貴女と戦って分かったことがあるの。貴女は……近衛騎士は、

背中に攻撃を通さない」
　彼女の口から出たそれは、近衛騎士として対峙した相手に対する最大限の賞賛だった。
「だから、このシールドバッシュも〝正面から受け止めてくれる〟」
「……なっ!?　打点が前までより高――」
　盾を構えての愚直な突進も、人間というエンジンの機能を超越した馬力で放たれれば回避不能の一撃となる。アリシアが受け止めることを前提とした一撃――正しくは布石に過ぎない。
「通してもらうわよ、近衛騎士」
　ぬかるんだ地面を蹴りつけ、アリシアに立てかけた自身の盾を踏み台にしての跳躍。刹那の内に行われたその出来事に兵士たちは反応すら出来ない。彼女の纏う光が軌跡をアーチ状に映し出すだけだ。
「い、一斉に放て！」
「近衛騎士を援護だ、援護しろ――ぐわっ!?」
　アリシアさえ突破してしまえば、『聖なる覚醒』の前に敵はない。迫りくる王国の重歩兵はメイスの一振りで軽々と弾き飛ばされ、王国の魔術師は彼女の動きを目で追うことすらままならない。
　マリーベルがやろうとしている行動は単純明快。王国軍がドルカにしてみせたことと、全く同じことだ。
「最後は貴方の力を見せてもらうわ。王子」
　マリーベルは天幕をオーラのみで引き裂き、王国軍の本陣へと足を踏み入れる。本陣には王子の他、ケイティ、そしてアンナの姿があった。ケイティは迎撃の構えを取ろうとするが、もう常人に捉えられる速度ではない。
　――そしてその速度は、最早マリーベルにも制御が効かないものになりつつあった。
　振るわれたメイスの行き先は王子ではない。まず間違いなく、その隣のアンナを屠る軌道を描いていた。
「……！」

――右肩のアーマーには亀裂が走り、腕からは彼の腕を染め上げんばかりの血が流れている。
マリーベルがメイスを振り下ろそうとした束の間。抜刀では、ケイティのように間に合わない。そう判断した王子はアンナを突き飛ばし、最も防御力の高い己の肩アーマーで攻撃を受けたのだ。当然、上手く肩で受けられる確率など高くはない。一歩間違えば脳天に一撃を受け、そのまま死ぬことだって有り得た。
それでも王子は政務官のためにその選択肢を取り、結果として賭けに勝った。
そして王子の利き手、左手に握られた剣はマリーベルの喉元に添えられている。マリーベルが纏っていた蒼光は、いつの間にか姿を消していた。
「……完敗ね。降参よ」
自身の敗北を告げるマリーベルの微笑みは、穏やかなものだった。

15．模擬戦を終えて

その後の模擬戦は一方的な蹂躙だった。前線の指揮官と最後方の司令塔がほぼ同時に機能停止した軍勢に、統制という概念はない。治癒が途絶え、メイジアーマーが天馬騎士に拘束されていたこともあって、山賊はおろか、それまで優勢を保っていた王国軍の兵士や弓兵にすら押し込まれる有様だった。

夕方には王国軍と武装神官団が完全に陣を引き払い、喧騒に溢れていた田園は静寂に包まれる。田園には、入り乱れる兵たちの足跡のみが残されていた。そんな、ある意味役割を終えたといっていい場所にアリシアが足を踏み入れたのは、とある人物を探すためだった。とはいえ元々平野の田園であり遮蔽はない、探し人はすぐに見つかった。

夕陽に照らされた艶やかな髪は、戦場に在ってその彩を微塵も失わない薄紅。聖なる覚醒を発動した時に纏う蒼光は、朝よりもより一層煌めきを増していた。聖なる覚醒によって巻きあがる土煙すら、彼女を穢すことはできない。マリーベルの姿はまさしく不可侵の聖女といった風体だが、そこは朝に刃を交えた仲である。アリシアは特に気負うことなく声をかけた。

「マリーベルさん」

声をかけられたマリーベルは、聖なる覚醒を解いてアリシアに振り返る。

「なにかしら」

「そろそろ夕食ですので、呼びに来ました」

「そう」

マリーベルの反応は素っ気ないものだった。とはいえそこに敵意などは籠っておらず、素の彼女が顔を出しただけの話。

「伝令兵にでも任せればよかったのに」

「そう思ったんですけど……なんだか、頼まれちゃいました」

アリシアは苦笑いを浮かべながらそう言った。いくら相手がマリーベルとはいえ、平時の連絡など近衛騎士の仕事ではない。事を頼む側から侮られていて、頼まれる側が素直に了承しなければ今のこの

場面は有り得ないのだ。アリシアの騎士らしからぬ華奢で可憐な容姿と纏っている柔和で子供っぽい雰囲気が、少なくとも直接刃を交えたことのない者からの侮りを慢性的に生んでいた。その点は、同じ女性でありながら強者の雰囲気を纏っていることで畏れられているマリーベルと対極と言っていいだろう。

「……戻りながら、少し話さない？」

マリーベルから持ち掛けられた提案に、アリシアは頭に疑問符を浮かべながらも首を縦に振った。二人は隣り合って夕陽を背に歩き出す。

「貴女、近衛騎士らしくはないわよね」

「うぐっ」

まさか実力を知っているはずのマリーベルにまで、ここまで露骨な一言を受けるとは思っていなかった。大方いつも通りの、容姿と雰囲気の話だろう。そうアリシアは考えたが、その予想はすぐに覆された。

「田舎娘の偏見なら謝るけれど。近衛騎士って、ずっと王族の傍らで護衛しているものだと思っていたわ」

マリーベルが口にしたのは至極もっともな疑問だった。戦場に立つアリシアの力は確かに本物だということを、マリーベルは身をもって知っている。敵のいなし方一つとっても、それが王族を護ることを念頭に置いて確立された戦闘法であることを疑う余地はない。だからこそ、アリシアの近衛騎士としての力を、王子のすぐ傍で用いないことに違和感を感じて当然なのだった。戦闘中に限れば、マリーベルの疑問は王国軍の懐事情を知らない無知からくるものとして片付く話なのだが、今現在、平時におけるアリシアの在り方が話をややこしくしている。

「……そうですよね」

アリシアは肯定しながらも口ごもる。アリシアとて本音ではそう思っている。自分の力を、王家を守るために使いたいと。

模擬戦の終盤、マリーベルの突破を許したアリシアが本陣に駆けつけた時にはもう勝敗が決していた。どこか怯えているようにも見え

たケイティとアンナ、武装を解除したマリーベル、そして、ほぼ粉砕された肩アーマーの下から血を流し、アリサの治癒を受ける王子の姿。動揺するアリシアを責める者は誰もいなかった。その事実が、アリシアにとっては耐え難かった。王子にもう二度とあんな怪我をさせない、アリシアはそう誓った。だがその誓いに直接繋がることを、何一つできていない現状もまた現実だ。
「王子は普段からあまり護衛をつけたがらないんです。それにお傍にはいつもアンナお姉様がいて……」
「アンナお姉様……？　言われてみたらそっくりね」
「従姉妹なんです。私たち」
「王族と政務の要がいつも一緒にいるなんて、なおさら守るべきだと思うんだけど」
「そ、そうなんですけど……」
アリシアの脳裏に浮かぶのは、王子とアンナが二人で話している姿。隣に立ち、互いに向き合って話し合う二人。そこに他者が介在する隙間はなく、そして、遠き日には自分がその場所にいたのだと、アリシアに強く意識させる光景だった。実の姉のように慕っているアンナと、恋焦がれた王子。二人が同時に遠くに行ってしまったような錯覚が、アリシアに二の足を踏ませるのだった。
「……なんだか、居場所がないような気がして」
アリシアは言葉を濁したが、表情まで隠せるほど大人ではなかった。言葉の裏に隠れた意をうっすら読み取ったマリーベルは、それ以上の追及をしなかった。
「絶対に解決しなきゃいけない問題なのは、分かってます」
「……なるべく良い形で解決することを祈るわ。この国のためにも」
アリシアの弱々しい返事に、戦場で武器を振るっていた時の覇気は微塵もなかった。

同時刻。ケイティとベルナールは同室にて作業を行っていた。主だった作業は、王国軍の傘下に下った神官戦士団の名簿作成と新設さ

れる部隊の編制である。
　神官戦士団に模擬戦で勝利したことで、彼らの指揮権は王国軍に委ねられることとなった。それまで指揮を執っていたドルカによる一任も受けている。ここで王国軍には二つの選択肢が生まれた。神官戦士団を、一つの軍勢としてそのまま運用するか、既存の重歩兵を中心とした部隊に神官戦士団の人員を加えて再構成する運用だ。各兵士長は協議の末、満場一致で後者を選択した。兵士長らの、指揮官として神官戦士団と戦った彼らの見解は、示し合わさずとも一致していたのだ。
　神官戦士団は、現状のままでは軍勢として機能しない。
　軍団の規模に指揮系統が全く釣り合っていないのだ。現状の彼らははっきり言ってしまえば『個人単位』で『独立』して戦っていると言っていい。当然それは軍団とは呼べず、このままでは王国軍の連携など望むべくもない。反面、一人一人の能力は優秀そのものだ。黒鎧を身に纏う重歩兵は、個人としては王国の重歩兵を上回る能力を有している。メイジアーマーの雷の魔術による魔法による攻撃力、ヒーラーの治癒能力は王国軍にとって喉から手が出るほど欲しかったもの。鉄球を投擲する重歩兵も、近接戦闘と飛び道具を兼ね備えた強力な兵科である。
　そういった経緯もあり、兵士長らは神官戦士団を一度解体することを選択した。王国軍の軽歩兵、弓兵に、重歩兵、メイジアーマー、ヒーラーをバランスよく組み込んだ部隊を編制することが決まったのだ。
「そちらも終わりましたか」
「……はい、助かりました。ベルナール重歩兵長」
「いえいえ」
　ベルナールは手元の書類を見下ろしながら微笑んだ。安堵の滲んだ、以前では考えられないような優しい笑みだ。神官戦士団、総勢４３１名。王国軍が魔物復活後に徴兵した新兵込みで約３００名、山賊が５０名ほどであることを考えれば、彼らの陣容がいかに桁外れか一目瞭然だろう。勝利できたのは前述した理由あってだが、その弱点を王国軍に取り込む形で克服した以上、その影響は単に兵数が倍になっ

ただけには留まらない。守勢を維持することは勿論、攻勢に移ることだって視野に入る。兵数は確かに王国を脱出した頃よりも少ないが、マリーベルのように兵差を覆せる強者の存在もある。絶対数では言い表せないほどの戦力向上、そしてなにより敗戦ムード一色だった王国軍内に勢いが出て来た。

「我が軍の陣容も見違えましたね。無いのは騎兵くらいでしょうか」

「騎兵は……ある意味仕方ありません。あまり運用経験がありませんから」

騎兵。一般に地上を走る馬上にて武を振るう兵士を指し、エスタのような天馬に跨る騎士は、一般的に天馬騎士と呼称される。騎兵の衝突力は唯一無二、重騎兵の突撃は地上戦の花形ではあるが、ログレス王国の歴史の中にそれを運用した経歴はなかった。主となる理由は三つ、経済的な理由、地理的な理由、そして外交的な理由である。

一つ目の経済的な理由として、現代のログレス王国は農業を主力産業とする小国であったこと。平時より騎兵部隊を編制できるほどの馬を養い、騎馬隊を訓練するほどの財力を有しなかった。二つ目の地理的な理由として、王国の土地がそもそも騎兵の運用に適さないことが挙げられた。ログレス王国は全体的に地形が起伏に富んでおり、森林地帯の開拓も十分でない。騎兵のように悪路の影響を強く受ける兵科よりは、弓兵のような飛び道具が強い地形だ。突撃の衝突力を十分に生かせない立地の中で、騎兵という金食い虫の優先順位が下がったのは当然だった。そして最後に外交的な理由として、王国は平和だった。唯一の火種である南方の紛争に介入することもなく、自国の防衛を念頭に置いた軍備しか整えておらず、攻勢のための兵科を優先する理由もなかった。

それらの帰結として、王国にとって部隊単位の騎兵は不要であり、最精鋭たる近衛騎士が馬術を扱える程度でよかったのだ。だがそれも平和だった頃の話。天馬騎士が寡兵でありながら優秀な働きをみせる等、王国軍が復活する過程で”魔物襲撃前に戻る”では最早足りない。新しい軍隊への脱皮が必要なことの必要性を、軍を指揮するものとしてひしひしと体感させられた模擬戦であった。

「……そろそろ夕飯の時間でしょう。行きましょうか」
ベルナールに促され、書類を片付けたケイティらは食堂へと向かった。ひとときの休息といってもいいその合間にも、二人は軍務の話を止めない。何処までも堅物で色気に欠けた、似た者同士だった。
「神官戦士たちは我が方の陣容を受け容れるでしょうか」
「そこはドルカ殿の手腕に期待しましょう」
とはいえ、そちらについてはそこまで難しい話ではないとケイティは考えていた。終わってみれば終始優位に立ちまわっていた山賊は勿論、終盤には王国軍本隊による逆襲も行ったことにより力は示した。模擬戦の後、神官戦士団はあくまで自主参加とした訓練には多くの重歩兵が集った。ケイティ直々に風評を集めて回ったものの、王国軍に対して悪い感情を抱いている者は意外と多くなかったのだ。彼らの不満は大方、山賊という得体のしれない非正規兵への疑念であり、そちらは模擬戦を通じて実力を身を以て知ることで解消できていたとのこと。とはいえ『山賊如きに負けていてはならぬ、もっと強くならねば』といったモチベーションの兵士もそこそこの数がいた。
「……あとは山賊ですね」
ベルナールの言葉に首肯を返すケイティ。
味方の問題と言えば山賊――しかし渦中にあるのは、純粋にはモーティマ山賊団ではない。王子がモーティマ山賊団の団員に対する恩赦を認めたという噂が広まっており、小規模の山賊団や個人単位の無法者がモーティマ山賊団に入団しつつあるのだ。今やモーティマ山賊団の構成員は初期の彼らの倍以上にまで膨らんでいる、セシリーから伝えられた情報にケイティは頭を抱えた。山賊団への恩赦など迂闊が過ぎる、団に入るだけで簡単に恩赦を得られてしまうではないか。憤ったケイティはその日の昼食前に王子を呼び出して詰問したものの――
『王子は人同士が争っている場合ではないとお考えです』
と、王子の隣にいるアンナにスパッと切り捨てられた。王子の恩赦は、山賊『団』への恩赦だとかそんな言葉遊びを弄する次元以前の問題だったのだ。モーティマが面倒見ていられる人数の間はいいが、そ

の均衡がいつまでも続くはずがないとケイティは考えている。山賊団の力は今の王国軍に必要なものだからこそ、なるべく早く対策を講じる必要があった。

屋敷の外へ出たケイティらを、沈みかけの夕日が出迎えた。深緑の町に神官戦士団を含めた兵力を収容できる施設がないため、兵たちは郊外に設営した野営地で暮らしている。そして食事については、接収した町の酒場で作り、それを数十人単位ずつにグループ分けされた兵たちが順番に取りに来るのだ。

ケイティは酒場に辿り着く。町の規模の割に席数も多く広々としているのは唯一の飲食店というのもあるが、この深緑の町が北の国との交通の要所だというのも大きい。かつて北の国との交易を担う様々な国の人々が酒を酌み交わした、そんな酒場に今集っている王国軍、神官戦士団、山賊といった国籍も生活も違う者たちだというのも因果かもしれない。

「んぁ、ケイティと……もしかしてお前、金ぴかか？」

酒場に入ってすぐ、モーティマが入り口からケイティたちを見つけた――厨房の向こうから、金色の鎧を纏っていないベルナールに怪訝なまなざしを投げかけながら。

「ベルナールだ。ちゃんと覚えてもらおう」

「ところで貴方。どうして厨房に立っているのですか？」

「神官共の飯も作らなきゃいけねぇから手ぇ貸せって、ユリアンに呼ばれたからきたんだが」

ケイティたちは顔を見合わせたが、当然彼らの知る所ではない。元々ユリアンはその辺りの相談はルーズな方だ。そして彼がケイティたちに、悪い言い方をすると忖度なしに行動すればするほど、大抵の出来事は上手く回ってしまうのもまた事実だった。

「おい」

ガタイの良い男が、モーティマに声をかけた。

「ん？　てめぇ見ねえ顔だな。神官か？」

「……あぁそうだよ！　てめぇんとこのデカいのに、危うく殺されか

けるとこだったぜ」
「あー、フューネスが相手だったか。災難だったな坊主。ほれ、詫び代わりにちょっと大盛りにしてやるよ」
「え、あ、あぁ……ありがとう」
　面食らいつつも感謝を述べ、その場を後にする。ケイティらの心配をよそにモーティマは上手く立ち回っていた。モーティマという人間は基本的に人情家である。賊という響き通り冷徹で残酷な面を見せる一瞬もあるが、それはむしろ山賊としての体裁を守る場面であることが多い。その人となりを知らしめる上で、神官たちが絶対に立ち寄らねばならない厨房に配備したユリアンは慧眼だと内心で褒めると同時に、自分の選択肢にはないものだとケイティは思う。
　そしてなにより山賊のみで回している厨房で、なおかつ食材も十分でないはずであるのに、王国軍の炊飯よりも美味だったことに、ケイティとベルナールは、口に出さずとも複雑な感情を抱くのだった。
「あー、てめぇクリフトファーだったか」
「おや。覚えていてくださりましたか」
「そりゃお前、その今にも死にそうな肌の色見たらな……確かお前さんの飯はもう渡したはずだが」
「えぇ。ドルカママからの伝言です。今ようやく鎧を洗い終えた方がこちらに来ます。３０食ほどお願いできますか」
「あぁ分かった。これで最後の３０食だな？　まぁ何とかしよう」
　去っていく神官を見ながら、モーティマがぼやく。
「ようやく神官共の顔もちょっとずつ覚えて来たぜ……向こうは絶対俺のこと知ってるってのが不思議だが」
「それはそうでしょうね……」
　彼の容貌を一度見て忘れられようもないだろうことは自明だった。ケイティは染みついた苦笑を浮かべつつも、豆と獣肉のスープを完飲する。
「飯終わった奴からとっとと寝所に戻れー！　従わねぇ奴からそこのアリシアにぶちのめさせるからな！」
「ひ、人をそういう扱いしないでください！　私は近衛騎士で、この力

は王家を護るためにあって――」
　モーティマが酒場中に響く大声で叫びつつ、カウンターのアリシアを指さした。指を差された側は可愛らしい抗議の声をあげる。理由は単純で、酒場の半数の席は既に食事を取り終えた者で埋まっており、中には何処からか入手した酒を飲んでいる者までいた。居残っている大半は山賊だが、一部には王国の兵士や神官の姿もある。モーティマが号令すると、それらは渋々席を立ち始めたが――
「おぉ～、嬢ちゃん、ちんちくりんだが顔は中々いいじゃねぇの……！」
「おい馬鹿よせ、アレだけは止め――」
　もう一人の制止を振り切り、一人の山賊が頬を真っ赤に染めながら朧げな足取りでアリシアににじり寄った。明らかな酩酊状態だった。彼はアリシアに手を伸ばし――
　振り向きざまにアリシアが放った正拳が、男の腹を突き刺し、一瞬地から足が離れる。それは即ち、外からかけられた力を減衰する手段が消滅するということ。足払いの力、その場で車輪のように一回転したのち、無慈悲にも地面に叩きつけられる。
「――私がハルバートを持ってなくてよかったですね。そのお腹に風穴が空いてるところですよ」
　結局その山賊は、他の山賊らに引きずられるように、店を後にした。アリシアに冷ややかな眼差しを送られながら。一部始終を、アリシアの隣席で見守っていたマリーベルは、ほとほと呆れたとばかりに目を伏せつつ、苦言を呈す。
「言ってることがさっきと真逆じゃない。そういうところが積み重なって、子供っぽいって舐められるのよ」
「むぅ……」
　頬を膨らませてから食事を再開するアリシアの背中は、子供っぽいと形容せずにいられなかった。
「いやしかし、流石近衛騎士ということでしょうか。あの無法者たちからも一目置かれているとは」
　一方、肯定的な言葉を口にしたのはベルナールだった。

「……これは使えるかもしれませんね」
「ケイティ殿……？」
ケイティはほくそ笑んだ。